

富沢の民俗



空から見た富沢地区

写真右から J R 御殿場線、県道沼津小山線、黄瀬川、黄瀬川に架かる富二平橋、
国道246号線、富沢地区集落、愛鷹山裾と東名高速道路。



深良用水 穴堰



集落内を流れる用水とカワバタ



黄瀬川端の盆送り（橋は富二平橋）



子安講（公民館）



不動堂



不動さんの湧水（右の階段を登ったところが上の写真）

調査の概要・例言

一 調査の目的

裾野市史民俗編は平成八年度の刊行を予定しており、現在は基礎資料収集のため、市域を旧村単位で五地区に分け、民俗調査を行っている。五地区とは、旧小泉村・旧泉村・旧深良村・旧富岡村・旧須山村で、これらは明治の町村制で誕生した村々であるが、裾野市として合併後も西地区・東地区・深良地区・富岡地区・須山地区としてそれぞれに特色ある発展をしてきた。地区ごとに地理的環境や産業構造などが異なっていることから、裾野市域の全体像を知るための準備段階として、これら各地区のうち、伝統的なまとまりを持った地域を順次調査対象としてとりあげ、集中的に資料の収集にあたっている。

富沢はその第四回の調査として選定したものである。富沢を対象とするにあたっては、この地が近世を通じて一村として行政的なまとまりがあったことと、渡辺家文書が豊富に残されていることが大きな理由にあげられる。また、富沢は、裾野市東部の箱根山に対して西の愛鷹山の東麓にあって、市の最も南西部に位置している。長泉町に隣接し沼津市には最も近い地域である。さらに、愛鷹山のかかりはたいへん深く、特徴のある生活を伝承してきた。この民俗調査は、以上のような点を考慮に入れつつ、集中的に行つたものである。

富沢は内部が上・中・下の三モヨリと、新興住宅地の南町で構成される比較的まとまった地域である。調査は南町を除き細部にわた

って行ない、富沢の民俗を総体としてえがくよう努めた。

二 調査期間

民俗担当委員全員による合同調査は、平成四年七月二日から二四日の四日間、拠点を富沢公民館において実施した。また、補充調査として平成五年二月一〇日から一二日、および、七月二三日から二六日の二回にわたって行つた。

なお、以上の他にも、調査委員は必要に応じて個別に調査を行なっている。

三 調査関係者

調査にあつたのは、市史編さん委員会民俗担当の福田アジオ専門委員をはじめ六人の調査委員と一人の臨時調査員、それに市史編さん室職員である。調査者の氏名と執筆分担は次のとおりである。

役職	氏名	調査及び執筆分担（）は調査時の所属
専門委員	福田アジオ	序章
調査委員	岩田重則	第一章
	宮村田鶴子	第二章第一節
	斎藤弘美	第二章第二節、第六節
	杉村 斉	第三章第一節・第三節
	松田香代子	第三章第二節・第四節
	新谷尚紀	第四章
臨時調査員	高橋逸人	(明治大学学生)

四 調査方法と調査経過

調査にあたっては区長さんにご尽力いただき、話者のリストアップをしていただくとともに、公民館をお借りして、そこを拠点に話者を訪問し、個別面接調査をさせていただいた。

調査委員は各々の調査分担任テーマに基づき聞き取りを行ったので、話者の方々には何人もの調査員が入れ替わり訪れる場合もあるなど、ご迷惑をかけたことも少なからずあったであろう。また、念仏講、氏神社祭りなどの特別の日程の民俗行事については、その都度担当者が富沢を訪れ、観察・聞き取りによる調査を行った。

なお、調査委員が行くことのできない場合は、編さん室職員が行事その他の写真撮影を行なった。

調査期間中は裾野市内に合宿し、毎日二時間余りのミーティングをして、調査上の課題や問題点を出し合った。調査終了後は、各自の調査結果をカード化して提出し、共通の資料として分類し、関連事項を執筆者に分配した。以上の経過で、本書は作成されている。

五 編集上の留意点

編集は、福田アジオ専門委員の指導のもとに、杉村斉・松田香代子両調査委員の協力を得て新谷尚紀と市史編さん室の中村恒之・濱田明が行った。提出された原稿は編集段階で記述上の統一をはかり、民俗語彙と考えられるものはカタカナ表記としたが、一般に通用するものや漢字をあてたほうが理解しやすいものは例外とした。数字表記については、民俗語彙として十五夜、二十三夜講などは十を入れ、一般には十を抜かした表記とした。図表は執筆担当者が原図を

作成し、写真は調査員や編さん室で撮影したものを使用した。

六 調査協力者

調査に話者として協力してくださった方々、あるいは貴重な資料を提供してくださったり、お宅の中を拝見させていただいたり、お忙しいところをさまざまなお手伝いいただいた皆様には大変お世話になった。また、校正をお手伝いいただいた服部芳太郎・西尾信治の両氏、特に西尾氏には調査の準備段階から親身なお世話をいただいた。心より感謝申し上げる。報告書の完成をもって、お礼の言葉にかえさせていただきたい。

話者名簿(順不同・敬称略)

〔富沢〕

- 浅倉 易(大正三年生)
- 田口 勝夫(大正七年生)
- 西尾 信治(昭和二年生)
- 服部 節子(大正一三年生)
- 服部 三雄(大正一三年生)
- 服部 きよ(明治三五年生)
- 服部 素則(明治四四年生)
- 服部 みよ(大正二年生)
- 服部 さだ(明治三〇年生)
- 服部 芳太郎(大正二年生)
- 服部 きよ子(大正五年生)
- 渡辺 喜市(大正一〇年生)
- 渡辺 きん(大正二年生)
- 渡辺 茂(大正四年生)
- 渡辺 武彦(昭和一四年生)
- 渡辺 園子(昭和一九年生)
- 渡辺 富雄(大正三年生)
- 渡辺 博文(昭和一六年生)
- 服部 弥作(大正五年生)
- 服部 まさ江(大正三年生)
- 高橋 なみ(大正九年生)

渡辺 さよ(大正九年生)

渡辺 ちよ(大正四年生)

渡辺 隆徳(昭和六年生)

服部 なを(大正七年生)

服部 克巳(昭和一六年生)

渡辺 文江(明治四三年生)

服部 こう(大正七年生)

浅倉 みつ(大正八年生)

渡辺 かず子(大正八年生)

服部 梢(昭和一〇年生)

服部 広吉(大正六年生)

〔桃園〕

歌崎 はな子(大正一四年生)

目次

口 絵
調査の概要・例言

序章 富沢の歴史と民俗

第一節 新しい歴史と民俗

新しい歴史の動向／社会史と民俗学／民俗学と市史

民俗編

第二節 富沢の集落とその歴史

都市化の進む富沢／一致する大字と村落／富沢の歴

史的位

第三節 民俗の特色

単一組織の民俗／穴堰と富沢／家をめぐる民俗／モ

ヨリと民俗／愛鷹山をめぐる民俗／残された課題

第一章 生活環境の民俗

第一節 集落と水田

(一) ムラの立地条件

愛鷹山東麓のムラ／焼き場／橋／進展する宅地化／

国道二四六号線

(二) 集落の様相

ムラの範囲／モヨリと講／区と班

第二節 深良用水と愛鷹山

(一) 水と生活

穴堰／ノボリセギと堤／ミツカセギ／水配人／ゼナ

ザワ／水喧嘩／カワバタと井戸／不動さんの湧き水／

関東大震災／水車／クロツカニ

(二) 山と生活

愛鷹山／オオニユウカイ／炭焼き／クヌギ／サンア

ザキヨウユウニユウカイ／草刈り場／モシキ／四七

人区／萱／屋根替え／山の荒廃と動物／赤土とサツ

マ／小麦

第三節 動物と気候

(一) 動物

馬／キツネ／害虫

(二) 気候

陽気／富士山

第二章 社会と生活

第一節 家と屋敷

(一) 屋敷構えと付属屋

ヤシキとその境界／屋敷取り／付属屋／HK家の付

属屋の使い方／屋敷神／屋敷墓

(二) 間取りと部屋

間取りと各部屋の名称／屋内神と仏壇の位置／下モ

ヨリの旧WN家の間取り／下モヨリのHN家の間取

り／ニワの使い方／居住部分のハレとケ／食事・だ

らん場の場／接客の場／就寝の場・出産の場／人寄

	セ・儀式の場／養蚕と機織りの場	
(三)	家の手入れと生活環境	36
	屋根替え／茅／屋根替えの準備／葺き替え／HN家の屋根替え／大そうじ／生活の水とその利用／燃料	
(四)	新築	41
	建て替えとその手順／地鎮祭とジツキ／建前と棟梁	
	送り／家移りとヤビマチ	
第二節	家族と親族	43
(一)	家族	43
	初子相続と女性の生活／嫁と姑／子育てと行商／オヤネンブツと位牌分け	
(二)	親族	44
	ムラシンセキ／カネオヤとコブン	
第三節	村落の形と組織	46
(一)	村の範囲と地域区分	46
	村内区分と行政区／モヨリと旧戸	
(二)	ムラの施設と道・境	49
	ムラの境／ムラの道／ムラの集会所／ムラの広場／ムラの構成員	
(三)	旧戸と新戸／地主と小作／地主の生活／ムラの役職／ムラの寄合	52
第四節	共有と共同	54
(一)	山をめぐる共有と共同	54
	共有地／カヤバ	
(二)	水をめぐる共有と共同	55

	飲み水と生活用水／セギ	
(三)	農作業をめぐる共有と共同	56
	イイ(結い)／水車	
(四)	神社・墓地をめぐる共有と共同	57
	ムラの氏神／不動と雨乞い／山の神／墓地とヤキバ	
(五)	ムラの諸集団	59
	葬式組／屋根替え・新築／講集団／ドンドンヤキ／青年団／年寄りと念仏	
(六)	世間との交流	62
	信仰の広がりと交流／買い出しと行商／遊び	
第三章	時間と民俗	63
第一節	生活の時間・生産の時間	63
(一)	生業	63
	稲作	
(二)	水田の土質／水利／シロカキ／種もみとナワシロ(苗代)の準備／田植／稲刈り	64
(三)	カイコンの畑とサツマ(薩摩芋)の栽培	66
第二節	一日の生活	66
(一)	仕事の一日	66
	時を知る／朝飯前／夜なべ仕事／挨拶	
(二)	食事と生活	67
	食事の回数／主食／うどんと蕎麦／ソバガキ／ナベヤキ／草餅／蟹汁／サツマイモ／干し芋／干し大根／魚の行商／味噌の作り方／醤油の作り方／生活用水	

第三節 飲料水／調理用具

第三節 一年の生活……………71

(一) 年中行事……………71

- 1 正月の行事
元旦から七日正月まで／オセチ(お節)と雑煮／
オソナエワリ／二番正月／山の神講
- 2 二月の行事
ジロウツイタチ(次郎一日)／マメマキ／ハツ
ウマ(初午)／オコウボウサン(お弘法さん)
- 3 三月の行事
彼岸／オフドウサン(お不動さん)
- 4 四月の行事
雛節句
- 5 五月の行事
五月の節句
- 6 七月の行事
マンガアライ(馬鞞洗い)
- 7 八月の行事
七夕／盆
- 8 九月の行事
十五夜
- 9 一〇月の行事
十三夜／愛鷹神社祭典
- 10 十一月の行事
オイベツサン

第四節 一二月の行事

第四節 一生の生活……………79

(一) 産育……………79

- 1 妊娠と出産前
妊娠／トリアゲバアサンと産婆／オビイワイ／
デミマイ／安産祈願
 - 2 出産
出産／産飯／後産／産湯／乳付けと産婦の食事／
産後と産の忌み／ネネミと出産祝い／お七夜と
名付け／お宮参り
 - 3 成長過程
初節供／初誕生／シンキヤク／七五三／子守／
子育て祈願／お不動さん／癒瘡祝い／法印さん／
佐野小学校／生れ年／生理／青年倶楽部／一人
前
- (二) 婚姻……………84
- 1 縁談の成立
通婚圏／クチキキ／見合い／仲人とカネオヤ／
サケ／嫁入り道具
 - 2 祝言
ムコイレ／嫁入り行列／サカズキ／カオミセ／
本緒／オカタミ／ミツメ
- (三) 厄年と年祝……………87
- お伊勢参り／病氣平癒祈願／百万遍／厄年／年祝

(四) 葬送と墓……………88

1 臨終から葬式準備まで

死の子兆／臨終／北枕／枕飯と枕団子／葬儀の手伝い／キチユウミマイ／葬具の準備

2 トムライの儀礼

トムライ／お通夜／湯灌／納棺／出棺／告別式（本葬）／モチツキ／アナツポリ／野辺送り／ハマオリ／キチユウ／子どものトムライ

3 供養と祖先祭祀

墓参り／初七日／四十九日／オヤネンブツ／ヒヤツカンチ／ネンカイ

4 墓制

土葬／火葬／墓地／屋敷地の墓地／シモ・ハラ
の墓地／寺の墓地／カロウト

第四章 信仰……………96

第一節 神社と小祠……………96

(一) 富沢全体でまつる神……………96

氏神・愛鷹神社

(二) 地区ごとにまつる神……………96

1 上モヨリで祀る神

山の神／さいの神

2 中モヨリで祀る神

山の神／さいの神

3 下モヨリで祀る神

山の神／さいの神……………98

第二節 寺院と堂……………98

(一) 寺院と檀家……………98

(二) 堂……………99

富沢公民館／庵寺

(三) 講……………99

子安さん（淡島講）／観音さん／ヒネンブツ（日念仏）／不動さま／大師講／秋葉講／大山講／庚申塚

第三節……………101

家ごとにまつる神仏……………101

神明さま／観音さま／屋内の神々

付録一……………102

富沢・渡辺家文書1 駿州駿東郡富沢村明細帳控……………102
（安永六年八月）

付録二……………109

富沢・渡辺家文書2 駿河国駿東郡富沢村……………109
（文化十三年二月）

付録三……………111

富沢・渡辺家文書3 相定申證文之事……………111
（享保元年八月）

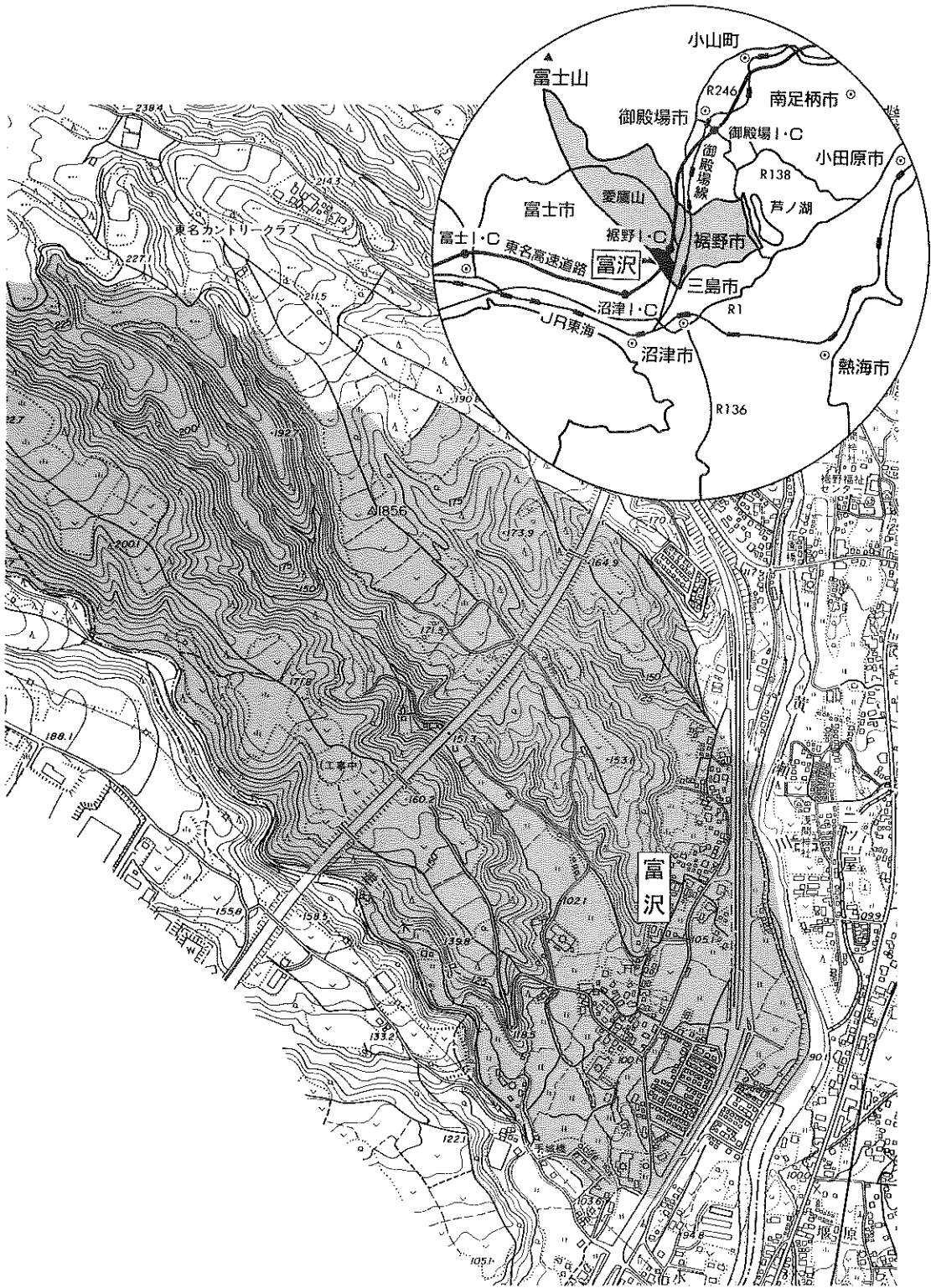
付録四……………112

富沢・渡辺家文書4 乍恐以書付奉申上候……………112
（寛政五年十一月）

編集後記……………

裾野市史編さん関係者……………

索引……………



序章 富沢の歴史と民俗

第一節 新しい歴史と民俗

新しい歴史の動向 学校で教えてもらった歴史は、幕府とか政府の動向を中心にした政治の歴史に中心があったと、多くの読者は記憶しているはずである。大化の改新、鎌倉幕府の成立、南北朝の対立、桶狭間の戦い、豊臣秀吉の政治、江戸時代の三大改革、明治維新など、その歴史用語を思い出してみれば、教科書に基づいて学校の教室で教わる歴史の内容は明らかである。ところが、大きな書店に行つて歴史書のコーナーの前に立つてみると、そこに並べられている最近の歴史書はそのような印象とは大きく異なる本が多いことに気付く。夫婦関係の歴史、病氣と治療の歴史、子供の理解と子育ての歴史など、ごく日常的事をおこつたことを歴史書として記述している本が多い。

また、歴史と言えば専ら文書記録という文字資料に頼つて記述していた。したがつて、本は最初から最後まで文字で埋まっているというものが多かった。ところが近年の歴史書を見ると、文字以外の形態で過去から残されたものを積極的に活用していることが分かる。特に絵とか図を活用するものが目立つ。画像資料の積極的利用は、歴史の内容を豊かにしてきた。歴史書を開いてみれば、多くの古い絵や図が挿入されていて、読む人を楽しませてくれる。むしろ、図

像が中心で、文字は補助というような歴史書も存在する。

社会史と民俗学

このような日常的な事象の歴史的姿を文字資料以外の様々な資料をも活用して描くことが、この二〇年間余りの一つの大きな動向と言える。この新しい傾向の歴史研究を一般に社会史と呼んでいる。単に社会史と言わずにアナール学派の社会史という場合も多い。この用語が示すように、新しい歴史研究の立場や方法は日本で形成されたものではない。アナールという言葉がフランス語であるように、フランスの歴史研究からの影響で日本でも二〇年ほど前から活発になってきた新しい歴史研究である。この社会史が日本でも盛んになりつつあった初期には、それまでの政治史中心の歴史を研究してきた研究者からは、歴史は天下国家を扱うものであり、日常の茶飯事を扱つたものは歴史研究とは言えないと批判されたこともあった。しかし、このような日常のありふれたことを人々は経験しつつ、その全体が大きな歴史のうねりとして今日まで展開してきたのである。政治権力とか政治制度あるいは経済関係のみが歴史なのではない。その後、このことは次第に理解されるようになり、社会史は一つの立場としての位置を占めるようになった。当然のことながら、地域の歴史を明らかにする市史もその傾向をもつようになつてきている。日常生活を重視した市史になつてきて、地域の人々のより親しめる市史に近づいてきていると言える。

フランスでアナール学派の社会史が大きく発展したのは第二次世界大戦後であるが、突然表れたものではない。その出発はすでに一九三〇年代にあつた。フランスの農村の歴史を新しい方法で研究したマルク・ブロックという歴史学者に始まると言つてよい。日本でも早くから有名なマルク・ブロックは逆行的方法と自分の歴史研究

の方法と名付けて紹介している。ちょうど映画フィルムを終わりの方から逆に映していくように歴史を見るというものである。現在から出発する歴史研究を強調した。日本では、現在なお学問は欧米からの影響とか輸入という性格をなくしていない。そのためマルク・ブロックの本を読んで新しい歴史研究の方法を提案するということが行われてきた。

しかし、少し注意してみれば、マルク・ブロックがフランスで逆行方法を提唱し研究を実践していたと同じ時期に、日本でもそれとは関係なく同様の認識をもって研究していた人物がいた。その人物が柳田国男という人であった。随筆や紀行文作家とか思われている柳田国男は、その日常的な文章を通して日常生活のなかにも歴史があることを示した。その新しい歴史研究の方法はアナール学派の社会史に非常に似通ったものであった。

柳田国男は自分の提唱した新しい歴史研究の方法を民俗学と名付けた。現在の生活のなかに歴史研究資料を発見し、それによって文字資料では明らかにできない人々の日常生活の歴史が究明できるところを主張した。民俗学は一九三〇年代に柳田国男によってその全体像が示された新しい歴史研究の方法であった。現在の生活のなかに資料を求め、日常生活の歴史を人々の喜怒哀楽をも含めて把握するのが民俗学である。今までほとんど文字化される機会もなく、先祖から伝えられて今日まで来て、現に行われているものを資料として把握することで、歴史を明らかにしようとする。その基礎資料は民俗調査という方法で、実際に暮らしている人々の生活のなかから取り出すのである。断片化している文字資料とは異なり、様々な事柄の相互関係が明らかになり、またそれを行うことの喜びや感動を知

ることもできる。

民俗学と市史民俗編 裾野市史の一巻として民俗編が置かれたのは、そのような民俗学の意義を認めて、その立場から書かれた一巻を加えることによって市史を豊かにしようとする関係者の英断によるものであった。市史編さんにあたって、私たちは市内全域の民俗調査を行い、今日の生活のなかにある上の世代から受け継がれてきているさまざまな事象を把握し、それを整理検討して、文字資料では知ることができない歴史を明らかにしようとしてきた。それは過去の特定の時代を示すものではないが、しかし世代を超えて続けられてきた事象を持続性の歴史として明らかにし、また徐徐にはあるが変化してきた長期波動の歴史を明らかにしようとしてきた。

その成果の最終的な姿は『裾野市史民俗編』として示されることになるが、それは恐らく市史の他の巻とは大きく異なる印象を与えることになるものと思われる。

今までの三冊の民俗調査報告書に次いでここに四冊目の報告書を富沢の民俗として刊行できることによって、市史民俗編の編集はいよいよ大詰にきたと言えよう。これら四冊の報告書を基礎に、他の地域の調査結果を加えて、裾野市全体の生活を記述する作業に取り掛かることになる。

第二節 富沢の集落とその歴史

都市化の進む富沢 富沢は市域の南部にあり、愛鷹山麓に形成された村落である。黄瀬川は山麓に近い所を南北に流れているので、富沢の領域を形成する平地はあまり広くない。南北に狭い平地に山

麓線に添うかたちで細長く屋敷が続いている。その前面にわずかながらの水田があったが、今やその水田のあった所を新しい国道二四六号線が通り、それに伴い急速に住宅が立ち並ぶようになり、農村としての景観は失われてきている。現在、富沢の農業集落としての姿は、一つには集落の西側の愛鷹山へ刻み込んだ侵食谷の水田によって、もう一つには集落の背後の丘陵の上のゆるやかな面に広々と展開している畑に示されているに過ぎない。都市化が急速に進行しつつある地域と言えよう。

しかし、一步古い集落内に入ると、そこは農家としての構えを見せた家々が並び、静かで落ち着いた雰囲気になる。集落内の基本となる道はナカミチと呼ばれ、ほぼ南北に走っている。そして道の横にはきれいな水を勢いよく流している用水路がある。集落の中央部の道路横には氏神の愛鷹神社がある。そして、愛鷹神社の北側の高所にはかつて寺があったという敷地が残されている。かつてはここが富沢の中心であったものと判断できる。現在はこの辺りは静かな場所となり、中心はむしろ公民館前ということになるであろう。もちろん公民館は新しいが、ここには以前にはかつては子安堂があった。やはり信仰の場であった。

富沢のなかに古くから居住する農家は集落の中央部に集まっているわけではない。一般的な考えでは、中心部からしだいに周辺へと新しい家が増えていくのであるが、富沢ではその様相は窺われない。むしろ富沢のもっとも旧家と見なされている渡辺家は集落の北端に屋敷を構えているし、渡辺家に次ぐ古い家であると推測される服部家は逆に集落の南端にある。そして、中央に氏神と寺があるということになる。その点では最初から南北に細長い集落を形成すること

を考えたある種の計画的な集落であると言えよう。

家々は屋敷を連続させて、全体として一つの集落を形成している。屋敷の周囲は市域の他の集落のような屋敷林が囲むという印象を与えない。比較的屋敷林は少なく、その代りに塀や垣根が目立つ。屋敷の周囲を囲んで他の屋敷と区別するという点では同じであるが、屋敷林があまり顕著ではないのは、集落の立地が山麓であり、西風や北風があまり強く当たらないということが関係しているであろう。

一致する大字と村落 富沢は裾野市域のなかでは珍しく、大字のなかには一つの集落しかなく、その一つの集落で一つの村落となっている。今まで調査を実施し、報告してきた葛山、深良、茶畑はいずれも、大字のなかに多くの集落があり、その集落を基礎に社会的な単位が存在した。報告書の記述に示されているように、行事や儀礼は大字という大きな単位で行われることはほとんどなく、そのなかのモヨリ(最寄)と呼ばれる組織でさまざまな民俗は伝えられ、行われていた。モヨリが村落として機能している。それは裾野市域の一般的な姿というだけでなく、静岡県全体について言えるし、さらには東日本の全体的な傾向とも言える。それに対して、富沢は異なる様相を呈している。大字のなかには一つの集落のみがあり、当然のことながら大字が民俗を傳承し執行する組織となっている。富沢にもモヨリという組織がある。上モヨリ、中モヨリ、下モヨリという三つのモヨリである。これらは重要な組織であるが、完結した存在ではなく、あくまでも富沢内部の組織である。学術用語で言えば、村組と呼ばれる存在である。

大字は明治の町村制に先立つ大幅な町村合併に際して、合併され

てしまうそれまでの村を土地表示として残したものである。したがって、大字は原則として江戸時代の支配の単位であった村に一致する。大字富沢は近世の富沢村に一致する。葛山、深良、茶畑も同様である。それぞれ近世の村であった。それらの地域では近世の村は民俗の伝承母体ではなかった。それに対して、富沢は近世の村が民俗の伝承母体となっていることは大いに注目される点であり、ここに富沢の村落形成史の特質が示されていると言えよう。

富沢の歴史的位置 富沢がいつごろどのように開発されて、現在の村落になったのかは必ずしも明らかでない。集落の北端に大きな屋敷を構える渡辺家は屋号をカミというが、この家が富沢の開発に大きな役割を果たしたことはまちがいないであろう。渡辺家には大量の近世文書が残されており、そのなかには元和七年（一六二一）の年貢割付状をはじめ近世前期の多くの支配関係文書が含まれている。それらの文書の記載から判断しても、渡辺家の所有した田畑も多く、富沢で最大の土地所有者であった。その屋敷は広大であり、しかも富沢の主要な灌漑用水である富沢堰（穴堰）は、上流から富沢地内に入ると先ず渡辺家の屋敷内に入り、そこを通過するように流れており、用水の掌握管理という点でも渡辺家が重要な位置を占めていることは明らかである。恐らく、富沢堰の開発は渡辺家と密接に関係し、しかもそれは富沢村の本格的な成立にも関連していたものと思われる。

しかし、渡辺家一軒のみで富沢が開発されたのではないことは現在の伝承に示されている。富沢のシバキリ（芝切り）は七軒であるという伝承があり、その七軒の具体的な家も伝えられている。芝切り七軒とか草分け七軒という伝承は日本の各地に見られる。本州・

四国・九州ばかりでなく、沖縄にも伝承されている。それについてはすでに研究されており、「七」という数字に意味があり、必ずしも歴史的事実とは言えないと指摘されている。しかし、その七軒に該当する家々が村落内で伝承されていることは、富沢の人々の共同と連帯によつて開発されたということが人々の歴史認識として形成されていることを示している。渡辺家が重要な役割を果たしたとしても、その他の家々も早くから成立し、富沢村の本格的な形成に互いに力をつくし、共同して水路を開き、水田や畑を開発したものであろう。

第三節 民俗の特色

単一組織の民俗 富沢は市域のなかで南部に属し、今までの調査対象地域とは異なつて沼津や愛鷹山南麓の岳南地方との関係も検討が可能になると予想された。しかし、実際の調査結果では、岳南地方との関係が特に強調されるような民俗は見られなかったといつてよい。やはり黄瀬川流域の一つの村落として性格がはっきりしていると言えよう。

すでに指摘したように、富沢は近世の支配制度の村が一つの村落として存在して、そこにすべてが累積して民俗の伝承母体として存在してきた。市域の他の地区のように、大きな近世の村とその内部の多数の村落があつて、その村落ごとに民俗が伝承されてきたのは異なる。このことは富沢の民俗を非常に濃縮した、内容豊かなものにしていくことを意味している。ここではその特色に関係してくるとも思われる幾つかの注目すべき民俗を紹介しておく。

穴堰と富沢

富沢の水田を灌漑する用水は、黄瀬川に設けられ

た堰から取水する穴堰を基本とする。穴堰という名称は各種の文書に出てくるが、同時にこの堰のことを富沢堰とも表記する。この穴堰は黄瀬川で取水しているが、対岸の佐野堰、水窪大堰と同様に深良用水の一部である。深良用水の水利組織は三つの郷となっており、佐野堰から取水した水を利用する地区は中郷、大堰で取水して灌漑する地域は下郷と呼ばれるの対して、新川及び黄瀬川から直接取水する用水は一括して上郷と呼ばれる。上郷に属する堰は個別に本流から取水しているがその規模は小さく、その用水路の距離も大きくない。富沢堰は、その上郷のなかのもっとも下流にある点、また他の多くが黄瀬川の左岸にあるのに対して右岸にある点で特色がある。

富沢堰がいつごろ開発されたのかは明らかではない。深良用水の完成後に、その水を利用するために新たに設けられたものではない。それ以前から存在したものと推測される。このことが瀬名沢（佐野川）の水に対する権利が富沢にあるという主張に示されているのである。この富沢堰の特色は、黄瀬川で取水した水を富沢まで導水するためにトンネルを設けていることである。深良水門ほど大規模ではないが、やはり大きな土木工事が必要としたことは明らかであり、富沢に居住した先祖が従事したものであろう。この富沢堰の水とは別に愛鷹山から出てくる沢水を取水して利用する用水もある。侵食谷を灌漑する水であり、また富沢堰を補う水である。これはジスイ（地水）と呼ばれる。この相互の関係も注目される。

穴堰の水は灌漑用水として利用されるばかりではなく、富沢の人々の生活用水としても欠かせないものであった。毎朝早く用水路の水を手桶で汲んで、水瓶に入れるのが日課であった。それだけに用水路をきれいにするための努力も重ねられていた。

家をめぐる民俗

富沢でも市域の他の村落で行われている家族・親族に関する民俗はいずれも行われてきた。やはり一番最初に生まれた子が女子の場合、その女子に婿をとって相続させるという初生子相続の実例を知ることができた。また、位牌分けや親念仏も行われている。そして、当然のことながら、カネオヤ・コブンという親分・子分関係もかつては強固な社会関係であったことが判明した。

家の伝承として注目されるのに正月の食物禁忌がある。正月三日は餅でなく里芋を食べるといふ家があった。これはいわゆる餅なし正月の伝承であり、民俗学の一つの重要な研究課題となっている民俗である。餅なし正月の伝承は北関東はじめ東日本の各地に伝えられている。裾野の他の村落でも同様の伝承があるのではないかと予想される。餅なし正月に代表される食物禁忌伝承は地域としての伝承ではなく、個別の家を単位としているので、情報として知られる機会が少ない。今後注意深く調査を進めると共に、読者の皆様からの情報に期待したい。

モヨリと民俗

富沢ではモヨリは村落内部の区分組織であり、独立した伝承母体としての性格は弱い。しかし、モヨリ毎に山の神講はじめ各種の講は組織され、現在も行われている。特に各モヨリがそれぞれ別に山の神を祀っていることは注目される。同様に、道祖神も各モヨリ単位に一カ所あり、それぞれ別個にドンドヤキ等の行事を行っていた。しかし、モヨリが独立して意思を決定して行動することはなく、また共有財産や共同施設をもつことはない。富沢の一部として分担することが基本になっていると言える。

愛鷹山をめぐる民俗

愛鷹山は富沢のすぐ後ろに迫っている。富沢はその山麓に立地している。したがって、愛鷹山との関係は深

い。愛鷹山を採取の場として利用してきた歴史は古く、その長い過程のなかで様々な権利関係が形成されてきたことが現在の入会慣行のなかに示されている。オオニユウカイ（大入会）という広域的な入会、三字共有入会という近隣の三地区の入会、そして富沢のなかの特定の権利者のみの入会と三種類存在している。それぞれの利用形態の相違は注目される。富沢は近世の村、すなわち大字が一つの村落として存在してきたので、入会の権利関係も比較的明確になっていると言えそうである。

残された課題 富沢で調査をさせていただいたのであるから、当然のことながら記述されるべき問題で今回の報告書で記載されなかった事柄も多い。その一つに黄瀬川との関係がある。灌漑用水や生活用水は穴堰（富沢堰）であったとしても、集落のすぐ東側を深い谷を形成して流れる黄瀬川との関係もいろいろな伝承としてあつたはずである。橋がなく、対岸との交流・往来についても工夫が必要であった。また遊び場としての黄瀬川、他界へ連なる黄瀬川という面についても注意が必要であった。葬儀に際してハマオリを行うのは市域の他の村落と同じであるが、その場所はかつては黄瀬川であったという。これもより詳細に記録するとともに、その他の儀礼における黄瀬川の意味も追求すべきであった。

集落背後の丘陵は愛鷹山の末端部を構成するが、この部分の土地利用と開発についての記述ができなかった。現在畑として広がっている土地の開墾については、富沢の人々の額に汗しての努力の成果であったと思われるが、その苦勞を伴った開墾の民俗について詳細に記録しておきたいものである。その点で具体的な山地の利用についても調査が十分ではなかったと反省している。

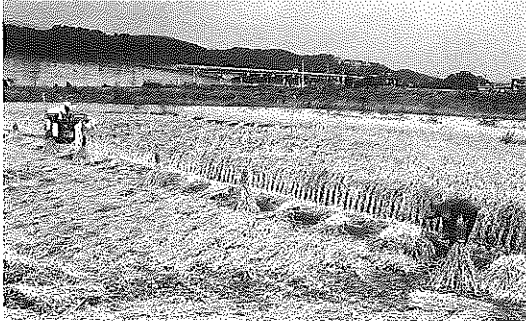
その他全般的に民俗として把握し記録すべき事項で欠落しているものが多い。折角の機会を富沢の方々が与えてくださったにもかかわらず十分にそれを生かしきれなかったことが、この報告書の記述によって明らかになっている。しかし、同時に多くの注目すべき民俗を把握できたことも事実であり、『榎野市史』民俗編の編さんにあたって貴重な資料を記録することができた。

（福田アジオ）

第一章 生活環境の民俗

第一節 集落と水田

(一) ムラの立地条件

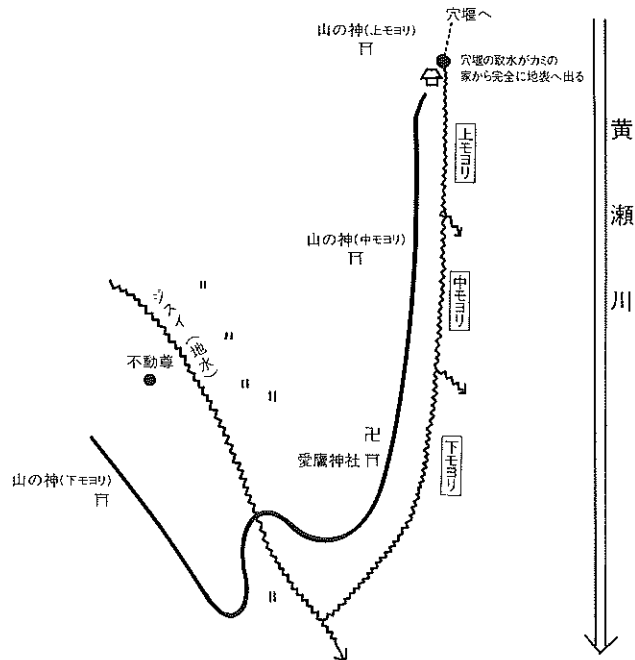


集落と黄瀬川との水田

愛鷹山東麓のムラ 富沢は、愛鷹山東麓のムラである（図Ⅰ-1・参照）。富沢の人々は、愛鷹山東麓を北から南へ流れる黄瀬川と、愛鷹山との間に集落を形成し、生活を営んできた。黄瀬川を基準と

して見れば、上流地域には桃園（定輪寺）ムラが、下流地域には南一色（長泉町）ムラが位置している。黄瀬川の対岸は二ツ屋（新田）ムラである。

したがって、富沢の集落を中心に、周囲の生活環境を見渡すと、富沢は愛鷹山を背後に控え（西側）、黄瀬川を前面に見る（東側）位置に存在しているといつてよいだろう。そして、富沢の集落は、土地を削るようになして流れる黄瀬川からみれば、やや

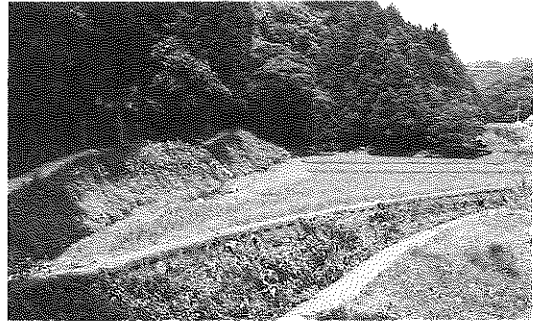


図Ⅰ-1 富沢環境概念図

台地上にあり、上流の穴堰から取水した深良用水がこの集落の中を、黄瀬川とほぼ並行して北から南へと流れている。この用水が、集落と黄瀬川との間の水田を灌漑しているのである。

このような集落の立地条件は、愛鷹山東麓のムラでは、大畑や桃園も同様である。特に、畑作の卓越したムラである大畑は、明らかに黄瀬川から一段高い台地上に集落を形成している。

そのために、同じ愛鷹山東麓のムラでも、愛鷹山から流れ出た小河川が洞を切り拓き、洞に沿って集落と水田が存在している上長窪



不動尊前面の水田

・元長窪（長泉町）や、葛山の山城モヨリ（最寄）などは、明らかに異なる景観を持つている。富沢の場合、愛鷹山からの小河川が不動尊の手前の洞を切り拓き、ここに深良用水を使用していない水田が拓かれているが、ここには集落は存在しない。ここに集落が存在しないのは、土地がやや低いからであると推定されるが、富沢における古くからの集落は、おおむね台地上に連続しているのである。

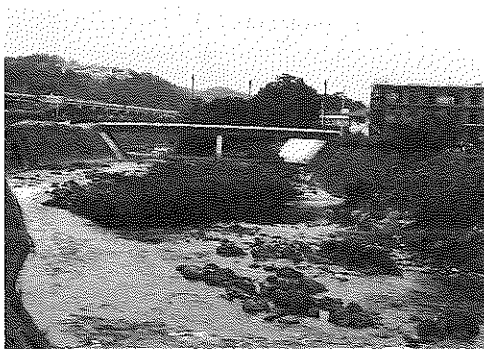
焼き場

この不動尊の前面に広がる一面の水田は、富沢の集落から見て、周辺に控えているといってもよいかもしれない。この水田から山地の方へ入ったところに、現在、ムラの運動場があるが、この左側の林の奥に、大きな穴を掘って作ったかつての焼き場跡がある。ムラで死んだ人を、ここで薪を積んで火葬にしたという。

なお、富沢の近くでは、現在、裾野市立西小学校の横の墓地のところにも、焼き場があったという。また、現在、富沢では、裾野市の火葬場へ行くほかに、三島市や長泉町納米里にある火葬場へ行くこともあるという。

橋

このように、背後に愛鷹山が、前面に黄瀬川があるために、富沢の人々がムラの外へ出るときには、必ず北側の桃園か、南側の南一色へ出て、そこから黄瀬川の橋を渡り、世間へと出て行かなければならなかった。富沢には橋がなかったのである。



黄瀬川（富二平橋の下流）



富二平橋開通式

そのため、富沢の人々にとって、富沢地内での架橋が、長い間の念願であった。その橋が一九九二年（平成二）三月に竣工した。名前を「富二平橋」という。「富」は「富沢」の「富」、「二」は「二ツ屋」の「二」、「平」は「平松」の「平」から採り、三つのムラの名称の冒頭の漢字を連結させて、橋の名前を冠し、同年八月二七日、盛大な開通式が挙行されている。

しかし、富沢では、かつて、黄瀬川に橋がなくとも、対岸へ徒歩で渡ることがまったくないわけではなかった。この「富二平橋」が架橋されたすこし下流の地点をナカヤカイドーと呼んでいたが、黄瀬川の水量が少ないときには、ここから対



南町の住宅街

七班のほかに、八班はカミというエエナ（家名）の渡辺武彦家の借家が組織し、一〇班は四班の軒数が増加したために四班から分離独立した。九班・一一班・一二班・一三班・一四班・一五班・一六班・一七班は新しく出来たマンションである。したがって、富沢のムラを班で見れば、合計一七班のうち一班から七班が昔から連続するムラであるが、

岸の二ツ屋へ徒歩で渡ることが出来たという。ここには、水面に出るほどの大きな石があったため、それをつたって渡ることができたのである。また、ここは子供が水浴をする場所でもあったという。

進展する宅地化 このように、富沢は、かつてはムラのなかに橋がなく、愛鷹山と黄瀬川に挟まれて、世間の交流が不便なムラであった。しかし、近年、裾野市域の他のムラと同様に、富沢でも宅地化の進展は著しいものがある。北側の桃園や、南側の南一色も同様である。

たとえば、富沢はかつて四六軒、合計七班で組織されていた。一班・二班・三班（下モヨリ）、四班・五班（中モヨリ）、六班・七班（上モヨリ）である。ところが、現在では合計一七班に増加している。

八班から一七班までは新しい「新戸」である。

このほかに、かつて富沢の水田であったところに、南町という独立した区があることも注意されなければならない。一部、南一色（長泉町）地内にもかかっているというが、大部分はかつての富沢の水田のあったところに住宅がつくられている。南町はもともと企業誘地をした跡地に昭和四〇年ごろつくられた。現在、約一二〇軒あるが、富沢とは異なる、独立した区を組織している。なお、富沢区に属する合計一七班は、「新戸」であっても、富沢の愛鷹神社の氏子として意識されているが、南町は完全に愛鷹神社の氏子からは除外されている。

国道二四六号線

このように、「新戸」が増加し、住宅地として



国道246号線の高架

富沢が発展しつつある最大の要因は、国道二四六号線のバイパスがムラを横切っているからであろう。もともと、国道二四六号線と富沢を結ぶ道は、南一色から通じており、富沢地内では、国道二四六号線は高架になっている。

(二) 集落の様相

ムラの範囲 富沢は住宅地として発展しつつあるとはいっても、それがイコール富沢のムラを消滅させつつあるというわけではない。すでに班の区分で見たように、おおむね上・中・下の各モヨリに属

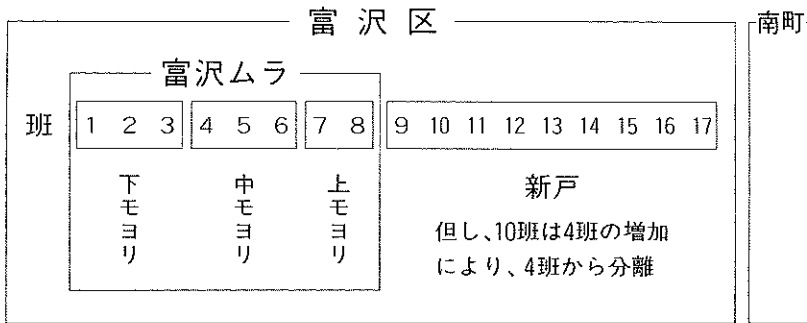


図1-2 富沢ムラと富沢区

する一班から七班までの家々は、古くからの富沢ムラの系譜を引くと考えてよいだろう。富沢では宅地化が進み、「新戸」が増加しつつも、富沢のムラを立体として見れば、ムラ（一班〜七班）は、「新戸」（八班〜一七班）と混在することなく、独自に存在を保ってきたのである。住宅が増加し混在して行っても、ムラの組織までもが混合して存在するようになったわけではなかったといえよう（図1-2・参照）。

モヨリと講 たとえばその様相は、モヨリを単位としておこなわれている各種の講が、「新戸」を参加させることなくおこなわれていることからうかがわれる。その、もともと代表的なものが、山の神様であろう。

富沢では、上モヨリ、中モヨリ、下モヨリ、それぞれが山の神を祀っている。山の神のこれらの祭りは、九月一六日と一月一六日で、祭りの日には、弓矢を作り、山の神の前で祀ることになっている。各モヨリとも、山の神を祀るために、順番に当番を回し、当日の夜、当番の家でオフルマイ（お振る舞い）をしている。そして、祭りの翌日は、ヤヒロイ（矢拾い）といって、山の神にお礼詣りをするこ

とになっている。中モヨリの場合、山の神の祭りを、以前は一二軒、現在では一軒減って一軒で執りおこなっている。当番もこの家々で回し、山の神がある地所についても、以前は個人の所有地であったが、現在では一軒の共有地になっている。

このほか、富沢でおこなわれている講に、大山講、秋葉講、淡島講、念仏講がある。大山講・秋葉講はオトコシユ（男衆）の講であり、淡島講・念仏講はオンナシ（女衆）の講である。それぞれ山の神講と同様に、上モヨリ、中モヨリ、下モヨリのモヨリごとにおこなわれているが、ここでは中モヨリの秋葉講と大山講についてみると、秋葉講は毎年代参へ行く人を二人決め、一二月一五日に清水市の江尻にある秋葉さんへ代参に行くことになっている。代参から帰って来ると、オフルマイ（お振る舞い）をすることになっている。

大山講も毎年二月三日二人が代参へ行き、四月にオフルマイをすることになっている。現在は日帰りであるが、以前昭和のはじめま

では大山講の代参は一泊であったという。和田ギンダユウという先導師がいたという。

このような秋葉講と大山講の代参は、中モヨリでは籤で決めて順番に回している。但し、葬式があった家は順番をとばし、喪があけたときに代参をつとめることになっている。また、結婚式があると多忙なので、そのときにも順番をとばすことがあるという。代参を決める籤を引くのは、九月一六日の山の神講のときに一二月の秋葉講の代参を決め、一月一六日の山の神講のときに二月の大山講の代参を決めることになっている。

区と班 講のようなモヨリを単位とした民俗が、富沢のなかでもムラの中のみ伝承されているいっぽうで、区と班は「新戸」をも含めた組織として拡大して存在している。

富沢区の組織は、区長一名・副区長一名と会計監査・協議員がいる。合計一七班の班からは、一名ずつ班長が選出されている。富沢区全体が集合するのは、正月元日で、神社で顔合せをして新年の挨拶をすることになっている。各班へフレ（触れ）を出して、全体が集まるのである。区の役員改選は四月の年度替わりで、三月半ばごろまでに市役所へ役員の名簿を提出し、四月から新役員になる。

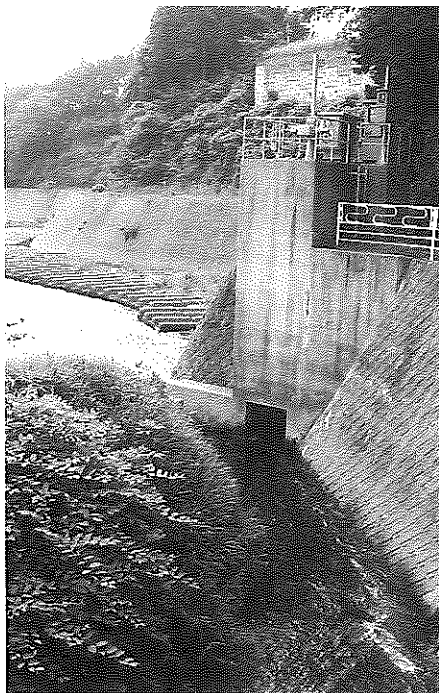
このほかに富沢区では、ジョウツカイ（常使い）の制度が残されている。しかし富沢の場合、ある特定の個人がジョウツカイを任せられるというわけではなく、毎年度班ごとに割り当てられる形式をとっている。一九九一年度までは、一班から一七班まで毎年度各班が順番に回っていたが、一九九二年度から、一班・二班、三班・四班、五班・六班……というように、二つずつの班が組になり、ジョウツカイの当番を順番に回すようになっていく。たとえば一九九二年度

のジョウツカイの当番は一班・二班である。ジョウツカイになった班へは、一年に三万円が区から班へ渡されている。ジョウツカイの当番になった班では、日によってジョウツカイになる家の当番を決め、その当番表を班長が区長へ提出している。区長のほうでは、ジョウツカイになにかを依頼するときには、この当番表に基づいて、その家へ連絡しているのである。

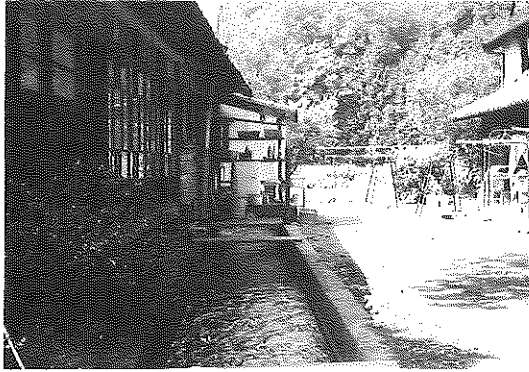
第二節 深良用水と愛鷹山

(一) 水と生活

穴堰 富沢では、不動尊の前に広がる水田は、愛鷹山から流れ出た小河川によって灌漑されているが、集落と黄瀬川との間の水田は、黄瀬川の穴堰から取水した深良用水によって灌漑されている。



穴堰（黄瀬川からの取水）



穴堰・カミ（渡辺武彦家）の屋敷内を通る用水

穴堰から取水された用水は、桃園地内をおおむね暗渠にされて通り抜け、富沢に至っている。そして、もっとも興味深いことは、この用水が富沢に入るとき、カミと呼ばれる渡辺武彦家の屋敷内を通り抜け、富沢全域を灌漑していることである。カミの家に至るまではほぼ暗渠であった用水が、この家の屋敷内まで来たところでは完全に地表に出現するのである（用水経路については、図1-1参照）。そして、富沢の水田を灌漑した用水は、南一色との境の辺りで愛鷹山からの小河川による用水とも混合し、南一色へと流れ出て行っている。

このような富沢の用水の流路によって、かつては、約二〇町歩が穴堰からの深良用水掛りの水田であり、約一〇町歩が愛鷹山からのジスイ（地下水）による水田であるといわれていた。しかし、近年急速に進展する宅地化は、このような水田の様相を変貌させている。特に、南町の存在は大きく、ここは、かつて深良用水掛りによる水田が広がっていたが、ここが最初は工場誘地、のちに南町の住宅地になったために、水田が一挙に減少した。そのために、現在では、深良用水による水田はいくらもないと、といわれているまでになっている。

ノボリセギと堤 穴堰の用水がカミの家の屋敷へ入る上流部分のところに、以前は堤があったという。現在は藪になっており、用水もほぼ直線で痕跡はないが、以前は穴堰から引いてきた水をノボリセギ（上り堰）で止め、用水より高い土地にある堤に、一度用水を入れていた。そして、この堤からカミの家の屋敷の中を通り、用水が富沢の水田へ落とされるしくみになっていた。

ミツカセギ 富沢では、宅地化の進展した現在でも、毎年四月になると、ミツカセギ（三日堰）といって、三日間用水の掃除をすることになっている。日取りは特に決まっているわけではないが、毎年その都度日取りを決め、区長がフレ（触れ）て、川のデロ（泥）を上げたり、ゴミをとったりしている。

これは、富沢の全戸が三日間毎日出なければならぬのではなく、三日間のうち、一日は穴堰、一日は富沢地内の深良用水掛りの用水、一日はジスイの用水、というように分け、それぞれ分担し、一軒が一日どこかの分担に出る決まりになっている。ミツカセギに出ることが出来ない家からは、区がデブソク（出不足）を取っている。一日いくらと区が決めている。なお、深良用水掛りの用水に対して、ジスイの用水をコーチセギ（耕地堰）と呼ぶ場合があるという。

水配人 富沢からは、深良用水の水配人を出すことはほとんどない。

ゼナザワ 富沢を流れる黄瀬川から見れば、上流部分、佐野と大畑と千福との境のところに五竜の滝がある。ここではかつて、御宿の下湯山家出身の湯山柳雄が五竜館という旅館を経営していたために、この五竜の滝を五竜館の滝と呼ぶ人もいた。この五竜の滝の流れ具合が、それより下流の村々にとって、黄瀬川の水量を知る上

での目安になっていたようである。

富沢では、この五竜の滝の水が落ちないときには、深良用水、つまり芦の湖の水が来ていないと判断されていた。そして、そのようなとき、黄瀬川に流れ込む水は、ゼナザワ（瀬名沢、佐野川のことを富沢ではこう呼んでいる）の水だけであると考えられていた。このような状態になると、「富沢では、「ゼナザワの水はオラ（俺）の水だ」ということで、富沢が取水する穴堰のところに石を積み、穴堰に水を入れるようにしたという。

但し、これは富沢の人々の主張であって、明確に確定した水利権とでもいうべきものではなかったようである。

水喧嘩 しかし、五竜の滝の水が流れない、つまり黄瀬川の水が不足している状態のときに、富沢の人々が穴堰から取水すれば、穴堰より下流の下郷の村々が取水することが出来なくなる。そのために、下郷の人々がこの穴堰のところへやってきて、富沢の人々と水喧嘩になることがあった。

特に、この水喧嘩は激しいもので、富沢の人々が穴堰へ取水しているとき、下郷の人々は黄瀬川の土手の上から石を投げたという。すると、富沢の人々も石を投げ返し、さらに喧嘩がひどくなると、富沢では半鐘を叩いて人を集めた。水喧嘩など召集の半鐘は五回叩くもので、召集がかかる、オトコシユは穴堰のところへ集合し、オンナシは炊き出しをした。

このように水喧嘩は激しくなるので、水喧嘩がおこりそうな状態になると、巡査が見廻りをするようなこともあった。また、水窪では下郷の人々との水喧嘩で、人糞をかけるような騒ぎになったこともあるという。



カワバタ

なお、富沢のムラの中では、用水使用についての取り決めはなく、それぞれの都合で水田に取水している。このようなことから、かつてはムラの中で、水の奪い合いになるようなことも多かった。特に、夜になると、水を盗むというようなことがよくあったようである。夜中に、水田のクロや畦などに横になり、他人にわからないようにして、用水をせぎ、水を盗るようなこともあった。水の奪い合いが嵩じて、喧嘩になるようなこともよくあったという。

現在では、宅地化の進展などにより水田が減少し、水が豊富にあるので、以前のように水喧嘩がおこるといようなことはなくなっている。

カワバタと井戸 深良用水の水は、水田を灌漑するためだけに重要であったわけではない。富沢は昔から井戸の湧かないところだと言われ、特に、井戸を掘り進んで行くと岩石や岩盤に当たることが多く井戸を掘ることがあまり出来ないムラであった。そのために、富沢では、集落の中を通る深良用水の水が、生活用水としてもきわめて重要であった。多くの家が、用水にカワバタ（川端）を設け、夜、水のきれいなうちに水を汲んでおき、瓶びんに入れては貯めておいたものであっ

た。あるいは野菜を洗ったり、農具を洗ったりするなど、さまざまな水仕事をカワバタに頼っていた。そのようなことから、「川の水にはションベン（小便）をするんじゃない」などということが、よく言われていたという。

しかし、富沢では、ほとんど井戸を掘ることが出来なかったはいつても、まったく井戸がないわけではなく、下モヨリの方では井戸があったという。共同井戸があり、オンナシが天秤棒で桶をかついで水を汲みに行き、瓶に水を入れていたという。共同井戸であるために、複数のオンナシがそれを使用することになり、数人が同時使用になると、順番で共同井戸を使用したという。

但し、このような井戸も完全な地下水を汲み上げる井戸ではなく、用水の端につくり、用水から地面にしみ込んだサシミズ（差し水）を汲み上げるような井戸であったという。

不動さんの湧き水 このように、富沢は、井戸に不自由してきたムラであったが、その中で、唯一、どんなことがあっても枯れない湧き水があった。それが、不動尊のところの湧き水であった。この水は、他の井戸水が完全に枯れても大丈夫で、関東大震災のときに、水が地下にしみ込んでひどく枯れたようなときでも、この水だけは枯れなかったといわれている。このような水であるために、富沢の人々は水が枯れて困窮したときには、この不動さんの湧き水へ水汲みに行ったものであった。

関東大震災 現在では、体験者もすくなくなつて来ているが、富沢で、特に、水がなくて困つたのは、関東大震災のときであったと伝えられている。これは、関東大震災のあと、用水の水が地面にしみ込んでしまうようになり、水田が乾きやすくなつたからであつた。

た。しかし、そのような場合でも、富沢では水田が完全に干上がつてしまうことは避けることが出来たという。それは、富沢は背後に愛鷹山を控えているために、山の沢の水を上手に使って、水田が完全に干上がることを避けることが出来たからであった。

水車 富沢では以前、深良用水の水を利用して水車を回していた。現在では、水車はないが、愛鷹神社の参道の入り口のところにひとつ、井出商店の前とところにひとつあった。愛鷹神社の入り口のところの水車は、増減もあったが、一七軒が仲間になり、仲間であつていた。水車を利用して、米を搗いたり、麦を搗いていた。水車の前を馬力が通ると、馬がものおじして、こわがって動かなくなるようなこともあった。



水車（昭和40年頃）

クロツカニ 以前は、山の川に大きなクロツカニがいたものであった。クロツカニは、こずいて蟹汁にして食べたという。

用水にいるクロツカニやカジカは、用水の水が不足して来ると、

水の流れが悪くなることによって、石の下にすることが多かった。それで、ときには、用水をわざと止めて、クロッカニヤカジカをとるようなこともあったという。

(二) 山と生活

愛鷹山 富沢のムラの生活にとつて、黄瀬川や深良用水とともに、重要な意味を持っているのが、ムラの背後に控えている愛鷹山の存在である。特に、富沢では、愛鷹山に共有地を持ち、その雑木を利用して炭焼きをおこない、クヌギなどの落葉を掻いて集め堆肥をつくり、あるいは草刈り場から草を刈り。モシキ（燃し木）を拾い、さらにはキヤーコン（開墾）をしてサツマ（薩摩芋）を栽培してきた。現在でこそ、富沢の人々にとつて、愛鷹山の重要性は減少しているが、かつてはその生活になくはならない存在であったのである。

オオニューカイ 愛鷹山の中で、愛鷹山森林組合が管理している山を、オオニューカイ（大入会）といっていた。ここは、昔、明治の時代に、江原素六が払い下げてもらった山であるという。根方街道沿いの村々が組織している、富沢も、この愛鷹山森林組合に入っていて、山麓に点々と共有地を持っていた。しかし、この共有地は、旧小泉村と旧泉村が合併して裾野町が出来たとき（一九五〇年、市制施行一九七一年）、共有財産は認められないということで、富沢分については、個人個人に分けてある。形式上は、愛鷹山森林組合から購入したということになっている。

炭焼き オオニューカイは、愛鷹山の中でも、富沢から見てオキ（沖）の方にあった。ワキ（脇）から来て、ここでサツマを作る

人もいたし、炭焼きのシユウ（衆）もいた。炭焼きは一〇軒ほどもいて、富士の方から来ていたという。このあたりの地元の人間ではなかった。

炭焼きは、山の中でも、水がほんの少し流れている程度の川端に住んでいた。しかし、山の中では水が貴重なので湯（風呂）に入ることも難しい環境にあった。水が貴重であるために、一回湯を湧かすと、一年くらいは同じ湯に入っている、などと言われていた。そして、その湯は、垢がたまり、その垢で、湯の中へ棒を入れても、棒が倒れなくなるくらいまでになったという。しかし、炭焼きのシユウに言わせると、このような湯に入りつつづけていると、新しい湯とは違って、人の脂を持って行くことがないので、逆にタツシヤ（達者）であるなどと言っていたという。

富沢の中には、このような炭焼きのために、食料や荷物を運ぶ人もいた。こちらから山へ行くときには食料や荷物を運び、帰りには炭を「裾野」（裾野駅周辺のこと）まで運んだ。炭を焼くと、一回に出る炭の量は、三〇俵から四〇俵（一俵＝五貫目）くらいで、そのような炭を運んだのである。

富沢には、もともと専門の炭焼きはいなかったが、こうした炭焼きのシユウから教えられて、富沢の中でも炭焼きをする人々がいた。しかし、素人が単独で炭焼き窯をつくるのは難しいために、共同で作り、窯を借りる形式にして、炭を焼く人が多かった。

炭焼きにする木は、クヌギやナラで、クヌギやナラが以前は多く、そのような雑木を炭焼きに使っていた。

クヌギ クヌギなど雑木は、冬になると落葉になるので、これをコマンザライ（熊手）で掻いて集め、堆肥にしていた。富沢の近

くでは、戦前は水窪に肥料屋があつたが、化学肥料を買うことは少なく、落葉を掻いて集め堆肥を作るのがふつうであつた。コマンザライで掻いて集めた落葉は、キノハツカゴ（木の葉籠）に入れて、山からだしてきていた。

サンアザキヨウユウカイ オオニユウカイとは別に、サンアザキヨウユウカイ（三字共有入会）と呼ばれる共有地があつた。この共有地は、上土狩（長泉町）・水窪・富沢、三字の共有であつた。一ヶ所にまとまってあつたのではなく、何ヶ所かに分散していた。但し、オオニユウカイと比べたときには、オオニユウカイの方が、愛鷹山のオキの方にあつた。

草刈り場 富沢では、草刈り場はこのサンアザキヨウユウカイに行かへた。しかし、夏になると、ムラの人がいつせいに刈りに行くために、たちまち刈り尽くしてしまうのが常であつたという。そのために、夏の草刈りは競争のようになり、朝五時ごろには草刈り場に行き、場所を取り草刈りをしたものであつたという。

草をたくさん欲しいときには、午後になつてから、再び草刈りに行くこともあつた。しかし、山の草をきれいに刈り尽くしてしまつと、他人の家の水田のクロの草を刈つて、盗んで来るようなこともあつたようである。

草を刈ると、刈つた草を寝かして乾かし、そして、馬の背中にコニダ（小荷駄）にしてつけて来た。草は、六把が一駄であるために一人で馬をつれて行くときには、だいたい六把になるくらい草を刈り、それを馬のコニダにして持って帰つて来たという。

なお、コニダは、モシキも六把で一駄であつたが、ツケタワラ（付け俵）は四俵で一駄であつた。

モシキ 富沢では、モシキを拾つて来るのも、このサンアザキヨウユウカイからであつた。現在では、モシキを使う家は減少して来ているが、以前は炊事でも風呂でも、すべてがモシキによつて火を焚いていたので、冬になるころには、山のモシキはほとんど拾い尽くされている状態であつた。そのようなことで、秋になつて仕事有一段落ついたころになると、モシキを取りに行くのが常であつたという。細い木はそのまま採つて来て、太い木は採つて来てから、家で細く割つてから使用していた。

四七人区 現在、富沢では、四七人区の財産区として存続している共有地がある。特に、かつて草刈り場のあつたところが四七人区として現在、東名カントリーゴルフ場に貸してあり、地代を受け取っている。

この四七人区は、最初四六人区であつたが、富沢のムラの家から分家に出たある家が、加入を希望したために、その家は米を何俵か出して加入し一軒が増加し四七人区になつたという。しかし、分家に出た家でも、すべてがこの四七人区に新加入したわけではなく、加入しなかつた家もあつたようである。

また、不動尊のあるところも、この四七人区の共有地である。こゝだけで一町歩余あり、不動尊の祭りはこの四七人区が中心になり、執行している。祭日は三月二八日で、四七人区の中で、毎年下モヨリ↓中モヨリ↓上モヨリ…の順番で、祭りの当番を回している。

なお、この不動尊は寝小便の神様と言われており、富沢以外からも、寝小便の治癒を祈願に来るといふ。

萱 ふつう共有地を豊富に持っている富沢のようなムラでは、共有地に萱場を持ち、その萱を利用して家の屋根に利用する場合が

多いが、富沢には、萱場がなかったようである。そのために、富沢では、屋根替えをするときには、深良からそのための萱を刈って来るのが一般的であった。個人の力では大量の萱を運ぶのは困難であるために、人に頼んで馬力で運んでもらうことも多かったようである。

屋根替え 屋根替えをするのは、季節的に四月が多く、それぞれの家の都合のよい時期におこなっていた。一日で終わることはなく、ふつう二日間はかかった。富沢にも隣の南一色にも屋根屋がいたので、屋根替えのときには、屋根屋を頼んで来てもらっていた。近所の家々からも手伝いに来た。屋根替えをするときには、最初に太い箱根竹を使って、二本ずつ 縄でしめて組んだ。そして、下から屋根の上の人へ萱を差し出し、屋根を葺いた。崩した屋根の古い萱は、畑とか山へ持って行き、肥料の代わりをしていた。

山の荒廃と動物 かつて富沢の人々にとって、愛鷹山はその生活に重要な位置を占めていた。しかし、近年では、愛鷹山を生活のために利用することは、ほとんどなくなっている。そして、愛鷹山には植林された杉・桧などの林が広がるばかりである。そのために、山が荒れてきた、と言うムラ人が多くなつてきている。

その様子をもっとも顕著に示すのが、サト(里)の畑にまで猿などの動物が出現するようになったという事実である。一二・一三年ほど前から猿などがよく現われるようになったという。特に、猿については、千福の共有地であったところに、千福ニュータウンの分譲地が出来てから、頻繁にサトに下りて来るようになったといわれている。猿は、人參のように地面の中にある野菜まで、食い尽くしてしまふことがあるという。

猪も現われることがあり、特に、猪はサツマがあると掘り尽くしてしまふ。さまざまな脅しをしてもほとんど役に立たず、サツマを挿したところからすぐ掘ってしまうという。ハクビシンも頻繁にサトへ下りて来て、これはモロコシの畑があると、食い尽くしてしまふこともある。

赤土とサツマ 富沢の人々にとって、愛鷹山の土壌がその生活に大きな影響を与えていることも忘れてはならないだろう。一般的に、サトの土壌は黒土で、山の土壌は赤土である。愛鷹山のオキ(沖)の方へ行くほど、表面の黒土が少なくなり、赤土が表層へ出て来ている。このような土壌の状態について栽培作物との関連で、次のように言う人もいる。

サツマはデロ(泥)によって、うんと味が違う。特に、山ではアカマサ(赤土のこと)で、黒土はウツカタ(上つ方)にちつとあるだけで、アカマサがすぐ下にある。このアカマサのところをついたサツマは、ウミヤ(うまい)し、コワイ(硬い)サツマが出る。サトの黒土のところをつくったサツマは柔らかい。陸稲は、このサトの黒土の方がいいがサツマはアカマサの方がよい。それで、山のオキの方へ行くほど、表面の黒土が少ないので、コワクテ甘いサツマが出る。

現在でこそ、サツマの栽培は減少しているが、以前は、愛鷹山ではキヤコン(開墾)がおこなわれ、このようなアカマサを利用したサツマの栽培が盛んにおこなわれていた。サツマの種類はシズオカハクといい、富沢の人々は下土狩にあったサツマの伸買いにサツマを売り、そこから貨車で大阪へ出荷されていた。大正の末頃で一俵一円二〇銭、三〇銭、一俵一四貫目であった。一回一貨車、二

二〇俵は輸送していたという。

小麦 このようなサツマの栽培は、小麦の栽培とも大きく関係していた。水田の裏作に小麦を播くことも多かったようだが、キヤーンコンした山や畑に、サツマと小麦を交互に栽培する方式が採られていた。

毎年、一月末から二月に小麦を播くと翌年六月には、収穫の時期にさしかかり、成長している。このような状態のとき、小麦の間にコエ（肥料）をまき、サクヲキツテ、土を盛り、サツマを挿すのである。このようにすると、挿したばかりのサツマが、小麦の陰になって陽がさえぎられ、枯れることを防ぐことが出来るという。そして、そのあと小麦を刈り、小麦の殻を残して、それがサツマの堆肥になるようにした。

第三節 動物と気候

(一) 動物

馬 現在でこそ馬を飼っている家を見ることは出来ないが、かつてはどの農家でも一匹は馬を飼っていた。富沢では、山から材木を出したり、馬力を引いたりすることもあり、そのような家では、このような賃引きの仕事をするために、農作業以外にも馬を使うこともあったようである。あるいは、家によっては、農作業に使う馬と、賃引きに使う馬を分け、二頭の馬を飼っている家もあったという。賃引きは、単独で行動する人もあったようだが、数人が仲間になり、材木出しや馬力の仕事をするのが普通であった。

馬の飼料は、山から刈ってきた草を与えるほか、藁を与えることも多かった。

なお、戦時中は、馬の徴用があった。「徴馬」といって、軍隊から通知が来ると、沼津の千本浜などの検査会場へ馬を連れて行き検査を受けた。検査に合格すると、馬を徴用されることになり、全部ではないが、実際に「徴馬」によって馬をとられた家も多かったという。このあたりでは、三島に重砲兵連隊があったので、この三島の重砲へとられることが多かった。

キツネ 昔、キツネにまつわる話で、次のようなことがあったという。

昔、上土狩の天神山に毎晩きれいな娘が燈かりを点けて通るということがあったという。あるとき、富沢のある家のジンヒツツアンという人が、鉄砲を持って行き、この娘を射った。ところが、娘は死なず、燈かりのところを射ったら死んだ。しかし、死んでも姿がまったく変わらず、三日三晩女の姿のまま、四日目にはじめてキツネの姿に変わった。このようなことがあったため、富沢のある家では、稲荷を祀っているという。

害虫 以前は、ケラ・スズメ・ウンカなどによって、稲が損害を受けるといふようなことが多かった。イナゴはあまりひどい損害になることはなく、これらのうちでも特にひどかったのは、ウンカであったという人もいる。ウンカが出ると、米の殻が柔らかくなり、中がムレてしまつて、米にならなくなつてしまふという。

なお、稲は、「うんとジ（地）がいいと、殻が出来すぎてかえつて米にならない」といふ人もいる。

(二) 気候

陽気 「陽気がばかにイキレルな」というと、雨が降る。

富士山 富士山に大きな雨傘をとると、雨が降る。また、富士山がすこし曇ると、天気が変わる。

(岩田 重則)

第二章 社会と生活

第一節 家と屋敷

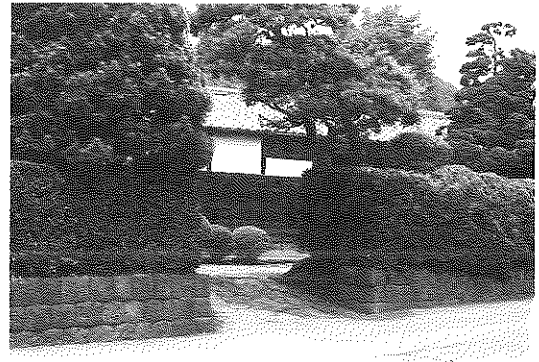
(一) 屋敷構えと付属屋

ヤシキとその境界 富沢は市内の他の地域と同様に建て替えが進んでいるが、旧戸が近接しており、ムラのたたずまいを比較的残している。

宅地全体をヤシキという。ヤシキには、住宅とさまざまな付属屋が建てられ、屋敷神、屋敷墓などが設けられているところもある。ヤシキ内に畑をつくることは稀で、自家用野菜でもべつに畑を持つ家の方が一般的である。

ヤシキの入り口をキヤード（カイド）、キヤアドグチという。ジョウグチという家もある。しかし、ジョウグチは家の玄関を指すというところも少なくない。

ヤシキの境界に特別なことはしないが、樹木などを植えてなんとなく分かるようになってきているという。サカイギ（境木）にはヒノキやアテビ、茶などがきかれたが、とくに決まった木を植える風習はない。アテビは、山の境界によく使われた。ポツンポツンと境にそって植え、境界を見渡せるようにしている。茶はヤシキを囲むほどにつくらないが、境の一部を低い垣根にし自家用の茶をとった。茶

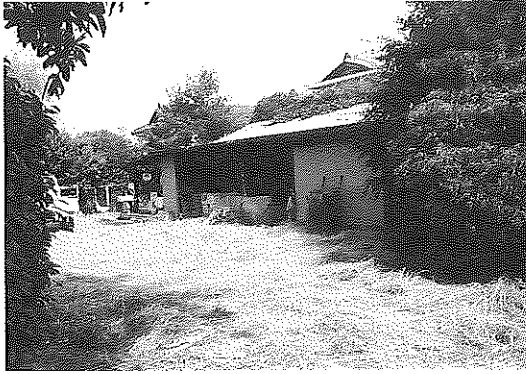


渡辺家の垣根

は畑のコバの土止めにも使われ、これも自家用茶にした。また、用水がヤシキの境界に沿って流れているところが多い。

しっかりと境界をつくっているのは富沢の大地主だった渡辺武彦家で、石を組んでそのうえにマキとヒノキの垣根がつくられている。外から門に向かって左側がマキ、右側がヒノキだが、右側はもともとカナメモチだったのが枯れて植え直したものである。下モヨリの服部直邦家は現在は伊豆石の塀を巡らしているが、昭和四〇年ころまでは竹を組んだ沼津垣根（箱根竹をあじろに組んだ垣根）で道路側を囲っていた。

ヤシキに植えてはいけない木としては、「ビワはヤシキに植えるものではない。人のうなり声が聞こえる」といい、「ツバキは花が首から落ちる」といって嫌う。しかし、明治三五年生まれの服部きよざんは、「言い伝えは人のつくったもの」といい、ビワは火除けになるし、牛に葉を食べさせると乳房炎にならなくていいし、ツバキも火に強くて隣が火事になっても火が入ってこないという。現在では多くの家に鑑賞用としてツバキが植えられている。「サルスベリはお墓に植える木なのでよくない」ともいう。好まれるのはナンテンで、「ナ



牛の草を干したオモテ

ンテンを便所のそばに植えるといい」という。

また日々の暮らしや行事、農作業などに役立つ木をヤシキ内に植えておくことがある。正月用のウラジロやサカキ、サツマグラ（サツマイモの苗木）などのクラ（苗木）をつくったり屋根材になる竹などを植えておくと便利だという。ナンテンは建前するときや家におめでたのあるとき、酒（一升瓶）に挿す。それを小分けにして飲むという。お産のお祝いのお返しなどにもナンテンの小枝を使う。

屋敷取り 主屋の呼び名はいろいろで、ホンヤ、イヤ、イタクなどという。南向きがいいといわれるがそれほど気にしておらず、ヤシキや道路の関係で東向き、西向きなどさまざまである。多くは道路に向かったかたちで建てられているが、下モヨリの旧WN家のように道路に背を向けて建てられていた例もある。

主屋の前はオモテと呼ばれ、農作業のために広い空間がもうけられている。オモテは馬の飼料の草を干したり、屋根替えの作業場やさまざまな行事の準備の場としても利用された。大そうじのときに家財道具を出しておくのもオモテである。中モヨリのHK家ではオモテが狭かったので、稲や麦を干すのにオモテを広くしたいと、昭和二十一年ころに

リ（通り）をくぐって、ヤシキに入る。ナガヤの前に牛舎があり、現在でも牛を6頭飼っている。ナガヤの前に牛乳を入れておいた井戸のような装置が残っている。ヒヤヤーは上で蚕を飼い、一階に堆肥を入れた。かつては別に牡牛を一頭飼っていて、ギウウコウキで種付けをした。クラ（蔵）はナマコ壁で、一階に米、二階に長

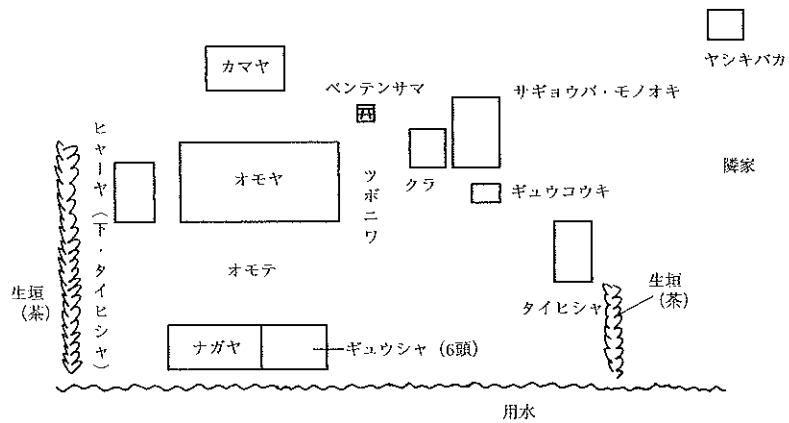
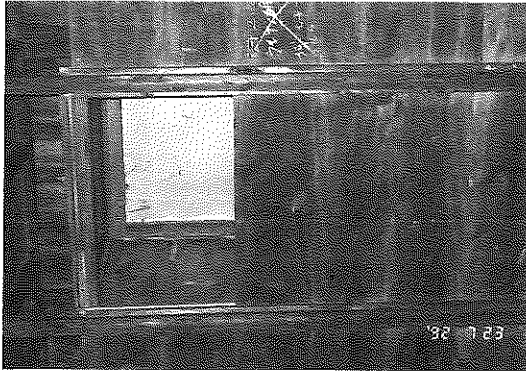


図 II-1 H S家の屋敷取り

イヤをうしろにきつた（移動させた）」という。このときはクミウチや親戚が手伝って、コロを入れて移動させた。付属屋のうち農業にかかわる建物の多くは、このオモテを取り囲むように建てられることが多い。岩盤があるため、井戸のある家は多くない。

図 II-1 は、中モヨリの H S 家の屋敷取りの概略である。主屋の前にオモテが設けられ、農作業に関する付属屋がそれに面して建てられている。道路から用水を渡りナガヤのトオ



ナカヤの米の貯蔵

H S 家では六月の初巳の日におまつりしている。ヤシキの奥に墓がある。ここには、H S 家のほかにイツケウチのもう一軒の家の墓もある。ヤシキの境にもう一軒が墓に行くためのハカミチ（墓道）がある。

図 II - 2 は、下モヨリの

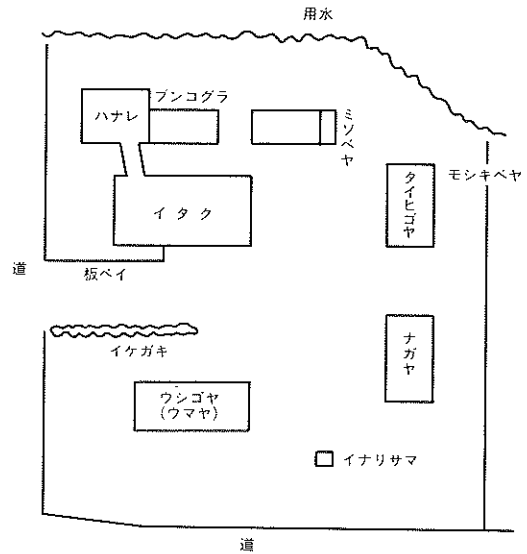


図 II - 2 HN 家屋敷取り

HN 家の屋敷取りの概略である。この家は付属屋が多い。ヤシキの中をカワ（用水）が通り、生活用水に使った。ナガヤに米を入れ、そこで脱穀をした。米を入れるところは羽目板になっていて、上から一枚ずつはずして米を取り出すようになっていて、雨の日にはナガヤで縄ないをした。ハナレ（離れ）には、戦前老夫婦が住んでいた。ブンゴグラ（文庫蔵）には着物や什器などをしまっていた。お雛さまもブンゴグラに入れておく。二階は畳敷きである。コクグラ（穀蔵）の前にはソトノヘツツイがある。これは餅をふかしたりするのに使った。屋敷神はオイナリサン（稲荷）で、初午の日には赤い旗を立て、カキモチをつくって、旗をもってくる子どものお返しにした。屋敷墓のほかに、シモの墓地にも墓がある。

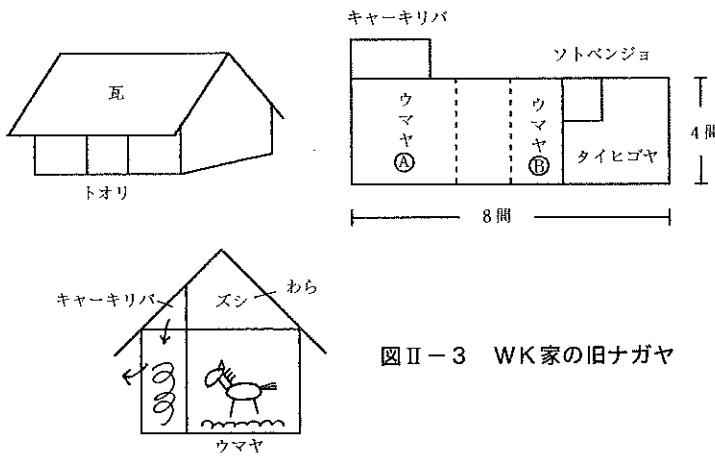
付属屋 ナガヤ、タイヒゴヤ（またはタイヒシャ）とソトベンジョ、ウマゴヤはほとんどの家にあつた。すべてをひと続きにナガヤにしている家と別棟にしている家とがある。ナガヤはもつとも生活に密着した付属屋で、似たような造りながら、各家の生業や生活に便利のように工夫されている。

むかしはほとんどの家に馬を一、二頭、多いところで三頭ほど飼っていたが、戦争で供出したり、女手では扱にくいこともあって手離した。チウシ（乳牛）に変えたところが多い。草を踏ませて堆肥をつくるのにも必要だし、「ニューウグイ（乳代・乳を売る）も入る」という。

ナガヤが現在見られるような長屋門（トオリナガヤともいう）の形になったのは戦中戦後のことで、それ以前はトオリの部分で分かれていて、両側に一棟ずつ建物があるのが一般的だった。トオリをつくって、その上に稲藁や草を入れた。また、昭和三〇年代後半か

ら四〇年代の初めころにかけて多くの家で母屋の建て替えをしたが、建て替えのあいだはナガヤに住むのがふつうだった。

クラ、カマヤ、インキョは、多くの場合主屋の裏側の、オモテにかかわりのない場所につくられる。前述のH S家のクラは、現当主の三代前に建てたもので、念入りに小竹の中に砂を入れて強くした。「ムラの衆が手伝って、竹の一本一本に砂を入れた」という。二階の梁に棟札が打ち付けてある。

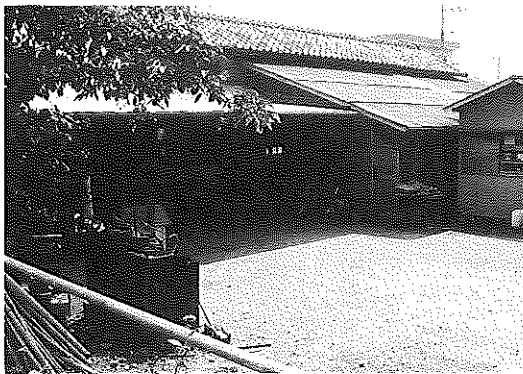


図II-3 WK家の旧ナガヤ

上モヨリのHK家は昭和の初めころ、「家人が煙たいといったから」カマヤをつくった。ヘツツイ、水がめなどを移し、風呂場も移した。ナカモヨリのHK家では井戸を掘った昭和二一年ころ、イヤの後ろにカマヤを続けて建てた。ニワにあつたヘツツイなどをそのとき取りはらった。インキョは、別棟を建てることもあるが、ナガヤの一部を住めるようにして利用した家も少なくない。

戦後、タバコをやるようになって、土壁のタバコの乾燥室がある家もある。

図II-3は下モヨリのWK家の旧ナガヤである。WK家はかつて、ホンヤはクサヤネ（茅葺き屋根）だったが、ナガヤは瓦屋根だった。「このころは瓦の方が安かった」という。この家は、先代が博労をしていたので、馬を多く飼っていた。ナガヤに三頭のほか、ホンヤの横にもウマヤ（厩）があつた。ナガヤのウマヤ㉑はヒトクチ（馬一頭分）、ウマヤ㉒には二頭飼つた。WK家のナガヤは馬を飼うのに便利なように工夫されている。ウマヤ㉑の前にキヤーキリバ（カイキリバ）があつた。馬の餌の藁をズシ（二階部分）に置き、ズシの横のキヤーキリバで切る。キヤーキリバには穴をあけてあり、その穴のそばで藁を切り、穴から下に落とす。下は羽目板がはまってい



HK家のナガヤ

て、藁をためられるようになっていた。使うときは羽目板を上からはずして、箕ですくって馬のカイバオケに入れる。馬が踏んだ草はタイヒゴヤに入れて堆肥をつくる。写真は中モヨリのHK家のナガヤである。現在の形にしたのは戦時中で、東京の大工がくぎと食料を替えてきていたのでそのくぎを使った。以前はトオリのと

ころが離れて二棟だったという。オモテから向かって左側のモノオキはかつてインキョとして老夫婦が使っていた。右側のタイヒベヤとソトベンジョを併せてチヨウツバと呼んでいた。右側の張り出した部分は後から足したものである。右側のゲヤ（二階部分）には家畜用の稲藁をためる。二階の藁は木枠を通して下に降ろせるようになっていて、下から蓋をあけて取り出せる。牛小屋の横にあるサイロも飼料の貯蔵用で、三メートルほど掘り石で枠をつくってある。

トオリにしたことで、雨の日の作業場ができた。麦や稲の脱穀をするとき雨がふりそうだと、家にもどってきてトオリで脱穀する。トオリですると藁をゲヤに片付けるのに便利だったという。藁はゲヤに入りきらないので、ふだんはたんぼで作業してイナムラにして積んでおき、三月いっぱい在家までもってきた。トオリは夏の日差しを遮ってくれるので、暑い日にタバコに縄をつける作業場としても使った。

H K家の付属屋の使い方 H K家は馬から戦争中にチウシに変え、五、六年前からは肉牛をコエフミノウシ（肥踏みの牛）として飼っている。ナガヤの右側は農業を助ける馬や牛を飼うところでもあるが、同時に堆肥をつくるための施設として重要である。チウシを五頭飼っていたころは堆肥の量も多かったので田にも運んだが、チウシをやめてからはヤマ（畑）とオモテにつくるサツマガラやナスやトマトのナエグラに使うくらいになった。

六月から九月のあいだに、タイヒベヤに牛の踏んだ草や精米したときの米ぬかを入れて醗酵させて堆肥をつくる。三回ほど切り返す。こうしてつくった堆肥は翌年使う。一〇月にヤマに入れる堆肥は前の年につくっておいたものを使う。

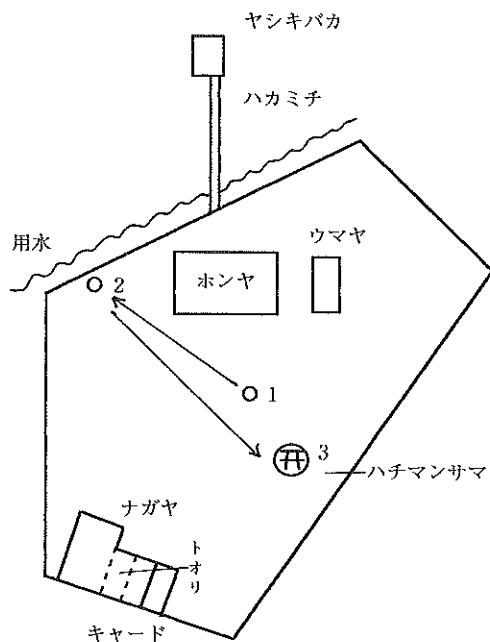
サツマガラは、H K家ではオモテのコバのタイヒベヤの前につく。ナエグラはサツマガラのうしろに続けるようにつく。サツマガラは下からキノハ（落ち葉）、粗い堆肥、細かい堆肥、粃穀と重ねていくが、キノハは一二月下旬に一〇束ほど集めて、うち二束をウシゴヤに敷き、残り全部をサツマガラにする場所に積んでおく。三月一〇日ころ、タイヒベヤからモッコで堆肥を運び込んでクラをつくる。粃穀はイヤの横にためておき、サツマガラに使ったあとは草のかわりに牛のネジキにしてこれも堆肥にする。5月にサツマの芽をとると、サツマガラの堆肥はタイヒベヤに戻され、再び翌年の堆肥の材料になる。ヤマにもついでいく以外は、堆肥は極力動かさないうすむように工夫され、繰り返し利用される。

H K家は戦後タバコをした。以前はイヤがもつと道路に近いところにあったので、ウマヤとタイヒベヤのある建物とイヤとの間に縄を張って、そこにタバコの葉をさげた。オモテを広くしてからは、雨が降りそうになると庇の下に葉をたてかけたり、イヤにゲを出して、そこに縄をはって仮置きした。タバコの乾燥室は昭和二六年から四三年ころまで使った。土壁で、地面の土の中に一本土管を通し、外の焚き口からマキなどを焚いて、土管にあげた四か所の穴から熱を上げた。燃料はマキからオガクズに変わった。オガクズは製材所から富沢の七、八軒が順番に買っていた。外から滑車で天窓をあけて温度の調節をする。最初のアオツバ（生葉）のときに水分がたくさん出るので、いっぱいにあけた。四、五昼夜たいた。

屋敷神 屋敷神としては、イナリサンが多い。ほかに、テンジンサン（天神さん）、ハチマンサン（八幡さん）などが、ちいさな祠におさめられている家がある。

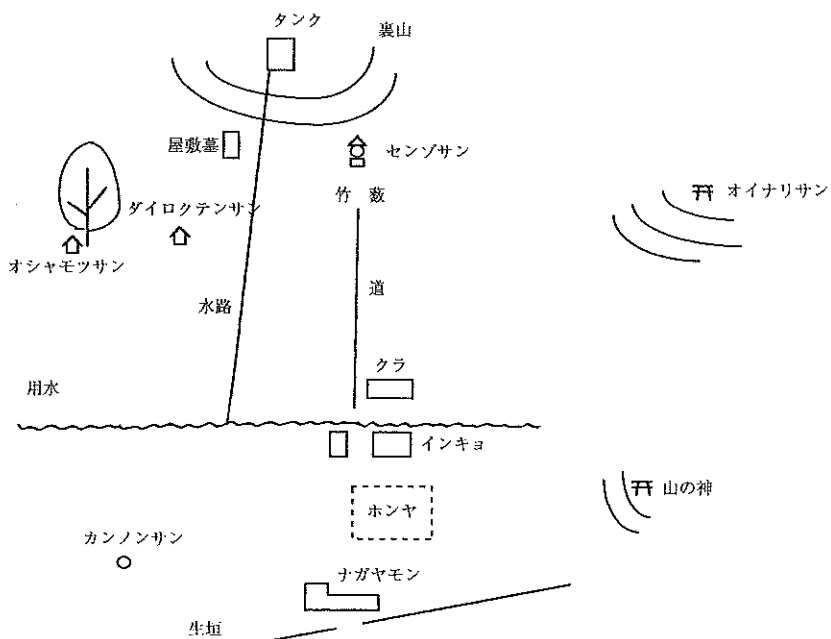
図II-4は、前出のWK家の屋敷神ハチマンサマの位置とその移動を示したものである。このハチマンサマの祠には、向かって右からシンメイサマ（神明様）、ハチマンサマ（八幡様）、オテンノウサマ（お天王様）の三つの神がまつられている。一二月二八日が祭日で、子ども相撲があった。もともとはオモテの中ほどにあったというが、当主Kさん（大正一〇年生まれ）が物心ついたときには、ヤシキの北東の隅にあった。それを、昭和一六年から二一年の間（Kさんは出征中）に方角が悪いということで、現在地に移した。戦争中は、ハチマンサマに戦勝まいりにたくさんの人々が来た。知らない人がたくさん来て、お札が真っ白になるほど貼られたという。

図II-5は上モヨリのWT家の屋敷神の位置を示した略図である。富沢の大地主だったこの家には神様が非常に多い。また、家単位で



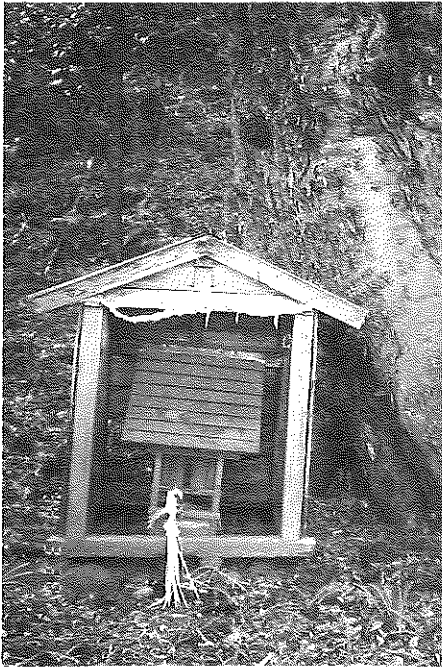
図II-4 WK家の屋敷取りとハチマンサマの移動

まつるだけでなく、ムラやモヨリでもまつているものが多い。クラガミサマ（蔵神さま）は実体はなにもないが、お正月にお供えをする。オシヤクモツサンとダイロクテンサンは一月一六日におまつりする。ヤマノカミサン（山の神さん）は上モヨリの山の神でもあって山の神講が一月一六日と九月一六日にあるが、自分の家と



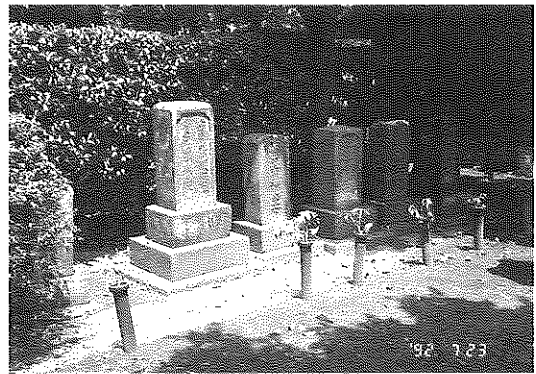
図II-5 WT家の屋敷神の位置

しても一月一七日におまつりをする。むかしはオシメ(注繩)をは
つて、白強飯とお供え(餅ではなくダンゴのようなものにする)と
白酒(酒ではなく、ダンゴをうすめたようなもの)を供えた。オカ
ンノンサン(お観音さん)も馬の神さまとして上モヨリの各家がま
わりもちで四月一六日か一七日に観音講をしている。オイナリサン
はヤシキから少し離れた山の中に小さな祠が建てられている。札が
四枚入っていて、一番古いものは文久元年(一八六一)である。二
月の初午に旗をたててまつる。旗には子どもの名前は書かない。ヤ
シキから離れたところ、甲州街道沿いにもうひとつの屋敷神オイセ
ンサン(オイセミヤサンともいう)がある。WT家では一月二八日
にまつているが、富沢の人びとが伊勢参りに行った帰りに必ず寄
つて報告する。



オシャクモツサン

屋敷墓 旧戸にはヤシキの中に屋敷墓をもつ家が少なくない。
中モヨリのHS家(図II-1参照)はもつとも古い墓はシモの墓地



ヤシキバカ (HK家)

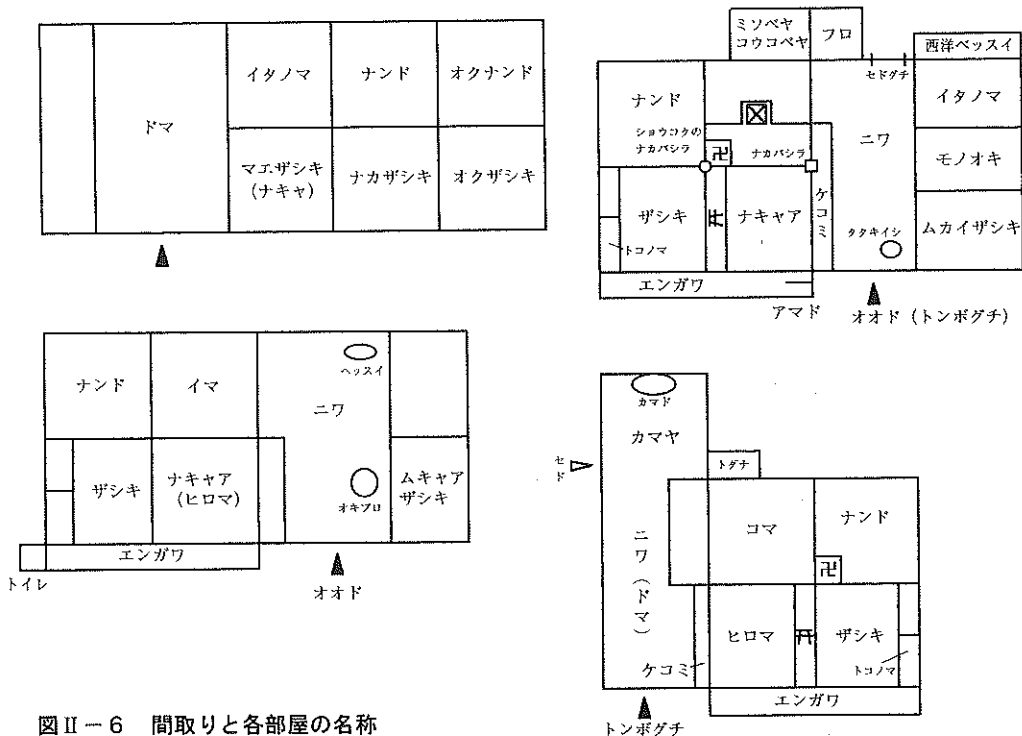
(二五八四)の銘がある。センゾサンを見下ろす山の裾に一〇基は
どの屋敷墓がある。WT家の墓は代々壇徒総代を務めた定輪寺に最
も古いものがあり、次にヤシキ内のセンゾサン(墓?)で、この屋
敷墓はそれらより新しい。しかし、センゾサンは、のちの時代に記
念して建てたものであろう。

(二) 間取りと部屋の使用

間取りと各部屋の名称 現在溯れるかぎり、基本的には田の
字型である。大きな家になると、三間続きの六部屋になる。部屋の
境は建具でしきられ、人寄せの場合にはオモチに面した二部屋及び
三部屋の建具をとりはずして、部屋を広げて使う。

居住部分の個々の部屋は、図II-6のように呼ばれている。ザシ

にあり、次に古いものがヤ
シキにある。ヤシキの墓に
はイッケウチの墓もある。
下モヨリのWK家(図II-
4参照)の屋敷墓はもとは
もつと広がったヤシキの中
にあつたが、土地を手離す
ときに墓のまわりだけは残
し、ハカミチを通した。
上モヨリのWT家(図II-
5参照)には、センゾサン
とよばれる五輪塔がある。
センゾサンには天正一一年



図Ⅱ-6 間取りと各部屋の名称

キとナンドはどの家でも決まっているが、ニワ（土間）側の二部屋はまちまちである。ヒロマはもともとはナキヤと呼ばれていたといえる。しかし、家族が日常過ごす裏側の部屋はいろいろ呼ばれてはつきりしなくなっている。図にある名称のほかにもダイドコやチャノマと呼ぶ家がある。イロリはこの部屋にあった。

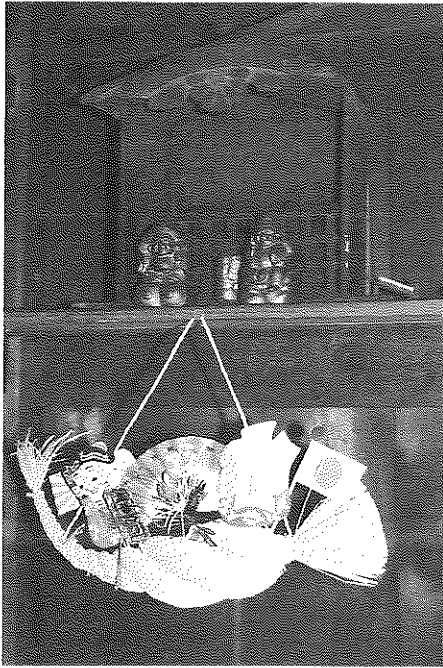
ニワと居住部分の境にナカバシラがある。たいていは一尺角くらいあって、ケヤキを使うなどしたいせつにされた。ナカバシラには何か貼ってはいけなさいといわれた。くぎも打ってはいけなさい。ほかに、田の字の中心にあたる柱をショウコクノナカバシラという家がある。

ザシキとナキヤの前のエンガワは、古くは多くの家でソトエンで、雨戸が障子のすぐ外側につけられていた。

便所はソトベンジョ（またはチョウツバ）がふつうで、屋内になり家が多かった。昭和一六年生まれの服部克己さんは子どもころの思い出として、夜はヒロマの上がりぐちに肥桶をおいて、夜は雨戸をくつてそこに用を足したという。冬はおじいさんがニワにおいてくれた。朝になると、おじいさんが肥桶を片付けた。

土間部分はニワと呼ばれていた。現在はニワという人とドマという人が同じ家でもいて、まちまちになっている。ニワが居住部分の右にある家と左にある家があり、どちらについても伝承は聞かれなかった。ニワにムキヤアザシキ（ムカイザシキ）がある家もある。

家の出入り口は、ニワにたいいてい二か所ある。オモテに面したところがいわゆる玄関で、かつてはおおきな木のオオド（大戸）があった。一間ほどのオオドは「夜だけヒツタテル（閉める）」もので、ふだんはあけておいた。オオドには小さな木のトンボグチ（コグリ、



エビスサン (旧渡辺博文家)

クグリともいう)があった。夜オオドを閉めるとコグリを通った。家の出入り口をトンボグチということもある。「ドントやきの小屋をつくった竹の焼いたあとを玄関の羽目板にはさんでおくと、風邪がうつらない」という。これは「悪病がこない」ということからこういうようになったという。「寝小便をしない」といったという人もいる。もうひとつの出入り口は、裏か横の奥のほうにあり、セドグチまたはセドと呼ぶ。

ニワからナキヤ(ヒロマ)にあがるところは、アガリタン(アガリハナ)とかケコミと呼ばれる。一尺五寸ほどの高さがあり、下に引き戸や羽目板があつて、下駄、草履や靴などを入れた。ケコミは昔はなかつたという家が多い。

屋内神と仏壇の位置 家の中の神さまはどの家もだいたい同じ部屋にまつられている。ダイジンサンとエビスサンと仏壇は、方角よりも間取りの中で決まっている。ダイジンサンはナキヤ(ヒロマ)

にニワを向いてまつられる。仏壇はイマ、コマ、チャノマなどとよばれるへやにニワのほうを向いて据えられる。この場合、イマにおかれるところと、ナンドに置いてイマに開かれているところがある。ニワが居住部分の右にあつても左にあつても、この位置関係はかわらない。エビスサンはイマにオモテを向いて棚の上や戸棚の上にあつられる。

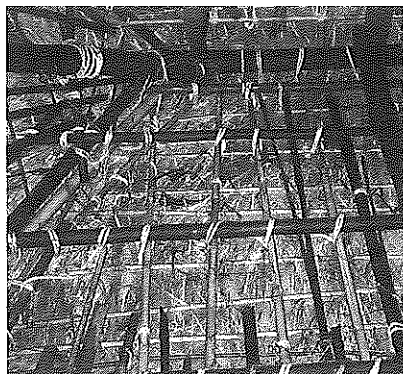
コウジンだけがイマやニワなどまつる場所が決まっていなくても、これはヘツツイなど火の位置によるものである。多くはニワのヘツツイまたはカマドの上や風呂の焚き口の上にある。

家の出入り口については、オオドの上(現在は玄関の上)にお札を貼る家とない家がある。貼る家では、天照大神、箱根水路の札、山の神の札などいろいろ貼つたという。なにも貼らない家ではヤシキの入り口にもなにもせず、直接貼るのはコウジンサンだけ」という。ただし、正月飾りはヤシキの入り口にも家の入り口にもかける。

かつては疱瘡にかかると、ナカバシラにホウソクナをかけた。棧俵にダンゴをのせ、紅白の弊束をつくりナカバシラにかける。疱瘡にかかっているときには、疱瘡が入つてこないようにヤシキの入り口にロウソクと水を供えた。

正月飾りはゴボウマキをダイジンサンに、タイをエビスサンに飾る。輪飾りは屋内では、ニワに置いた白、仏壇、コウジン、オオド、あれば上便所にかける。そのほか、カワバタや、牛小屋(馬小屋)、井戸、外便所と、屋敷神に飾る。

ニバン正月のダンゴは、まずニワの白に大きく飾る。白に木を立て、その枝にたくさんダンゴを刺す。カゼダンゴといって、大きい



旧WN家小屋組



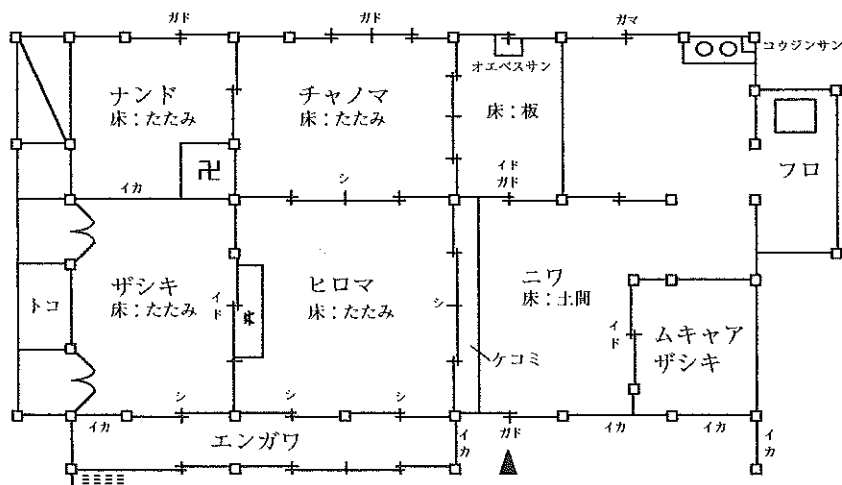
旧WN家外観

ダンゴをひとつ風の神さま用につける。豊作を祈ってサトイモのかたちや宝船のかたちのダンゴもかざった。小枝にダンゴを刺したものを家の中の神さまと仏壇に供える。

下モヨリの旧WN家の間取り (図II-7)

旧WN家は調査時

すでに家としては使われておらず、茅葺きのままモノオキとして利用されていた。一二年ほど前に葺き替えたというところで、小屋組や縄を縛りつけた屋根裏のようすがよく見えた(写真参照)。家が建てられたのは現当主の五代か六代前で、チョウナ削りのある柱や梁が見られた。家の周囲の柱はほぼ一間で建てられている。ケコミはもととはなかったのを、昭和二二、三年ころにつけた。日常に使うイロリがヒロマにあったというのは、富沢では珍しい。ザシキの戸棚と床の間、ナンドの押し入れはゲ(ゲヤ)にあり、早い時期の後補ではないかと思われる。ザシキとナンド



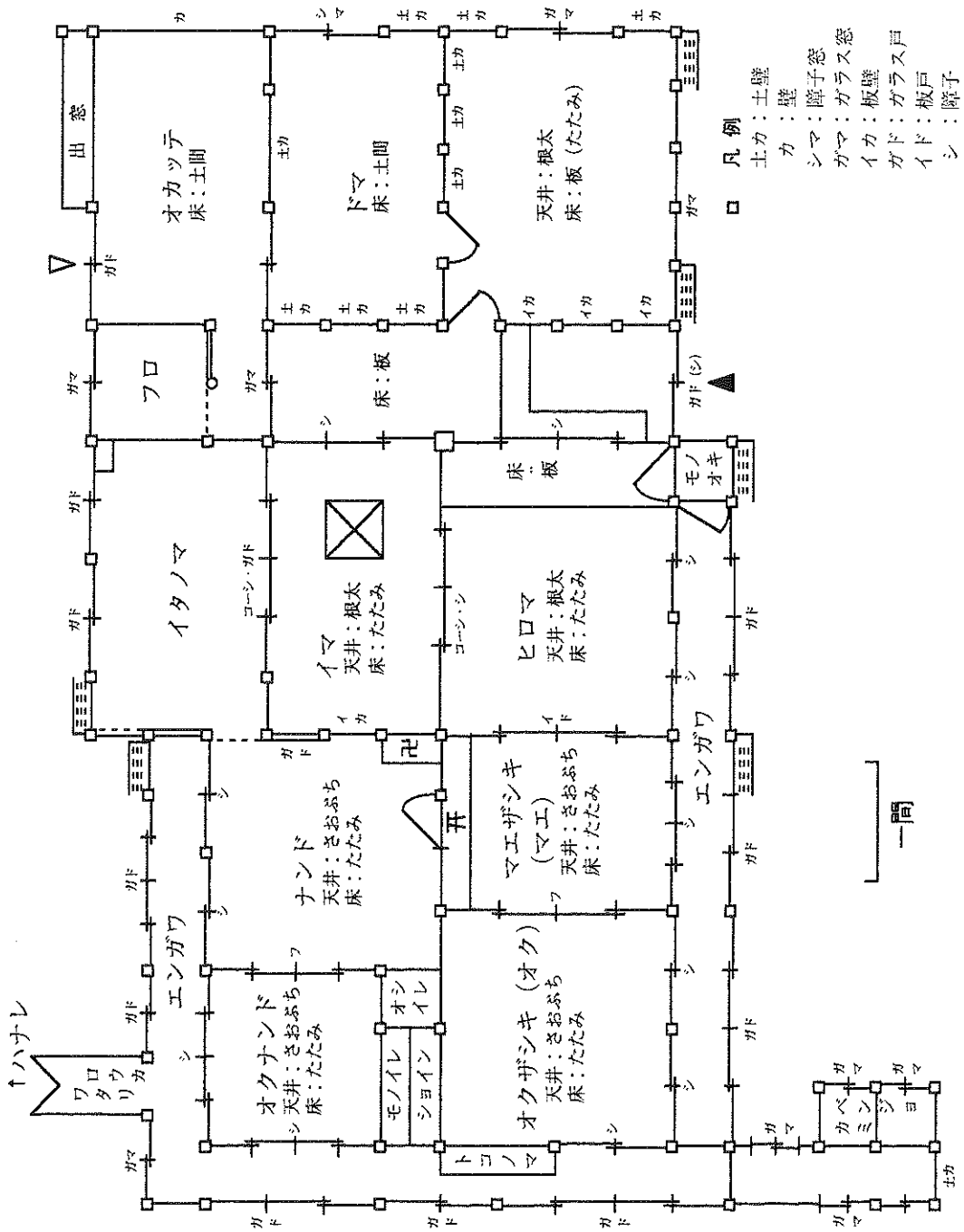
図II-7 旧WN家の間取り

- 凡例
- ガマ: ガラス窓
 - イド: 板戸
 - イカ: 板壁
 - ガド: ガラス戸
 - シ: 障子

の間は板壁で完全に分けられている。ザシキとヒロマの間仕切りはナカドと呼ばれる板の帯戸である。ムキヤアザシキはものおきとして米などを置いていたという。その後再調査に訪れたところ、この家は道路拡張のため取り壊された。

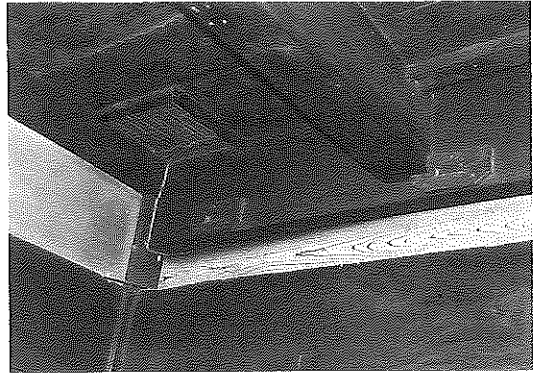
下モヨリのHN家の間取り (図II-8)

茅葺きの屋根を残している。建てられてから一〇年ほどになる。ヒロマには養蚕のための大きなイロリが切つてある。また、ヒロマにコノメを立てた跡や通気口が見られ、イタノマとイマの間の上



- 凡例
- 土カ：土壁
 - カ：壁
 - シマ：障子窓
 - ガマ：ガラス窓
 - イカ：板壁
 - ガド：ガラス戸
 - イド：板戸
 - シ：障子

図 II - 8 HN 券間取り



コノメのあとと通気口

部には通気のための障子がはめられるなど、家のあちらこちらに養蚕をしていた痕跡がある。二階でも蚕を飼っていて、屋根の南側が切り落とされ、大きな窓がつくられている。

ダイジングウサンはナカザシキにオモチを向いてまつられている。調査できた限りで、オモチを向いてまつるのは富沢ではこの家だけである。

オクザシキとザシキの前には坪庭があり、ヒロマの境のところに板塀（かつては沼津垣根）を建てて客用の空間をつくっている。カミベンジョ（上便所）はオクザシキに近いところにつくられ、これもかつては客用だったと思われる。カミベンジョには明徳寺のお札があり、またぐと下の病気にならないといわれる。

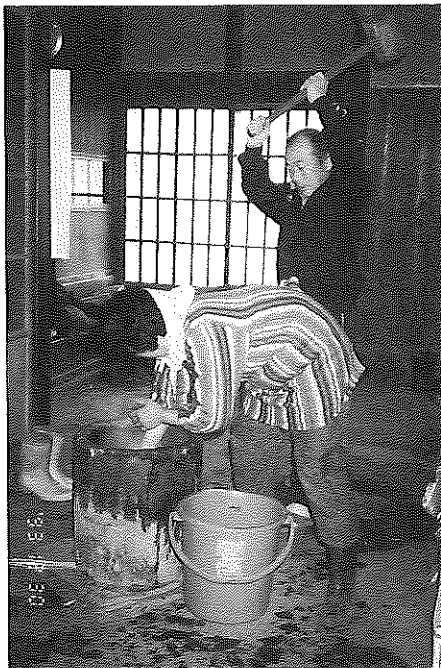
土間をはさんでヒロマの向かい側の部屋は昭和四五年に改装したが、かつては若い衆の部屋だった。

ニワの使い方 ニワのオモチ側は、米俵を置いたり精米をしたり、農作業の場として使われた。雨の日の作業場にも使われた。下モヨリの渡辺嘉市さんは、昭和一六年に出征するまでの話として、「以前の自宅はニワがうんと広がったので、クミの衆が四人くらい集まって、縄ないをした」という。渡辺家のニワには、オオドに近いと

ころにおとなが両腕で輪をつくったくらいの大さきの丸くて平たいタタキイシ（叩き石）が埋め込まれていた。縄をつくるために、タタキイシに乗せてツチで叩く。「コテナワ（細い縄）六〇ひろでイチニン（一人前）」といわれた。秋にはサツマ俵を編んだ。雨降りでも、オシメリヤスミとふれがあったら、こういう仕事も休んだという。

ニワの後ろ側は炊事の間だった。ヘッスイ（ヘッツイ、カマド）を据え、煮炊きをした。水道のひける前は水がめも置いた。ニワの居住部分と反対側にイタノマがあつて、そこで食事をした家もある。昼食は足ごしらえを解かないで、ニワにダシパンを置いてそこでとる家もあった。

たいていの家がニワで餅つきをした。現在も服部克己家では土間で餅つきをしている。餅米を蒸すのは、ニワに続いて建てられたカマヤのヘッツイでしていたが、ヘッツイが壊れてからはセドグチのすぐ外のゲの下にあるソトノヘッツイで蒸す。できた餅は、かつて



ニワで餅つき

はダシパンの上にノシイタを乗せてのした。現在は、コマに張り出した板の間（べつに名前はない）がダシパンの替わりをしている。

ダシパンはほぼ畳一枚の大きさの木の台で、どの家にも一台はあった。ニワにおいてもちやそばづくりに使ったり、昼食の台や腰掛けにするほか、人寄せのときによく使う。法事や建前のときにオモテなどに置いて調理台につかたり、屋根替えなどで近所の衆などにご飯を出すときの台や腰掛けにしたりする。人寄せのときには方々から借り集めた。軒下に置いて夕涼みに台にも使う。「あんな便利なものはなかった」という。

風呂もニワに置くことが多かった。以前はオオドから一間くらい入った居住部分と反対側に木の置き風呂を置いた家が多い。タライの上の板を置いて、裸で風呂に行った。その後、ニワの後ろ側に囲いをつくって風呂場にした。五衛門風呂に変えたところが多い。裏のゲに風呂を据えた家では、外からモシキを入れて風呂を焚く。水が足りなかったので、昔は何日も水を替えないで入ったりした家も多い。棒が垢で倒れないほど湯が汚れていた。「垢や脂肪はからだについていたほうが長生きする」といった。風呂の湯を汲み入れるのは女か子どもの仕事で、汲み出すのはたいいてい男の仕事だった。

居住部分のハレとケ 居住部分は、かなりはつきりとハレの場とケの場に分けられる。オモテに面した二部屋（三部屋）はハレの場として人寄せのときや大事な客の接待などに使い、日常はなるべく使わない。とくにザシキはふだん日中に家族が使うことはほとんどなかった。とはいえ、実際には就寝の場として使っていたり機織りや石臼ひきをしりしている家もあるのだが、そういう家でも「ザシキに通すのは祝言やサケでない」というほどザシキは特別な部

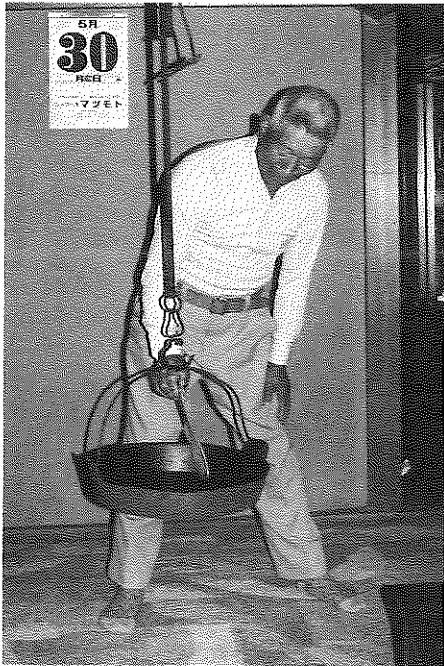
屋という感覚がある。

ケの場として家族が使うのは、主に裏側の二部屋である。日常家族が過ごすのはイロリのあったイマ（コマ・チャノマ）で、就寝の場や出産の場としてはナンドが使われる。

食事・だんらんの場 主に食事をとる場所は、イロリのあるイマだった。その習慣はイロリを使わなくなった現在でも残っていて、イマが食事の場であることが多い。イロリにツツカケ（ツツカギともいう・自在鉤）をさげて、そこに鉄鍋をかけていろいろなものを煮た。ツツカケにさかながついていたという家もある。また、「イロリのマツコ（縁）をたたいたり、傷つけたりすると、その家のおやじの頭をたたいているのと同じだ」と叱られたという。

イロリの座順は、当主の座るヨコザだけが伝えられていて、あとは適当に配分している。ヨコザは仏壇を背負う位置である。

HK家では、朝食と夕食をイロリのまわりでとり、昼食はニワで



ツツカケの再現

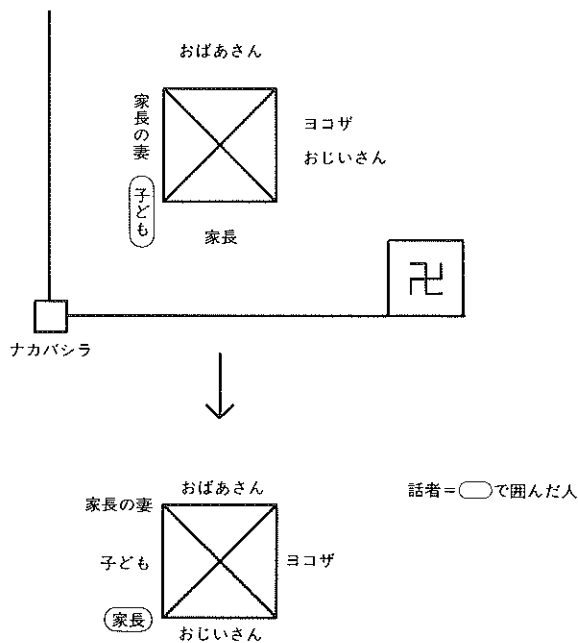


図 II-9 HK家のイロリの座順と変化

ダシパンを使って食べた。おじいさん（現当主の祖父）だけが箱膳を使い、他の家族は適当に手もとに置いて食べた。図 II-9 は、H 家のイロリの座順とその変化であるが、おじいさんが亡くなったあと（昭和三十六年没）は誰もヨコザに座っていない。

W K 家では、ニワの居住部分と反対側にイタノマがあつて（図 II-6 参照）、朝食と昼食はそこでとつた。この家では昭和三〇年ころまで箱膳を使った。小さい子どものものは親の箱膳に入れていた。箱

膳はイマの戸棚に入れていて、食事のたびに持ち出してくる。イマは半分土間になつていたので、めんどうなことではなかつたという。寒くなると、ゴザを敷いた。座順はそれほど決まっておらず、裏の窓からの日当たりのいいところに年寄りが座つた。ヨウジャもたいはいはここでとつた。

冬の非常に寒い日には、イマのイロリで蕎麦がきをつくつてそきでヨウジャにした。寒い日にはフンゴミといつて、チカタビ（地下足袋）をはいたままイロリに足を入れたものだった。そうして蕎麦がきを食べるとからだがよく暖まつた。イロリにはいつも火があつて、鉄瓶をかけてお茶をわかしたり蕎麦がきに使つた。

夕食はイマのイロリを囲んで食べた。オスイトンや煮込み蕎麦、うどんなどいろいろの煮込みをイロリでつくつて食べた。戦後までイロリで煮込みをつくつたという。

イロリの座順は、ヨコザだけが仏壇を背負う場所にきちんと決まつていて、そこに当主が座つた。ヨメが一番下座だったが、それほど厳格なものではなく、客がきたりすると動いた。子どもは適当にすわつたもので、煙たいといつては煙のこないほうへ移動したりしていた。

だんらんの場所もイロリのあるイマだった。イロリは食事の場ではなく、家族があつまつて暖をとるだけのものだったという家もある。イロリはやがてカメノコウというやぐらを乗せたこたつのようなものになり、その後ほとんどの家で掘りごたつにしたが、暖をとりだんらんの場であることには変わりはない。現在もテレビを置いて家族があつまる場所である。

接客の場

客はイロリのある部屋にあげ、囲んですわつてもら

った。気兼ねのない人や親戚の場合にチャノマ（イマ・コマ）を使
った。近所の人が話すときやちよつとした客ならば、アガリハナ（ア
ガリガマチ）に腰掛けてすます。ザシキに客を通すことは、ふだん
の暮らしてはほとんどない。ヨリアイ（寄り合い）でも、イマを使
った。結婚式や葬式などの儀式のときとコウゴト（講の集まり）の
ときくらいにしか、客を通すことはなかった。オモテ側が三部屋の
家ではオクザシキが気兼ねの相談ごとなどに使われ、目上の親戚な
どをザシキに通すが、めつたに使わなかったという。ハレとケの使
い分けが接客場所によく現れている。

就寝の場・出産の場 主たる就寝の場はナンドである。たいて
いは若夫婦の寝室となった。インキョがある場合、老夫婦がインキ
ョ、当主夫婦（または若夫婦）がナンドに寝て、子どもは小さいと
きはナンドで親と寝るが、三人くらいになると大きい子どもからお
ばあさんと寝たり、ハナレや二階に寝るようになる。

インキョがなかったり、どちらかが亡くなってひとりになったり
すると、年配者がザシキに寝ることも多い。

下モヨリのWさん（大正一〇年生まれ）の例をあげてみよう。子
どものときは両親（若夫婦）といっしょにザシキに寝た。青年にな
ると、クラブに寝泊まりした。その後戦争に行った。帰って来てし
ばらくはヒロマに寝た。そのとき、両親はザシキに寝ていた。結婚
して、新婚のころは親と交代してザシキに寝て、妻が身ごもるとナ
ンドに移った。ナンドはお産の場所にもなった。子どもをだいたい
産み終えるころ、ザシキに移った。

お産はかつては必ずナンドだった。服部きよさんの親のころ（明
治半ば）は、ナンドの畳をあげ、筵を敷いて、そこでお産をしたと

いう。明治、大正初期生まれで嫁いできた人たちは、ほとんど皆ナ
ンドで出産している。

戦後になって出産している人は、お産婆さんを頼み、ザシキにフ
トンを敷いて産んだという人もふえてくる。これは産婆の指導で明
るいところで出産したためと思われる。後産は男がその家の墓地に
イケた（埋めた）。

人寄せ・儀式の場 祝言（結婚式）やトムライ（葬式）は近年
まで各家でおこなった。その場合、おもてに面した部屋を建具をと
りはずして続けてひと間にして使った。四間の家ではザシキとナキ
ヤ、六間ある家ではオクザシキ、ザシキ（ナカザシキ）、ナキヤ（マ
エザシキ）を続けて使った。四間全部を使った家もある。

祝言の前に親や仲人をよんでサケをするときは、ザシキを使う。
祝言は、オモテ側の部屋を続けて使う。床の間の前に仲人、花嫁花
婿、カネオヤが並び、ひと続きにした部屋の両側に親戚が向かい合
って座る。

ウチウマレで明治三五年生まれの服部きよさんは、祝言のときは
四つの部屋すべてを使ったという。自分のときも昭和二十八年に息
子のときも四間全部を使った。このとき、上座はザシキとヒロマだ
った。祝言は三日から五日くらいかかり、長い家では一週間かける
ところもあった。そのためになんかの家に一〇〇人分の皿や茶碗
のほか四つ足膳や二の膳があつて、ふだんはナガヤの二階などにし
まっておいたという。

葬式でも、同じようにひと続きにした部屋を使う。棺は床の間の
前に北枕にして置く。運び出すとき、女が別のお茶を出す。この
とき、イマに移してお茶を出す家と、ザシキ（またはオクザシキ）

でお茶を出す家がある。玄関にカリモン（仮門）を立てて、棺はそこから出す。棺が出たあと、手伝いの女衆の誰かがミカゴ（またはメカゴザル）を足で蹴って部屋を浄める。コシアゲの人たちは、終わるとヤシキの入り口にアシナカを脱ぎ捨てていった。

僧侶が入りするところは、伝承が家によってまちまちである。ザシキの前から直接出入りしたという人（明治三五年生まれ）、ヒロマの前から出入りしたという人（大正二年生まれ）、ふつうに玄関を使ったという人がある。誰かがふだんにヒロマの前のエンガワから入ったりすると、「お坊さんのようだ」といったという話もある。

お盆のときも、僧侶は玄関から入るといふ人とエンガワから入るといふ人がいる。高齢の人たちが「オッサンはエンガワから」といふ伝えているので、かつてはザシキかヒロマの前のエンガワから出入りしていたものがいつのころからか玄関を使うようになったと思われる。

迎え火はヤシキの出入り口のそばで焚く。ロクドウ（細い竹）を立てて、香花を竹にさして立て、火を焚く。一三日に墓に行つて迎える。「ショウリョウサンはザシキのエンガワから入る」といって、ザシキ（オクザシキ）の前のエンガワに足をふくための洗面器と手拭いを置く家もある。段飾りはザシキ（オクザシキ）に飾る。

送り火は同じところから出るといふ人とどこからでも出るといふ人がある。黄瀬川に飾り物や線香を持つて送りに行く。

コウゴトもオモテ側の部屋を続けて使う。講のヤドになるのは、たいいていモヨリやムラの戸数分の年月に一回だから、特別な日と考えていたという。

養蚕と機織りの場

養蚕は大正時代が一番盛んで、昭和五、六

年くらいまでよくやった。「製茶は静岡、三重、京都、生糸は無二の輸出品、焼き物類は瀬戸、九谷」といって、富沢でも蚕を専門にする家があった。そのころは四間全部にユルリ（イロリ）がついていて、春と秋の蚕の時期には畳をあげてユルリを使った。ヒロマの二階も目張りをして使った。ヒロマから使い始めた。蚕が透き通つて糸を出すようになるとワラでモズ（巢）をつくつて入れるので場所をとるようになり、ザシキやナンドも使った。イマ以外は全部使った。

ひとつの部屋にコノメが二つかかった。西と東に立てて、真ん中に作業の通路を残した。モズを使うようになって、部屋がふさがつてくると、コメノの間の通路にむしろを敷いて、そのふとんを敷いて寝た。「おとなはお客（蚕）といっしょに寝る」といった。一年中の経費をかせぐもどだったので、力を入れたものだった。

そのころは、糸をとつて、機織りもした。糸とりや機織りはヒロマやヒロマの前のエンガワでした。ザシキの前のエンガワで機を織つたという家もある。夜具や着物を織つた。自分の家の蚕から糸をとり、機屋でよりをかけてもらつて、紺屋で染めたものを織つた。

服部きよさんは、母親に習つてヒロマで機織りをした。「一日に二丈八尺（一反）織らなきやあ嫁のもらい手がない」といわれていた。裁縫は先生についた。江戸棲もつくつた。「白、黒、色つきを持たせるのはオオヤの務め」といわれていて、ずいぶん機織りや裁縫をしたという。

また、大正生まれの人は、ゆかたなどを一晩で縫い上げるのに、夜までヒロマで縫つて、遅くなるとナンドに持ち込んで仕上げたという。

(二) 家の手入れと生活環境

屋根替え かつてはほとんどの家がクサヤネだった。下モヨリの渡辺きんさんが昭和一年に嫁にきたときには「このへんはみんなクサヤネだった」という。中モヨリの服部弥作さん（大正 年生まれ）は生まれたときにはすでに主屋も付屋も瓦（清水瓦）だったというから、そのころからしだいに瓦は入っていたものの、ほとんどがクサヤネだったといえる。本格的に瓦屋根になっていったのは、昭和三〇年から四〇年にかけて主屋を建て替えたときである。

そのころまでクサヤネがあつたにもかかわらず、富沢ではほとんどカヤムジンの話が聞かれない。服部弥作さんが「昔カヤムジンがあつたという話くらいしか知らない」という記憶がある程度である。

屋根替えには、全部を一度に葺き替えるマルブキと、表と裏の二面を替えるやりかたと、悪くなったところだけを替えるサシカエ（サシガヤともいう）がある。

マルブキをすると、表側は三〇年くらいもつ。だいたい三〇年に一度マルブキをした。裏側や大きな木があつて木陰になるようなところはいたみやすく、ときどきサシカエが必要になる。腐つて雨漏りがしていても雨がふつているときには分ならず、雨がやんでからバタバタ落ちてきて気がつく。渡辺喜市さんは、「女衆（妻のこと）は瓦屋根の家から嫁にきたのでそれを知らなかったから、雨漏りを雨降りだと思つて寝過ごしてしまつて、朝大忙しになったことがある」という。サシガエは、屋根屋を頼むと、竹、フジツル、縄、茅の見積もりをしてすぐに直してもらえた。

現在もクサヤネのHN家では、「イロリを使わなくなつてからはも

ちが悪くなった」という。HN家では一九六六年に表と裏を一度に葺き替えたが、裏面はその後二度手を入れた。表面は一九九一年にサシガヤをした。

茅 昔は富沢のカヤバがキタノクボにあつて、そのころにはカヤムジンもあつたというが、話があるだけで実際を知っている人はいない。すでに「共同のカヤバはない」という認識になっている。官地だったカヤバから、茅を刈る認可をもらつて刈つた人もある。それにしてもたくさんはなかつたという。

茅はほとんどオオノツバラ（大野原）のものを買った。深良や印野の人たちがオオノツバラで刈つた茅を買う。一駄でいくらという値段だった。一駄に二種類あつた。三把をマルツタ（束ねた）ものが一束で、それが六把で一駄というものと、四把をマルツタものを一束にしたものを四把で一駄というのがあつた。刈る人によつてやり方が違つていたのだという。

買った茅はバリキで運んだ。前出の服部きよさんは、バリキに一段四把を四段くらい積んだという。大正一〇年生まれの渡辺喜市さんはあわせて三四把積んだという。

茅を運ぶのは、近所の衆が手伝つてくれる。「何日にやるから」といつておくと、馬を出してバリキで運んでくれた。一日ではできず、売る側のできぐあいによつて何日もかかるときもあった。

渡辺喜市さんの体験より茅運びを述べてみよう。渡辺さんは印野に行った。印野ではイチニン一回しか行けない。クミの人や身内（ナコウドシンセキ）が手伝つてくれた。バリキ五、六台ずつがきてくれた。よほどいい馬でないと一回で五段（三〇把）しか積めないが、一軒の家に五段分の茅がそろっているわけではなく、この家に二段、

あの家に三段、あそこには一〇把というぐあいであって、集めて歩くので手間がかかった。集めているときは馬は遊ばせておいて、みんなで荷台に積んでいく。いい馬のときは平たく底辺に一〇把、その上に一二把、その上に一二把積み上げ、ロップ（縄、ロープ）で絞める。ふつうは底辺に八把、その上に九把ずつ二重ねし、さいごに四把を平たくのせる。両方に人がいて、加減を合わせてロップを引く。全部積み上げると馬が見えないほどだった。ロップはあらかじめ家でしめして（水につける）おく。そのほうがきつく絞められる。ゆるくてズルズルだと「オンバクだ（だらしがいい）」と笑われる。サシカエの茅は、富沢の山（もとの共有山、東名ゴルフ場の上）に刈りにいった。

運んで帰ってくると、その年に屋根を葺く家でごはんのしたくをしていた。酒をだすところもあった。

運んだ茅はオモチに置くという人と、火が危ないからオモチには置かないという人がある。オモチに置かない場合は田んぼに置く。茅はなるべく横にして置く。こうすると茅がまっすぐになるし、乾きすぎない。山になるように積んで、上にシートをかぶせて、端を丸太でおさえた。シートは屋根屋がもっていたので、かなり以前からシートをかぶせていたという。

屋根替えの準備 屋根屋は少なくとも四、五人頼む。ひとりに頼むと屋根屋がほかの職人も集めてくれる。富沢では鳶の服部和男家のおじいさんが屋根屋（ムラノヤネヤ）だった。ほかに、深良の遠藤原のハダさん、南一色のチョウチャン、千福の荻田さん、公文名のモロフシさんなどの名前があった。そういう人たちがいなくなつて、御殿場から頼むようになった。およそ一〇年前のWM家の屋

根替えでは、修善寺の職人五、六人を頼んだという。一九九一年のHN家のサシカエは御殿場の職人に頼んだ。

屋根替えの手伝いはイイ（ユイ）だという。たとえ自分の家がクサヤネでなくても手伝った。まず、足場をつくる。それから古い茅をクズス（壊す）が、その前に家の者で畳をあげ、たんすなどにむしろをかける。屋根替えの途中で雨など降っては煤が落ちてあとがたいへんになってしまふ。クズスのは一日でやっってしまう。みんな煤で真っ黒になったものだった。近所の衆が集まるので、女衆はクズバンを出してごはんの手伝いをする。オヒル（昼食）、ヨウジャ、ユウハン（夕食）を出す。ヨウジャには茶、菓子、もち、おはぎなどを用意した。

古い茅はみかん畑の衆がもらいにきたり、茶畑に敷くといつてほしい人が持っていたりした。サツマイモに敷いてもいいという。

葺き替え クズした翌朝、職人にいわれたものをそろえておき、屋根屋は場所にあうように茅を区分けして葺き始める。手伝いは茅を運んだり、上にあげたり、職人の手もとに運んだり、ハリサシをする。ハリサシは屋根裏に入つて、茅をとめる縄をつけた針の位置を小屋組に結わえるように指示する仕事である。屋根裏に入る前に、あらかじめ職人と符牒を決める。方角をトウキヨウ、アシタカヤマ、ゴテンバ、ヌマツ、ハコネヤマなどと決めておき、「も、ちつと、アシタカヤマ！」とか、「ヌマツ、ヌマツ！」などと叫んで指示する。「人数が多くて、てんでに大声で指示するし、『へたくそ』なんていう声もあがつてにぎやかだった」という。

屋根の表側を葺くのは腕のいい職人で、裏側はあまりうまくない職人が担当した。裏を葺く職人をセド職人といつた。ヌキサキ（軒



ウグシと御幣

先)がそろっているかどうかで、いい職人かどうかを見た。デコボコがあると、「あいつはセドだ」といって、裏にまわした。

昭和二三年にW K家では最後の屋根葺きをした。そのころ茅は一駄一〇何円かした。しっかり葺いたので一〇〇段(段=駄)かかった。「坪五段」といって、ひと坪に五段(三〇把)使って葺くとよい。四段にすると長持ちしない。厚ければ厚いほどよい。

茅だけでなく麦を使う人もいた。ノベに麦カラを使う人もいた。W K家では茅で葺いたが、茅をひとならべしたあと、麦カラをサンドイツチの具のようにひとならべする。こうするともちがよいし、茅がなじんで屋根屋も葺きやすい。麦カラは腐らないし、水がきれるのだという。麦カラがない家は稲藁を使ったりするが、麦カラのほうがもつという。

食事は外でダシバンで食べてもらう。ユウハンのとき屋根屋の棟梁が翌日の段取りを決める。必要な人数などを指示するので、施主は足りないとならべたり、いつも手伝ってくれる人がほかの用でこられないときには誰を頼むかなどの算段をする。

屋根が葺ければ手伝いは終わり、あとは職人の仕事になる。最後にウグシ(棟)

をつくる。棟に細長い竹をびっしり乗せ、五センチメートルくらいの幅に割ったシヨウギでおさえる。シヨウギは三尺間隔にする。シヨロ(棕櫚)の縄で飾りにする(写真参照)。全部が終わって屋根葺きが完成したら、屋根の真芯、ウグシの正面の中央に御幣を立てる。W K家は一週間でできあがった。「なるべくガンコ(丈夫)に葺いてくれ」といったのでそのくらいかかったという。

マルブキはたいへんな仕事だし、三〇年にいっぺんのことなので、もちまきをした。紅白の餅をつくってまく。しかし、建前というほどではないので、気持ち半儀くらいまく。親戚など毎日手伝ってくれた人や屋根屋の棟梁を招き、ザシキとナキヤでごちそうをする。棟梁もきれいなハッピを着てくる。主人にはお供えをもたす。屋根屋には引き出物を出す。引き出物では地下足袋などが喜ばれた。「文数などがわからないから」というと、「合わなくても女衆でも使えるし、文数の合う人と取り替えることができるから、そのほうがいい」といわれた。

H N家の屋根替え 一九六六年に表と裏を替えたH N家では、最初に職人が家を見て、どのくらい茅がいるかを見積もった。一〇〇駄ということで、須走か須山の茅を刈る人に頼んだ。少しずつ運んで、長い間前の田んぼに積んでおいた。イイで手伝うのは昔と変わらない。

H N家にはこのときの「屋根フキ手伝人控え、屋根フキ費用控え」がある。期間は一月二日から三〇日の九日間である。下モヨリの一班から三班の人たちや親戚が何日かきてくれたか、または酒、醤油、砂糖を出してくれたかなどが書きこまれている。「大工さん半日奉仕」というのもある。手伝人は延べ四七人で、もっとも多くきたのは五

日という人が一人で、三日が四人、二日が八人、あとは一日きた。オヤコ関係やナコウドオヤコは余分にきてくれる。屋根職人は延べ四二人となっている。残った茅一〇段は屋根屋が一五〇〇〇円で引き取っている。

イロリのあったころは、ほおかむりをしていても肌まで煤で真っ黒になったが、このときはほこりだけで黒くはならなかったという。

大そうじ 年の暮れに大そうじをする。オモチにゴザを敷いて、家の中の家具、神さまをみんな出して煤払いをする。昭和二〇年ころまでは、どこの家でも竹でくもの巢や煤を払った。竹はスダケ（細いささ竹）で、二本を結わえて使う。黄瀬川のそばにたくさんあったので、そこから取ってきたが、河川改修でなくなってしまう。

畳をあげてオモチに立てて、たたいた。神さまのものは男がきれいにして戻し、白いごはんを供える。



スダケを使った大そうじ

HN家では、大そうじには近所の男の人たちがきて、踏み台を使って天井や柱をぞうきんで拭いた。HN家はススハキダンゴ（米のダンゴ）とイモや大根のみそ汁を手伝ってくれた人たちにふるまった。それらを屋内神にも供えた。

生活の水とその利用 水道が引かれる前は、水では苦勞をしていた。岩盤があつて、井戸を掘ってもつかえて掘りきれなかった。

掘ったけれど水がでなかった、という家がある。水の口に当たったところだけが出た。「昔は水が出なくて困ったので、お不動さんは水のあるところになつた」という。

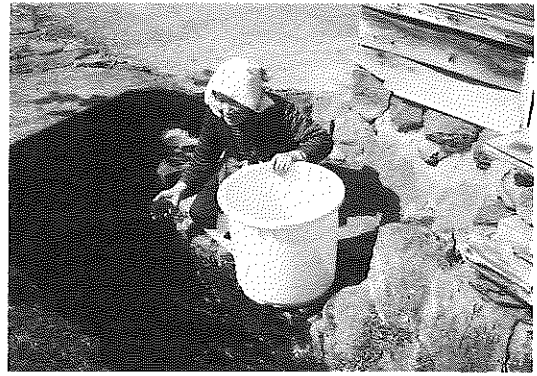
ツカイミズ（生活用水）はほとんどを用水に頼った。かつては用水（カワとよぶ人も多い）は「三寸下がれば水神さんがいる」といって、みんなきれいにするように心掛けていたものだった。実際、

針を落としても見えるくらいきれいだつたという。年に二回、各家から男がひとりずつ出て、川さらいをした。

明治生まれの人は、人があまり使わないうちにと、「朝早く起きて一日分の水をカワから手桶で汲んできて、ニワのカメをいっぱいにしておいた」という。ところによって、飲み水は共同井戸の水を使うようになった



用水の利用（下モヨリ）



トオリ前の用水

が、かなり近年になるまで用水の水はツカイミズとして利用され、うどんやそばを洗ったり、風呂に汲み入れたりした。戦後まで飲み水、米とき、アライ（食器洗い）、洗たく、風呂の水に用水を使ったという人も少なくない。

そのため、炊事や風呂の汚れ水は用水に流さなかつた。汚れ水は堆肥としても役に立つ。風呂の汚れ水と

炊事の水をためて、タイヒベヤに運んで堆肥にかけた。HN家では裏山にカメをイケて（埋めて）、炊事の水を竹の樋でカメまで流してためた。いっばいになると、竹に撒いて肥料にした。炊事が出る野菜くずはべつにとつて、馬や牛の飼料にしたり、タイヒベヤに運んだりした。

下モヨリでは、田口建設のあるところに共同井戸があり、服部恒雄家くらいから下の約二〇軒が水を汲みにいった。水はよく出た。渡辺さんさんは、「近いので人のいないときを見計らって行ったが、たいてい夕方その明日の分を汲みにいった」という。ニワの流しそばの水がメにためておいた。

下モヨリの服部直邦家では、この共同井戸の水をごはんとみそ汁と飲み水に使った。天秤棒にバケツを二つさげて運ぶ。水がめにふ

たをして、ひしゃくですくった。水は貴重品だった。この家ではかつて井戸があつたがでなくなったと伝えている。水運びがたいへんなので、渡辺喜市家、服部芳太郎家とともに飲み水用に服部隆徳家の井戸から水を引いてまわしてもらつたが、まもなく水道が通つた。

服部直邦家ではヤシキの中を用水が通っているの、カワバタをつくつてそこで洗たくものも食器洗いをし、うどんを洗い、風呂を水で汲んだ。カワは主屋のニワ側を流れていて、セドグチは用水に向かつていついていく。風呂は雨の日で少し濁っていても使つたが、暗いときは汲みにいくのが恐ろしかったという。服部節子さんは「お水はほんとに泣きものでしたね」という。

中モヨリの服部克己家では、用水が汚れてきたので昭和二一年に井戸を掘つた。そのころ、富沢では四、五軒に一軒くらい井戸を掘つていた。地下水ではなく山からしみでた水で、手汲みポンプで汲みあげた。井戸のある家にはない家もらい水をした。ひでりか地震かで水がとまったので、今はふさいであるが、べつにお蔵いもなにもしなかつた。

上モヨリの渡辺武彦家では井戸を掘つても水がでなかつたので、現当主の祖父が昭和二年に裏山にタンクを二か所つくつて湧き水をため、それをヤシキに引いて飲み水にした。一年に一回タンクのそうじをした。昭和四一年、十分に消毒できないということで、水道を取り入れた。

燃料 モシキ（燃し木）にはタキギ、モヤ（細枝）、マキ（太い枝）、ブツパライ（割らなくても燃やせる）などがあつた。薬をモシキに使うと家と、馬のクイヨウ（飼料）やサツマの肥料にするので使わない家がある。木の種類は、クヌギ、スギ、ヒノキなどだつた。

ヘツツイではマキやワラを燃やした。火付けには枝打ちしたスギツバ(杉の葉)を使う。イロリではマキや炭を使った。消し炭をとって置いて、マキが燃えるようになるとその上に乗せて、あまりモシキを使わないようにして暖をとったという。

自分の山に冬の霜の降りる前に集めに行く。二年先の分を集めた。マキは三〇センチメートルくらいにタマギツタ(寸法を見て切る)のを、ヨキで四つに割っておく。タキギやモヤは束ねる。こうしたモシキはホンヤやナガヤなどのどこでもヌキバ(軒端)に積んでおいた。

「モシキのえらい家(うち)は金がある」とか、「エー(家)のまわりをまわってみて、モシキがない家(うち)は貧乏こいてる」などといった。

(四) 新築

建て替えとその手順 新築をするようになったのは終戦後で、多くは畑を売って家を建てた。もともと家があったので、古い家を壊してだいたいの前と同じところに建てた。

家を建てる手順は、おおむね次のようにした。①山から木を切り出す、②製材、③古い家を壊す、④地鎮祭、⑤ジツキ、⑥建てる、⑦建前、⑧家移り、⑨ヤビマチ。

建て替へはだいたい二月から六月までにおこなう。建てている間は家族はナガヤで生活した。神仏も引越した。

自分の山の本で建てる場合は、近所の衆(クミウチが主)や親戚が手伝って、バリキで降ろした。主な柱や梁をそれでまかない、足りない分は大工がもってくる。ナカバシラにするケヤキなどは五、

六年はねかきないとするので、ずいぶん前から準備をする。そうでなくとも、材木から何から何年も前から用意したものだった。丸太で持ってきて、製材所に出した。富沢に「かしわざ」という製材所があったので、富沢の人たちはみんなそこに出した。

古い家を壊すときは近所の衆や親戚が手伝う。モヨリには家の主人が頼んで歩き、親戚にはハガキなどで知らせたという。べつにお祓いはせず、屋根から壊す。カケヤ(木のツチ)でたたいて茅を抜いて、くずす。茅は肥料にし、柱はたきぎした。

手伝いの人にはごはんを出す。昼食に野菜の煮物やみそ汁を出し、ヨウジャにはおはぎやまんじゅうを出した。女は食事の手伝いをした。大工には朝からごはんを出した。朝昼晩とヨウジャを出すと、日当が少しは安くなるという。

地鎮祭とジツキ 新しく家を建てる土地は地を浄める。神主(愛鷹神社の徳田さん)にきてもらい、家族と棟梁ぐらいでおこなう。親戚の主な衆がくる家もある。野菜物を供えて簡単にする家と、野菜のほかに、酒、塩、米を仏器に入れ、もちをつけて、頭つきの魚を供える家がある。飾り物は神主にもっていつてもらう。

ジツキも近所の衆が手伝う。近所の衆は「いつ、何をするのでつか。いそがしいときは呼んでください」と聞きにきてくれる。近い親戚がくることもある。男が砂を入れたり、ヤグラのひもを引っぱって地をならす。昼食とヨウジャとヨウハン(酒)を出した。

建てるるときも近所の衆が手伝う。大工の指示で番号のついた木を運んだり、屋根の下地を打ったりする。

建前と棟梁送り 前の日にもちをつく。近所の人たちが手伝って、まきもち用に丸もちにする。大工などの職人に渡すお供えやま

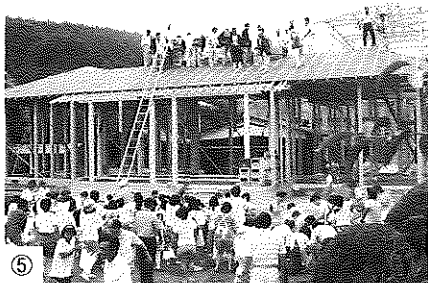


②当日、屋根の上の供えものとまき餅

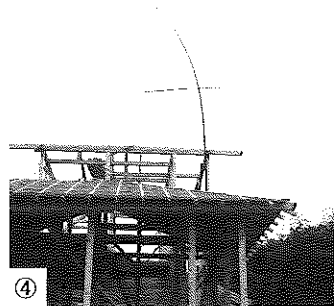


①前日の準備 まき餅づくり

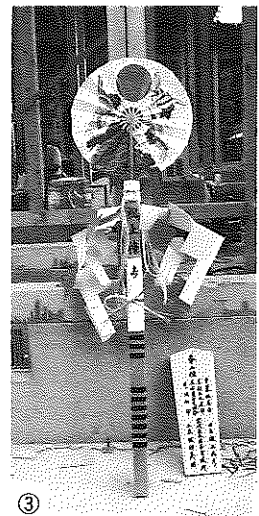
きもちとして、二俵くらいついた。当日は、朝から近所の衆と親戚が手伝う。ダシパンを借り集めて、食事の用意の台にした。中モヨリでは女は全部が食事のしたくに来たという。



⑤



④

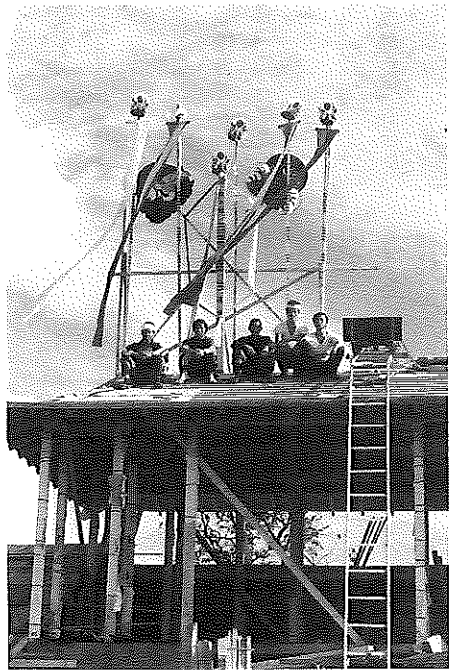


③

- ③又サ
- ④鬼門の矢
- ⑤もちまき
- ⑥ふるまい



⑥



WK家のタテマエ（昭和41年）

男は建前の供え物や飾りのしたくをする。屋根の上に五色の旗をあげる。梁の上に祭壇をつくり、米俵二俵、頭つきの鯛、塩、酒、お供え、四方もち、まきもち（投げもち）、野菜、果物などがある。上にあがるのは、大工などの職人、家の主人と長男、主な親戚などで、女はあがらない。上で祝詞をあげ、酒（お神酒）を一杯飲む。大工が厄払いに四方もちをまき、それからみんなでまきもちをする。降りてきてから、みんなでごはんを食べ、酒を飲む。手伝ってくれた人や職人にオフルマイをし、職人には全員に引き物を出す。オオブルマイという。

ごはんや酒がすむと、棟梁送りをする。大工の棟梁が荷車に米俵を積んだ上に乗って帰るのを、手伝いの衆が送っていく。五色の旗も持っていく。送っていった人たちは、棟梁のところまでまたごちそうになる。大工、左官、建具屋などの職人には、御祝儀とお供えを持って行ってもらう。男たちが帰ったあとで、同じところで女たち

が食事をして、帰る。

家移りとヤビマチ ヤウツリガユは調査した限りでは聞かれなかった。家移りはまず神さまと仏さまを家の主人が入れる。大安吉日に移り、家族だけでお祝いをするという人もあるが、たいていはタンスなどすぐいるものを移してあとはポツポツ入れていったという。

ヤビマチはする家としない家がある。あまり日をおかないで（一か月以内）、親戚と近所と棟梁をよんで、新しい家の中でごはんなどをふるまった。

（宮村田鶴子）

第二節 家族と親族

（一） 家族

初子相続と女性の生活 — Aさん（明治三五年生まれ）の場合—
裾野地域では、農作業の人手確保のために、男の子がいても年下の場合には長男の相続を待たずに、長女すなわち初生子の相続が行われることは珍しくなかった。Aさんの場合も、九人兄弟（女六人、男三人）の長女だったが、百姓が大変だったので婿をとって家を継いだ。

自分自身は貧乏で学校も思うようには行かせてもらえなかったの、子供たちにはそんな思いをさせたくないと一生懸命働いて学校に行かせた。一番下の子が東京の大学を間もなく卒業、商社に就職が決まってやっとほっとした頃のある日、夫は最後の仕送りのため

に米の糶擦りに出掛け、交通事故に遇って死んでしまった。Aさん四八才の時のことだった。

しかし、一九才の時に生んだ長女から七人の子供たちは全員元気で、今は孫も一人、ヒコ孫が七人いる。もつとも、今の若い者は百姓をしないので、九〇才をすぎた今でもAさんは百姓仕事を手伝わっているという。

嫁と姑 ― Bさん（昭和一九年生まれ）の場合―

昭和四九年に六二才で亡くなったBさんの姑は、伊豆佐野からカゴで来た最後の嫁だったという。姑は亡くなる四年前、昭和四五年の年頭にあたって、嫁であるBさんに主婦としての心覚えを書いて渡した。そこには、

・台風の時でも雷の時でも、毎日すべての部屋をハタキをかけ、箒で掃除すること

・家の前を通る人全員に頭を下げるように
・いつもことばをきれいにするように

といったことが認めてあったという。また姑はコダに座って、よくBさんに各家の内情や歴史などことまかに話してきかせたが、他の人には絶対悪口をいうことはなかったという。家のこと、親類のことなど嫁はこうして姑から受け継いでいったのである。

子育てと行商 ― Cさん（明治四三年生まれ）の場合―

昭和五年に一九才で嫁に来た。はじめは姑が、野菜のあまりを裾野で売って魚を買ってきてくれるのが嬉しかったので、四〇代のはじめに自分もやってみることにした。最初は夫とタバコの栽培をするためにお金をつくろうと始めたが、五〇代で夫が倒れて亡くなったからは、お勝手を心配しなくていいからとってくれる姑のすず

めで本格的に行商に出るようになった。

子供の学費くらいは稼ごうと、サトイモ・キュウリ・ナス・サツマイモなど一五貫くらいを背負って売り歩いた。一軒一軒まわって歩くのも楽しみで、夜中に起きては四時ごろ家を出て、午前中には帰るといふ生活を六〇才くらいまで二〇年間続けた。息子は裾野高校の一回生になったが、当時の月謝は七五〇円。稼ぎの方は七五〇円どころではなく、多い時は五千円から六千円くらいになって、子供たちを学校に行かせるのに充分だった。最後はもう恥しいからやめたが、同世代の女たちは皆この行商をやったものだった。

オヤネンブツと位牌分け 裾野地域には親が亡くなると、寺の住職に子供の数だけ紙に親の戒名を書いてもらって、分家や結婚などで家を出た子供たちもこれをそれぞれの家へもらって帰って供養する位牌分けの習慣がみられる。富沢でもこの位牌わけは行われていたが、都会暮らしの子供が増えてきたため、二、三年前からやめてしまった。

一方この位牌をもらった子供たちが、七日ごとに四十九日まで順に念仏をあげて供養するオヤネンブツという習慣については、モヨリの中では今も続いているという。

(二) 親族

ムラシンセキ 遠い親戚より近くの他人、ということばがあるが、近くに住んでいることはさまざまな場面での助け合いの基本である。富沢のムラの中で、嫁の行き来など婚姻によるものではなく、懇意につきあう家をムラシンセキといい、各家毎に数軒が代々つきあいを続けている。ムラシンセキは、葬式や結婚式、法事などには

呼びあい、手伝いあう。集団ではなく、家と家の相互の関係であり、ムラの中の家を連鎖的につないでいく。渡辺武彦家のムラシンセキは現在は九軒。同じ渡辺姓の隆雄家、滝夫家、哲夫家、宗一家、昭和家、功平家、喜市家、これに服部姓の直邦家、利夫家の二軒が入っている。本来のムラシンセキからインキョに出た家も含まれるので多くなってしまうという。

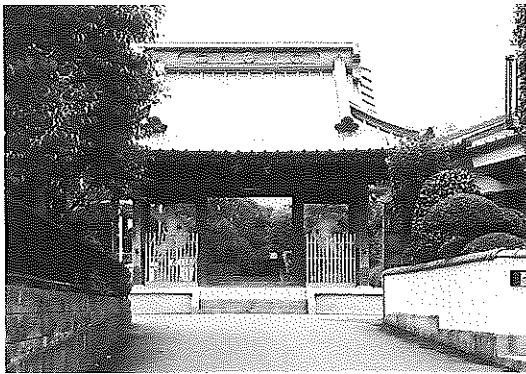
ムラシンセキというからには、シンセキ関係を結ぶ契機はいろいろでも、その範囲はムラを越えない。渡辺隆徳氏が区長だった頃は渡辺姓を中心に二五、六軒がムラシンセキとしてつきあっていたという。これはムラの中で相談事のブレーションとして応援してくれる人が多いほど区長としての仕事をしやすかったためで、実際にムラの改革はムラシンセキの力添えのおかげでできたという。

昭和五〇年に家を新築した時には身内として兄弟のほかムラシンセキが集まり、モヨリの人たちとともに手伝ってくれた。このように、かつてはムラでの生活は多くの人の手助けがあつてこそ成り立つものであったから、ムラシンセキは大切な関係であった。しかし時代が変わって、葬式にも結婚式にもまた新築の時ですら人手が必要なくなった現在は、このムラシンセキはほとんど整理され、数が少なくなっている。

カネオヤとコブン 裾野市域のムラでは結婚する時に仲人とは別に、カネオヤといつてその後の人生の後ろ盾となってくれる人を頼む習慣がある。カネオヤは一生世話になるものであるから、ムラうちのオヤブンにたのむことが多い。特に富沢のように地主、小作関係のはっきりしているムラでは、地主がオヤブンとして、コブンの小作の人たちのカネオヤとなった。カミという屋号の渡辺武彦家

は富沢の三分二近くの土地を所有した地主であったが、やはり半数近くの家のカネオヤとなっている。また、同じくオーヤ（地主）だった服部芳太郎家も二〇軒ほどのコブンがあつてカネオヤとなっていた。

カネオヤは個人が頼むものであるが、その関係は代々続くものだった。結婚式にあつてカネオヤはタライなど、嫁入りの道具すべてを買いそろえたり、赤ん坊ができたという報告を受ければハラオビを贈り、金をつけて出産用の品物を贈るなどオヤとしてコのためいろいろな援助をした。コの方でも、オヤの家で手が足りない時はかけつけたり、今だに初物がとれたり、旅行に行つた時などは必ず土産を届けに行く。正月には餅を、盆には炊き込み御飯をもっていったりと、日ごろからとりわけ懇意につきあっている。ただし農



桃園定輪寺

地解放で地主、小作関係がなくなつてからはこうしたカネオヤとコブンの関係もかわつてきて、今ではカネオヤをたのまない人もいる。オヤとして後見役をつとめるという意味から、カミの家では代々、定輪寺のカネオヤとなっている。曹洞宗の定輪寺では世襲制ではないので、長男が継ぐ場合でも改めて鶴見の総持寺へ行き、シンザン式をして寺

に入る。この時に定輪寺に入るまえにまず、カミの家のホトケさん
 にあいさつをし、カネオヤのカミの家から贈られた緋の衣に着替え
 てから寺へ行く。この時の僧とオヤの関係は、オヤが娘を嫁に出す
 時と同じであるという。

村落生活ではかつてはいろいろな力を頼りにしなければ生きては
 いかれなかったが、そうした中で、実の親以上に頼りになるのがカ
 ネオヤだったというわけである。

第三節 村落の形と組織

(一) 村の範囲と地域区分

村内区分と行政区 明治の町村制で、富沢はニツ屋、二本松（今
 の佐野）、水窪、伊豆島田、堰原とともに小泉村に入っていた。北に

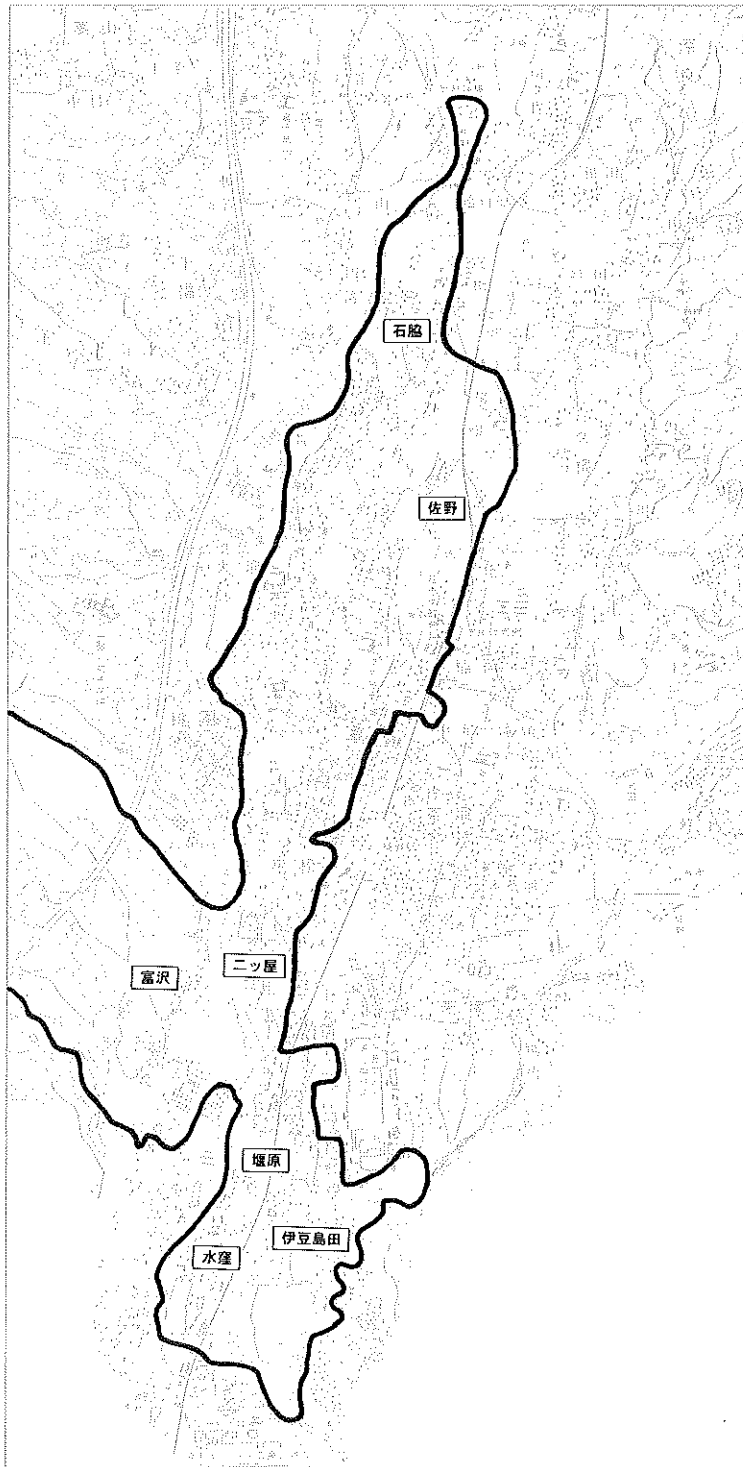
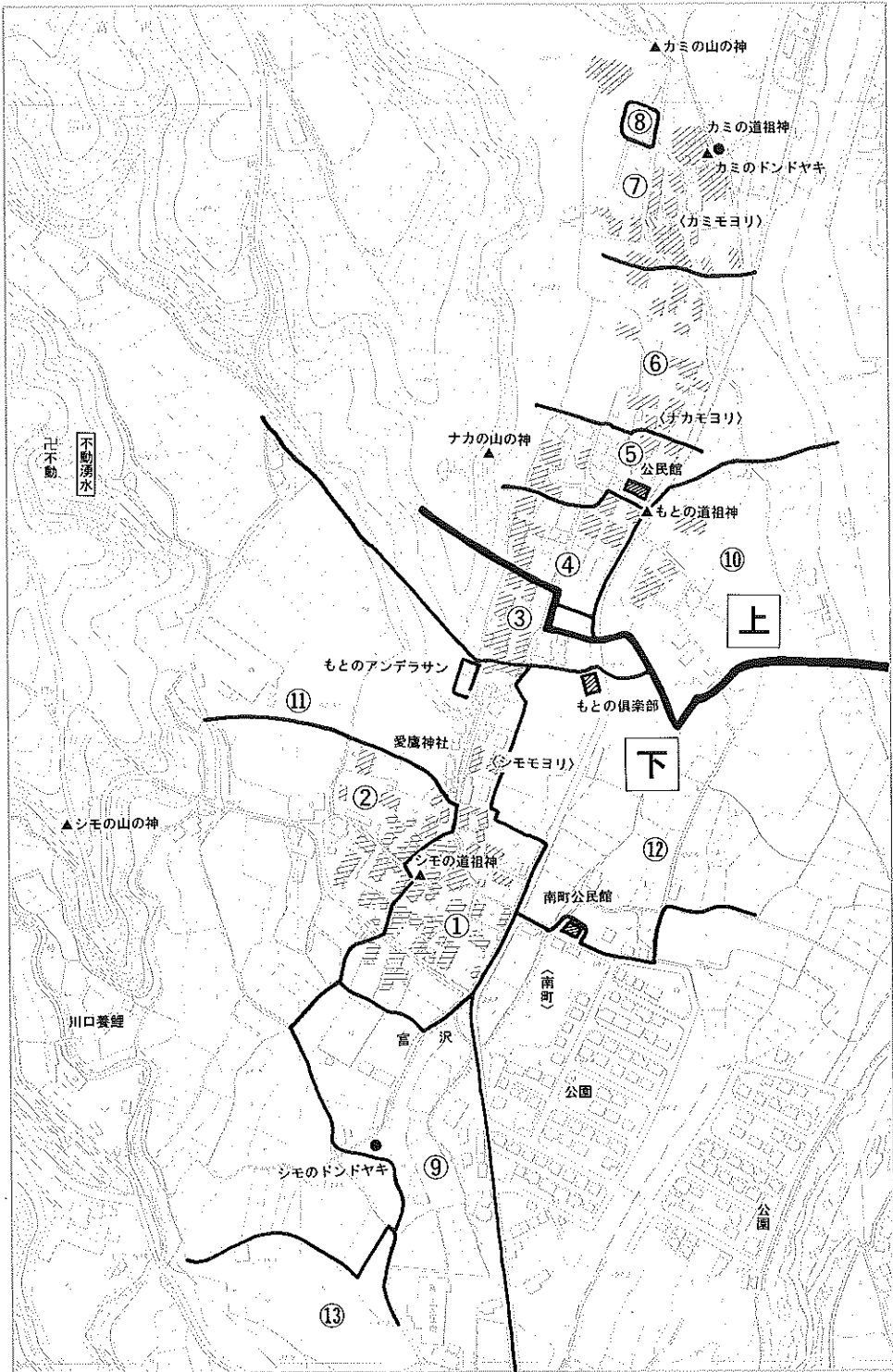


図 II - 10 旧小泉村



図Ⅱ-11 村内区分 モヨリと班・旧戸位置 (数字は班・//印は旧戸を示す)

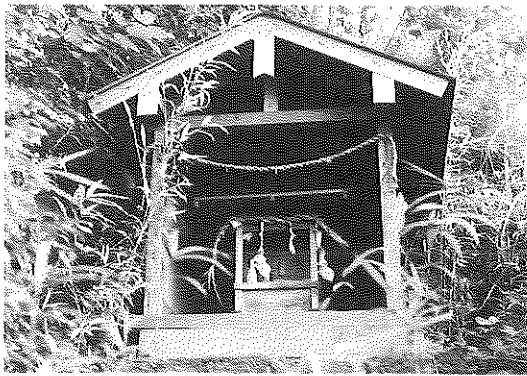
接する桃園は行政的には富岡村だったので別々だったが、深良用水の穴堰を共有していることや、定輪寺を檀那寺とするなど関係が深く、つきあいは一緒だった。桃園は本来定輪寺の土地を借りて住みついた七軒（もとは六軒だったという）から成る小さな集落で、戦前は村内に分家を出さないようにして七軒の戸数を守っていた。七軒は、冠婚葬祭にあたっては富沢とつきあっていたという。今でも七軒の旧戸については葬式があると富沢にも連絡が入る。戸数が増えたので手伝いはせず香典を届ける程度であるが、家同志のつきあいのある家では、今も初節供に呼んだりしている。

一方、富沢の内部は現在、一四班から成っている。昭和三〇年ごろまでは七組だったが家が増えたために一四班となった。さらにかつては南町として別な行政区に入っていた地域を一五班から一七班としたが、ここは広報のみのつきあいで基本的にはムラの行事にはかかわっていない。富沢の鎮守である愛鷹神社の祭礼についても、一二班までは当番をつとめるが一三、一四班（一四班はアパート）はかかわらない。また一五班から一七班は南町としての御輿は持っているが、愛鷹神社の祭礼についてはどのような形で参加するか、現在検討中であるという。

もとの七組にあたるのが、今の一班から七班で、一、二、三班がシモモヨリ（下最寄）、四、五、六班と新たに増えた一〇班がナカモヨリ（中寄）、七、八班がカミモヨリ（上最寄）と呼ばれ、ムラのつきあいはこの単位でおこなってきた。九班は葬式組のために形成された班で、それ以外のことはいろいろに分かれている。また一四班はアパートの住民だが、上モヨリの中にあるので、ムラのことにはかかわってもらっているという。

北側からカミ、ナカ、シモのモヨリができていたが、もとはカミ、ナカは一緒に、ムラウチは上と下と二つに区分されていた。現在も愛鷹神社の祭礼や子安さん、不動さんのお祭りなどは上と下とが交代で当番をつとめている。

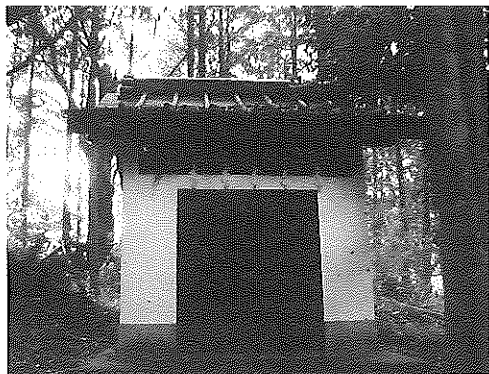
モヨリと旧戸 富沢はもともと七戸だったといい、その後二〇数戸となり、明治三五年生まれのムコトリの女性が知る時代には四七戸になっていたという。この四七戸はお不動様を祀る家の数で、旧戸（キユウコ）とよばれる。旧戸に対することは新戸（シンコ）といい、共有財産の所有権の有無によって区分される。旧戸と新戸は昭和三〇年ごろの共有地分割を境に分けられたもので、四七戸の内訳は上モヨリ一戸、中モヨリ一三戸、下モヨリ二三戸となっている。



上モヨリの山の神

上モヨリはホラ、クボといった家名の家があり、集落は瀬戸山開墾地の南側の山麓に形成されている。渡辺姓の家が多く、最も北側にある渡辺武彦家はイエナ（屋号）をカミといって、かつては富沢の三分の二くらい土地を所有する地主であった。

中モヨリはナカヤとも呼ばれ、中屋坂の麓に散在する。インキョが多く、確認



下モヨリの山の神



アンデラの跡

できただけでも七軒がインキョと伝えられる。現在は富沢の公民館が作られているが、この場所には前は子安さんのお堂があった。また、中屋坂の道筋に中モヨリの山の神があり、その先に富沢四七人の共有地がある。共有地は今がグラウンドになっていてムラの行事などに貸している。

下モヨリには水田があり、鎮守の愛鷹神社がナカミチ沿いにある。このナカミチから観音坂の方へ分かれるところに、今は廃寺になったアンデラサン（庵寺さん）と呼ばれる太合堂があった。このアンデラサンは火災で消失してからは広場となっている。また、アンデラサンの入口には酒も売る日用雑貨の店があり、ムラの中心地であった。ここから東へ向かって明治以降にでき

たという今のバス通りとぶつかった角には、現在の公民館ができる前にムラの人たちが集まる集会所があった。集会所は倶楽部とも呼ばれ、青年たちが寝泊まりしていた。富沢全体、旧戸四七戸で祀る不動様も下モヨリから上土狩へと結ぶ観音坂をややはずれたところにある。

(二) ムラの施設と道・境

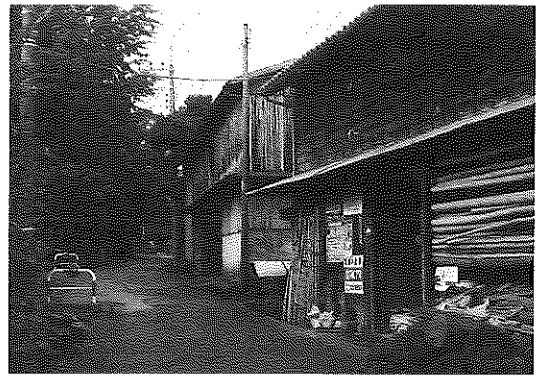
ムラの境 富沢の集落は川（黄瀬川）と山（愛鷹山）とに東西をはさまれて、山麓にへばりつくように南北に細長く形成されている。さらに南側も黄瀬川と梅木沢川に遮られるため、集落境としては北側のはずれに道祖神や山の神が祀られているだけである。もつとも、山の境は長泉町の工業団地の手前に、かつては境の松があったという。

目じるしとしてのムラの境はなくても、心持ちの中にムラのウチとソトの境には特別な意識が生じるものである。安全なムラのウチからソトに出るところには危険が待っていると考えられたものだった。危険を象徴する動物の一つとしてこの地域でしばしば登場するのは狐である。二本松で油揚げや油を買って帰ろうとすると一色（長泉町）の天神山にいるというキツネにとられてしまう。伊豆島田の堰原の踏切のところにいるキツネは、男が通ると女に、女が通ると男に化けて巾着をねらう。ムラとムラの間境は何が得体の知れない危険があると思われるのである。

ムラの道 現在バスが通る広い道は明治以降につくられたもので、それまで富沢のムラの道といえば南北を貫くナカミチであった。ナカミチは富沢を背骨のように支え、上、中モヨリはこの道の両側



観音坂上の馬頭観音



ナカミチ（愛鷹神社前）

家が並んでいる。下モヨリはやや複雑で、愛鷹神社よりシモではむしろ家々を結ぶように集落の中に道が通っている。道を家との関係を見るときと下とでは集落形成の時期や方法が異なることが推測される。

また各モヨリからはそれぞれに山へ行く道が通っているが、四七人共有の不動様へ行くのは下モヨリの観音坂を通っていく。観音坂は用水に沿った道で、ヨコミゾセギから引いた水がその脇を流っており、その先は官林に続く。さらに下モヨリにはナナマカリ（七曲）とよばれる山の神へ向かう道もある。これは昭和一五、六年ごろに整理され、その後は東名高速道路の輸送道路としても利用された。

一方、ムラの南側、下モヨリのはずれには甲州街道

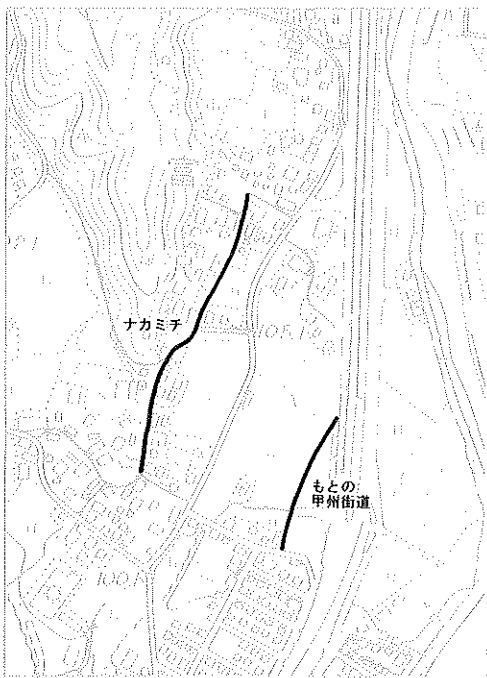


図 II - 12 ナカミチと旧甲州街道



旧甲州街道

が通っていた。馬力が通ったというこの甲州街道の面影は、現在のバス通りの一部と裾野バイパスの西側の道に残っている。南町に残る甲州街道の道脇には石塔が立ち、また富沢の一二班の地所を通る甲州街道とカンドウ脇には延宝八年（一六八〇）建立の庚申塔が建っている。庚申塚はもとは極楽寺の跡だと伝えられる。

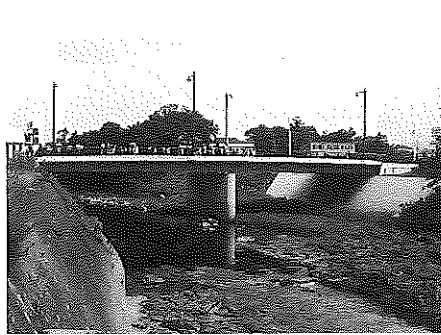
桃園橋（もとは般若橋と

いった)から愛鷹山麓を通り、富士郡まで続く道を根方街道といい江原素六がつくったという。このあたりに橋はこの桃園橋しかなく、富沢の人は黄瀬川を渡るには桃園橋までまわっていた。子どもたちは雨の日以外は川の浅いところを歩いて渡り小学校へ通ったという。浅瀬はモヨリごとであり、上モヨリではウワガワラ、中モヨリはナカヤカイドウ、下モヨリはサクラバタと呼ばれていた。

対岸に渡るのに桃園か水窪にまわらなければならなかった富沢に初めて橋がかかったのはつい最近、一九九二年のことである。



富二平橋の渡り初め



富二平橋

ムラの集会所 中モヨリに現在の公民館がつくられる前、ムラの集会には下モヨリの倶楽部と呼ばれる建物が使われた。倶楽部は夜学場ともいわれ、大正期にできたものだった。昭和八、九年生まれくらいの人までは、この倶楽部に泊まり夜学をひらいていた記憶をもっている。

現在の公民館のところには、かつて子安堂があり、毎月一〇日に

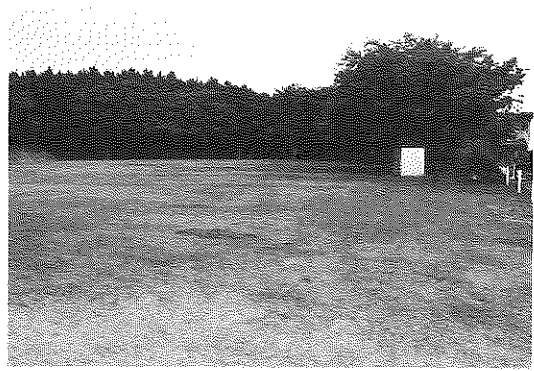


倶楽部の跡 (木のあるところ)

観音講の念仏も公民館でおこなうようになった。このアンデラサンは定輪寺の末寺で、廃寺になっていたため農地解放後は富沢がゆずりうけていた。山の上にあつて年寄りには上がり下がりが大変というところで公民館ができたところで移動したのだが、その七、八年後、盆踊りが終わって、ムラの人たちが公民館でナオライをしていた時に火事になり、焼失してしまった。

ムラの広場 ムラには人の集まる場所として、お堂のほかに広場がある。焼失してしまったアンデラサンの境内は廃寺になり、ムラがゆずりうけたあとはムラの広場として盆踊りなどがおこなわれた。またそれ以前にはカミの渡辺博文家の土地を借りて広場としていたという。このほか、不動四七人共有地が中屋坂の途中に三反五畝ほどあるが、これは現在グラウンドとしてムラの人たちが利用して

子安地藏の念仏が行われていた。倶楽部の建物が古くなったため新築して公民館とすることになったが、同じ場所に建て直すことはできなかつたため、現在地の子安堂を改築することになった。新しい公民館は昭和五〇年に完成している。一方、公民館ができて、それまでアンデラサンとよばれていたお堂に祀っていた観音様も公民館へ移し、一七日の



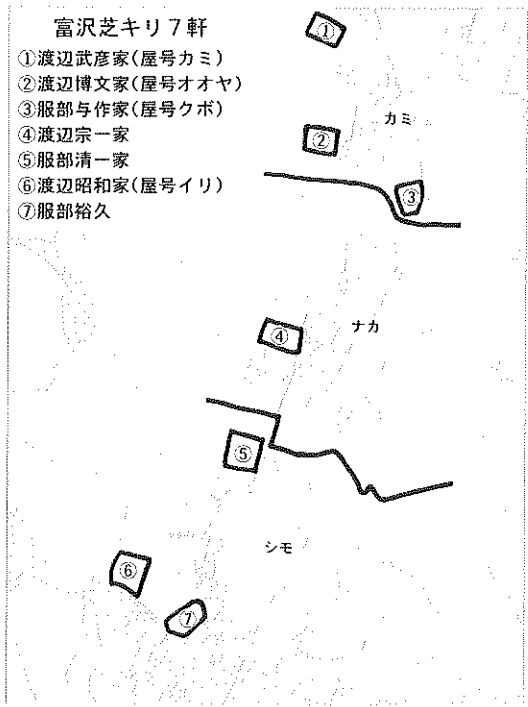
観音坂上のグランド

また各モヨリでは、かつては別々にドンドヤキを行っていた。これもカミは道祖神の前の広場で、シモは集落からはずれた畑の中でおこなっていた。

(三) ムラの構成員

旧戸と新戸 前述のように、裾野地域のムラでは共有財産の権利を基準にした家の種別があり、富沢にも不動の土地をもつ四七戸の旧戸と、それ以外の新戸とが区別される。四七戸は不動講のメンバーであり、不動の土地ばかりでなく、今も共有の山を持ち檜を植えて財産としている。またモヨリごとの山の神を祀るのも旧戸の家々である。

富沢はそもそも七戸から始まったと伝えられる。「芝キリ」といわれる七軒は上モヨリの渡辺武彦家(屋号カミ)、服部与作家(屋号クボ)、渡辺博文家(屋号オオヤ)、中モヨリの渡辺宗一家、下モヨリの渡辺昭和家(屋号イリ)、服部清一家、服部裕久家と伝えられ



図II-13 富沢芝キリ7軒

る。これらの家から分かれて四七戸になったといわれ、共有地の分割の時点で一軒前として成立していた家を旧戸としたのである。

地主と小作 富沢の土地の三分二を所有していたというカミ(渡辺武彦家)は、屋号通り、富沢の最もカミ(北側)に位置している。地主と小作の関係は、オヤブ(親分)とコブ(子分)として表わされ、上モヨリでカミの家のコブでなかったのはオオヤという屋号の渡辺博文家と渡辺静夫家くらいなものだったという。

小作は年貢米を納め、自家の食料分をとったあと、米は自由米として売ることができたが、これはわずかな量にすぎなかった。毎年、収穫の頃になると大八車に乗せた米が次々とカミの家の蔵に運び込まれた。カミの家は坂の上の方にあるため、五俵は乗せられる大八車をひいてこの坂を登るのはつらかったという。もちろん重くてつ

らしいのだが、自分のところに残る米がわずかになってしまおうと思うとなお重さが身にしみたのであろう。

コブンの生活はオヤブンの援助なしには成り立たなかった時代である。元旦にはそれぞれモチニ升を持って年始の挨拶にいった。結婚する時はオヤブんにカネオヤをたのみ、以後は結婚式、出産、初節供とことあるごとに世話になった。

日常生活では、オヤブンの山にコブンが入って、下刈りをするかわりに下草を刈ってもよいとして山の世話をしてもらっていた。一〇年ほど前まではカミの家にも枝おろしをする人が来てくれていたが、四、五年前に台風の被害にあつてからは手を入れるのをやめてしまったという。今でこそ下草や薪は必要なくなったが、かつてはオヤブンの山からとってきた枝の半分をもらへることは助かったものだった。

小作の家では子どもは奉公に出された。かつてはカミの家にも七人ほどの奉公人がいて、一月二八日が奉公人の入れ替わりの日となっていた。作男二人は馬方と徒男に、オンナドンは家の中のことをする上がり番と、外の仕事をする下番があつた。またインキョにも二人、女性の奉公人がいたという。奉公の仕事はつらく「裸にバラをシヨウ（背負う）か、富沢のカミにいるか」ともいわれたりした。こうした奉公人は昭和二七、八年くらいまではいたという。男性の奉公人はこのムラの出身者でなくても青年団にはいった。また女性も奉公先の家から嫁に出してもらうケースも多かった。

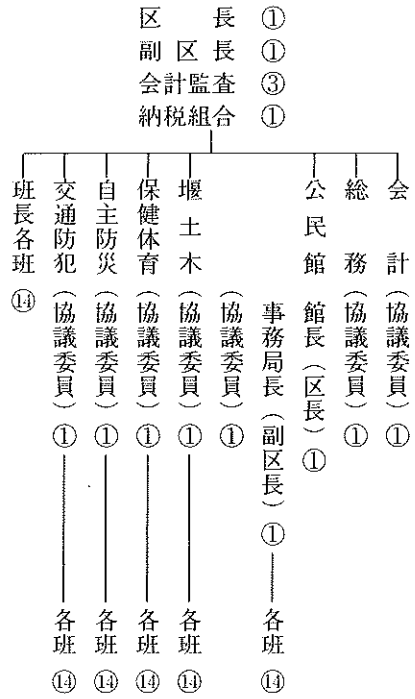
地主の生活 一方、地主の方はオヤブンとしてコブンたちの生活を援助するばかりでなく、ムラにたいしてもそれなりの負担をしなければならなかった。昭和四〇年代以降は平等となったが、三〇

年代までは区費も家の格でとっていたため、カミの家などは最も多く納めていた。またムラの中には同格の家がないため、家としてのつきあいはムラの外へ求めざるをえない。カミの家では、茶畑の柏木本家（サカイガワ）といった家とのつきあいが多く、サカイガワへは二代つづけてカミの家から嫁が行っている。

ムラうちの小作の家からは特別な目でみられていたため、一般的なつきあいはほとんどなかった。子どもたちにも、普通の家の子は中学など行くものではないとして、上の学校に行くのはオデーヤ（大尽）という空気があつた。中には、少年時代に地主の息子が年上の自分にあいさつもせずに通っていくのを見て将来見返してやろうと思つたという思い出を話す人もいた。地主と小作は子どものころから別な世界に育つていたといえよう。

ムラの役職 富沢では昭和五〇年ごろ、ちようど公民館を新築したころに役員の編成を現在のようにな形に変えた。それ以前は班長のほかには部農会、堰土木が役員としてあつた程度でムラの役職は限られていた。いいかえれば現在のように細分化されていなかった。住民の数が増え、ムラの中に変化が起きてきた昭和五〇年代から役職を明確にするだけでなく、それぞれの役ごとに独立した予算をたてるようになった。

左は現在の役員編成表である。兼務はあるが、延べ人数にする一班から一四班までの世帯数一五四戸（平成五年三月現在）のうち役員は一〇七人と、三分の二の家が何らかの役職についている計算となる。



(○は人数)

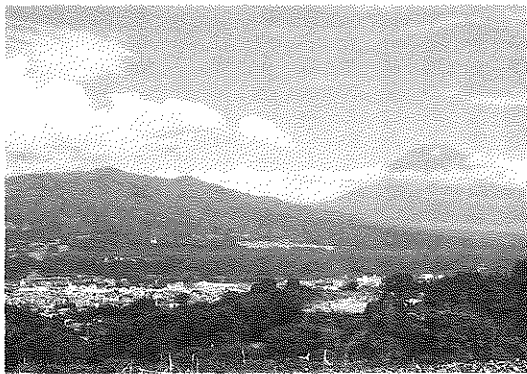
●団体役員

- 体友会 (会長①) 子供会 (会長① 副会長①) 老人会 (会長①) 郷友会 (会長① 副会長①) 部農会第1 (会長①) 部農会第2 (会長①)

ムラの寄合 平成五年度より、区の総会は三月上旬に行うことになった。以前は四月としていたが、これだと四月から始まる新年度の準備ができないため、市の行政との関係が深くなるにつれて、市の年度編成にムラの暦が影響された結果といえよう。

さらに以前は一月一日を総会として、役員の人選を暮にしていた。当時の会場は倶楽部であった。そのころのムラの一年は四月ではなく一月から始まっていた。二年ほど前からは元旦の朝、神社に集まっの顔あわせを元旦祭りと名付け、お神酒とイカのスルメを出す新年会を行っている。

ムラの寄合はもとと決まったものは少なく、むしろ必要に応じてその都度、関係する単位ごとにあつまるものだった。たとえば富



愛鷹山全景

第四節 共有と共同
(一) 山をめぐる共有と共同

沢では用水の関係で、昭和四〇年ごろまではヒドリ(日取り)田植を行っていたが、一班では五月二日から五日にかけて、苗代の直後に組長のうちに集まって田植の日どりを相談をした。雨乞いの時にも、区长がフレを出すや四七戸の旧戸が不動に集まり、麦藁で竜をつくったり、鉦をたたいたり、また酒を飲んで水のかけっこをしりして雨乞いのための儀式をおこなった。

共有地 富沢四七戸の愛鷹山共有地は、東名カントリークラブに貸してある一町二反六畝を残して分割してしまった。かつて山が有用だったころには、草刈や柴刈りしたりサシカエのカヤを刈ったりと共同利用したものだ。そもそもの愛鷹山は、明治一四年の改正のころに富沢三、水窪三、上土狩四で分割した。この時は江原素六が官地を払い下げてきて、「愛鷹山籠組合役場」をつくりそこから個人に貸し

ていた。農地解放後、この共有地は一部の財産区を残して分割して
しまった。

カヤバ 富沢のカヤバがキタクノボにあり、カヤムジン（茅無
尽）もあつたというが、かなり以前になくなってしまった。カヤバ
がなくなつてからは大野原の方から一把いくらで買つていた。大正
一〇年生まれの前喜市さんによれば、三把をまるつたのを一束に
して、これを六束で一駄という場合と、四把をまるつて一束にした
のを四束で一駄にする場合とがあつて、刈る人によつてやり方が違
つていたが喜市さんは前者の方を買つていたという。

(二) 水をめぐる共有と共同

飲み水と生活用水 黄瀬川の水は昔はとともきれいで、針を
落としても見えるくらいだった。ここから取り入れた用水の水を、
富沢の人たちは飲み水にしてきた。さらに米ときから顔洗い、洗濯、
風呂、食器・野菜洗いに至るまで、すべてこの用水がツカイミズだ
つた。飲み水にもしていた用水の水は、「三寸下がれば水神さんがい
る」「川は神さんだ」といって、誰もが汚さないように心掛けたもの
で、汚れ水は用水には流さないようにしていた。もつとも汚れ水と
いっても今のように洗剤を使つたりするわけではないので、割つた
竹をトイにして裏山に埋めたカメに流れ込むようにしておき、竹に
まいて肥料としたりした。

しかし、次第にこの用水も汚れてきて飲み水には使えなくなつて
きたため、昭和二一年に井戸を掘つた。井戸は四、五軒に一軒掘つ
て、井戸のない家はある家へもらい水をして飲み水とした。また六、
七班は渡辺真一宅前の共同井戸を使用した。この井戸は深さ二丈で、



用水路



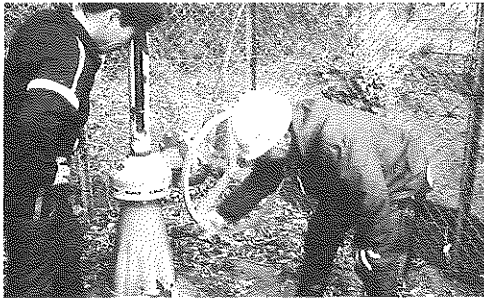
カワバタ

底が石盤のため水はいつもきれいだつたが枯れてしまうこともあつ
た。井戸の水は地下水ではなく、山からしみ出た水でかつぎ棒にバ
ケツを二つ下げてくんできたものだった。

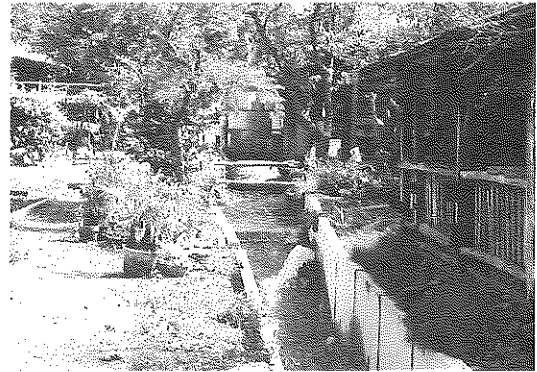
上モヨリは、黄瀬川の水を直接くんできてカメに入れて飲み水と
したり、不動の水をくんできたりした。

市の水道がくるようになって井戸は風呂などに使つていたが、
水が涸れてしまつてからはフタをしてしまつたという。

堰 「富沢にムコにいくなら堰をみてからいけ」といわれたほ
ど、富沢のセギの人足出しは大変だった。深良用水と同じ時にでき
たというカミセギは、五竜館の下から七〇〇メートルくらいの隧道
で取水しており、桃園も一町のかかりがあつたのでセギ費を出して
いた。凶面には堰の石一個に至るまで書かれているが、六月一〇日
から一五日の田植のころになると激しい水争いがおこつた。水番は
昼夜二人ずつ出たが、下郷の村々はクワカマをもつて争つたといふ。



穴堰の水門点検



カミの屋敷内と流れる用水



河川清除

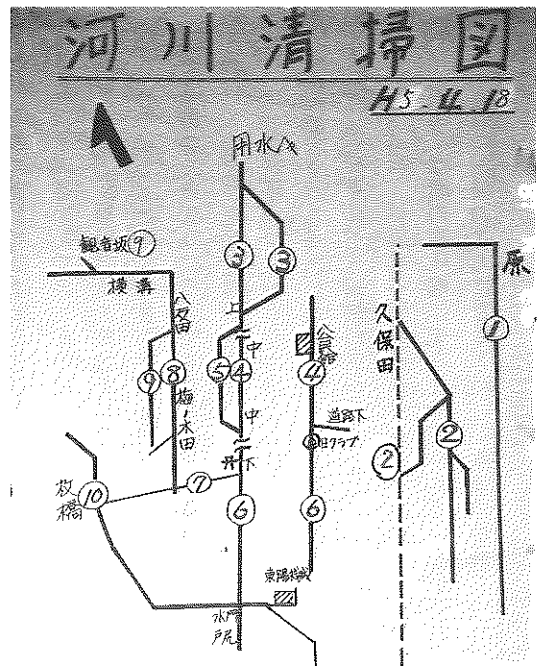
このような水番は昭和三三、三年ごろまではやっていた。富沢は箱根用水の下郷にあたり、八月一日の箱根神社の祭典の時には、一戸につき三〇〇円で一六一戸分の初穂料を協議費として出す。箱根神社からこれらの家に暮になるとお札が届けられる。水配人は昔は格式でつとめたもので、もとはかなりのオダイヤ（大尽）がやっていたが、今は市や

イイ（結い） イイ田植えは、だいたい班を単位にやっていたが、手が足りないときには他の班にも頼んで手伝ってもらう。早く終えるのが競争で、朝六時から田植えを始めて、午後一時か二時ころまでには終えた。一軒が終わる度に酒盛りをして、終わったあとは休まずに山に小麦を刈りに行った。

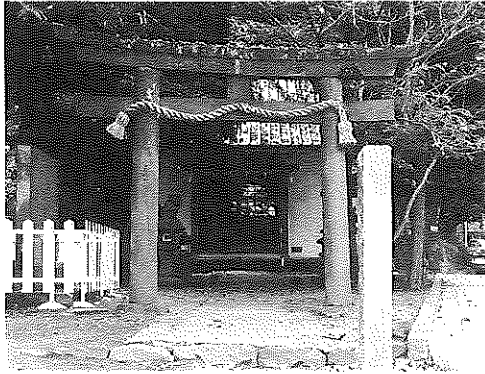
水車 ツキヤという。下モヨリでは一、二班の人を中心に、一

県が関係するものでそうでもなくなっている。富沢では、深良用水の水配の関係で田植の日取りがあらかじめ決まっていたため、ヒドリ田植といって雨でも風でも必ず決めた日にやってしまった。

(三) 農作業をめぐる共有と共同



河川清掃の作業分担表



愛鷹神社

八軒が共同利用の水車をもっていた。土地は渡辺俊幸家のもので、地代を払って借りて小屋をつくった。ここで搗いた米や粉はすべて自家用のもので、売るといふことはなかった。一八軒が順番に使ったので、一八日ごとに番がまわってきた。また大水などで水車に砂がたまったりした時は、水車の衆で堀凌をしたが、修理は三島の水車大工を頼んだ。

中モヨリ、上モヨリでは、井出商店前の水車をやはり順番をきめて共同で使っていた。昭和二八年に嫁に来た人が、その時にはまだ使っていたのを記憶しているという。こちらも服部清一家の土地を借りて共同のツキヤをつくったものだった。

(四) 神社・墓地をめぐる共有と共同

ムラの氏神 富沢の鎮守は愛鷹神社で、一二班の住民までは氏子として当番をつとめるが
 一三班は入っていない。平成五年の氏子総代は、カミが渡辺武彦、渡辺哲夫、シモが服部清一、服部芳太郎の各氏でいずれも旧戸である。祭日は一〇月の末の日、が二回ならば前の未の日、三回あればまん中の未の日となるため「ひつじまつり」と呼ばれる。前なら一〇日前後、後なら一七、八日に

なるが、最近では祝日の一〇月一〇日に行くことが多い。神主は以前は佐野から来ていたが、今は服部芳太郎さんがつとめている。

祭礼当番は、区長を中心にカミ(上モヨリと中モヨリ)、シモ(下モヨリ)が毎年交替でつとめる。平成五年度はシモが当番だったので、まず九月のおわりごろにシモの家が全員集まり、喪中の家を除いてクジびきで役割を決めた。昭和四四、五年ごろまではオコモリもやっていたという。

左は渡辺富雄氏の著者「ふるさとに生きる」(平成四年七月発行)に記された昭和五五年度の祭典記録より抜粋した役割一覧である。
 昭和五五年一〇月三日(金) 集会
 祭典当番上、中、役割分担割当

・祭宿 服部三雄

・祭典費

農家 八〇〇円 米五合 野菜

餅米代金 四〇〇円

非農家 一〇〇〇円

借家 七〇〇円

・祭典役割分担

しめ縄 服部素則 浅倉 昇 浅倉義貞 角田秀雄

御神灯 渡辺博文 柏木 正 中谷昭司 渡辺時次郎

米、金 田口千代作 志村弘光

野菜(仕度まで) 渡辺幸隆 渡辺紀久夫 潮田咲二 横山善三郎

高木 茂 服部敏文

買物 西尾信治 渡辺敏行 萩野 滋

前日掃除 渡辺道則 藤原定晴 藤原 茂 藤井信次

安達松一 山本富士男

ふかしおかず番、笹原 茂 宮口 勲 渡辺新一

柏木義昭 辻 幸男 渡辺春夫

当日番、八時、神社集合

芹沢正紀 渡辺 実 渡辺滝夫 柏木 進

菊池 実 浅倉良作 渡辺治夫

あと片付番、渡辺宗一 渡辺静雄 渡辺富雄 角田 晋 三浦誠一

その他 お供え(もの)

本社一升

側社 二ヶ

道祖神 一ヶ

みこし 一ヶ

旗竿 六時(現地)

不動と雨乞い 富沢全体(旧戸四七戸)で祀る不動様は三月二八日を祭日として、カミ・シモ二年ずつ交替で当番をつとめる。さらにそれぞれが二組ずつに分かれていますので当番は四年に一回まわるようになっていいます。

テルニューバイ(照入梅、日照り)の時は不動堂で雨乞いをした。昭和一〇年から二〇年代には堂のまわりに露店がでたこともあり、富沢全体でにぎやかに雨乞いの祈願をした。雨乞いは不動の水をくんでご神体のヒノカミサンにかけ、あとは飲み食いの祭りとなった。また病気が流行った時には、病人のでた家の衆がゴシユクガンといってお不動様をお願いをし、年寄りに公民館で不動講の念仏をしてもらったという。



中モヨリの山の神



不動尊の鳥居

山の神 山の神はモヨ

リごとに旧戸の家が祀っている。もともと山を共有した人たちの神様であるから新戸は全くかわらない。

祭日は一月一六日と九月一六日で、以前はモヨリ全員が当日昼頃からそろって掃除をしたが、今は当番だけになった。当番はオヒヨウゴを掛け、カワラケに供物を盛り、弓矢を作る。振る舞いのときはヒヨウゴの前に、社のような形に供物を供える。祭りのあとはオハライコウといって食事をし、翌日はヤヒロイというお礼参りする。

中モヨリの山の神は、もとは個人のものでしたが、それを一戸全戸で祀るようになったため、持ち主はハリアイが悪いといつて、モヨリに寄付してしまった。一五、六年前のことで、も

との持ち主は山の神の祭りもおりてしまった。

墓地とヤキバ 墓は寺の右上方のカクガンボラにある。ここは富沢と桃園の人が主として使っているが、古い家にはヤシキバカがある。ヤキバは観音坂の方とツクリバの道の西方にあった。一時火葬にしようとしたが素人ではうまく焼けないということで土葬に戻った。戦前までは土葬だったが、伝染病で亡くなった人などヤキバで火葬するのは普通の死に方をしなかった人だけだった。

火葬になった始めのころは二本松のヤキバを借りて自分たちで焼いた。その後は三島市や長泉町のヤキバを借りた。葬具屋が共同出資をして購入したバスで三島まで行った。

(五) ムラの諸集団

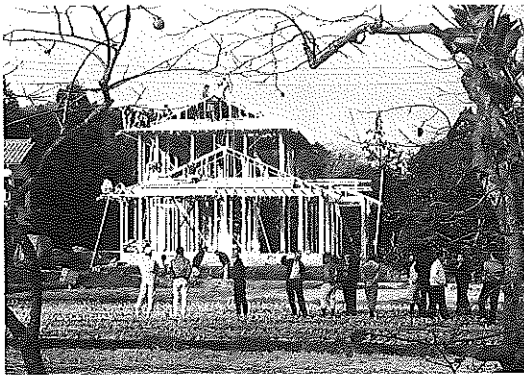
葬式組 以前の組、現在の班がすなわち葬式組となって手伝いあう。九班などは葬式組を主たる目的として形成されたくらい、ムラの生活の中での葬式の互助は重要な位置を示めている。人が亡くなるとまず班長に報告し、イイツタエをしてもらう。オツウヤに班の古参が中心になって役割を分担するが、昔とちがって今は葬具屋が道具類を用意してくれたり、火葬になってコシアゲなどは名ばかりになった。草履やりユウは以前は近所の人が手伝って作ってくれたが、五、六年前からは葬具屋が用意してくれるようになった。また二人一組で市役所や寺などには行くが、ヒト（亡くなったこと）をシンセキに告げに行く）には電話がきてからはいかなくなつたという。近所の人の大切な役だったコシアゲ（アナホリ）は今も四人がこれにあたるが、火葬になって実際には用がなくなつた。

旧戸は今も桃園の古い家とは葬式の行き来をつづけている。桃園

と富沢はもとはつきあいはいっしよで、初節供によびあつたりしていた。

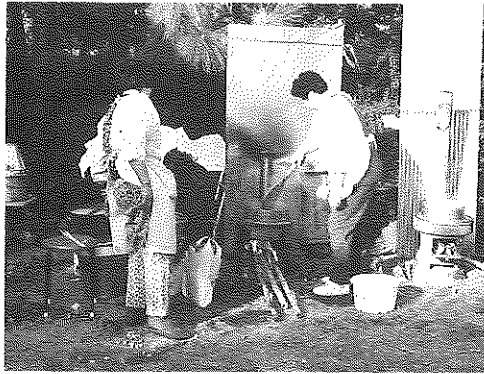
屋根替え・新築 家の屋根替えや新築の際は班（組）と身内が何日も出て手伝つたものだった。屋根替えの手伝いはまず、印野（御殿場）の衆が大野原から刈つてきたカヤを買いに行くことから始まる。カヤを運んで帰つてくると施主の家にはごはんと晩酌のしたくがあつた。新築の時も山から馬力を使って木をおろすのは近所（班）の人たちやムラうちのシンセキだった。

屋根替えでは棟梁の段取りによつて人夫の数を調整する。施主はいつも手伝ってくれる人がこられないとか人数が足りないといった時に誰にたのむかの算段をする。カヤがあがってしまえば職人の仕事になるが、それまでは人手が必要だった。だいたい一週間くらい



建前 (WH家)

かかったもので、出来上がつたあとの引出物には地下タビが喜ばれたという。
新築も同様で、近所の人たちがあつまつて家を壊す。手伝いの人にはごはんやお茶を出したもので、献立は野菜の煮物やみそ汁、お茶の時はおはぎやおまんじゅうを出した。女衆は、ヤコボシの時や建前の時に、こうした食事を作る手伝いに来た。ヤコボシの宴会はモ



手伝い

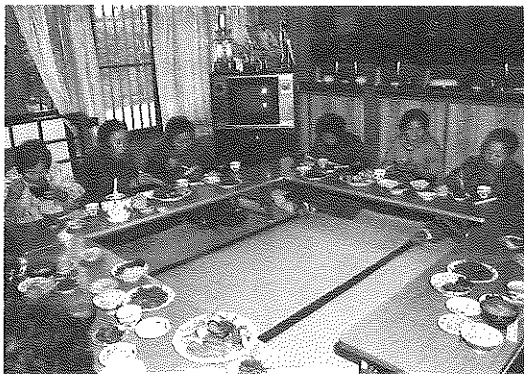
タテマエの前の晩は近所（班）の人たちがあつまって、翌日大工や左官などに祝儀として渡したり四方餅としてまくための餅を二俵くらい搗く。当日は朝から、近所の人にシンセキも加わってタテマエを手伝う。女衆は食事をつくり、大工や男衆の飲み食いが終わった



モチマキ

ヨリ中があつまったといい、人足賃を食事で払ったようなものだった。大工さんには朝昼晩と三食にお茶をだしたが、これもそうすれば日当が少しは安くなるからだった。

ジツキ（地搗）にも人手がいるので近所の男衆があつまつた。一日仕事で、砂を入れたりやぐらのひもを引いてジツキをしたりする。この時は昼と三時のお茶のほか、ヨウハンに酒も出した。



子安講（富沢公民館）

あと同じところで食事をしてかえる。

講集団 富沢にはかつてはさまざまな講があったが、やめてしまったりカミだけのこっているものがある。集団の単位は富沢全体のもの、カミとシモ別々なものがある。中には山の神講のようにカミ、ナカ、シモに分かれるものもあり、また講日も年一回のもの、月並のものがあった。娯楽の少なかった昔は月並（毎月）の講のオゴチソウが楽しみものだった。

秋葉講は男だけでカミ、シモにわかれて宿をまわして一二月一六日、大山講は二月三日に行く。観音講は四月一七日にカミ、ナカ、シモの三つのモヨリが年に一回番々にやっていた。弘法さんは二月二日に富沢全体で公民館で念仏をする。お大師さんや淡島さんは女の人たちがカミ、シモ分かれて宿でひらく。子安講も富沢全体で

三月一〇日に念仏をする。不動講は今も旧戸四七戸が三月二八日にひらいている。大師講は昔は女の人なら若い人でも集まって月並でやっていたが、今は年寄がやっている。

ドンドヤキ 昔はモヨリごとに三か所でやっていたが、現在は一か所にあつまってしまった。

七日にお飾りを道祖神のところを集め、山からとつ



下モヨリのサイノカミ

てきた竹をつかって小屋がけをした。お飾りはぐるりに化粧用にいれたり、中に燃えやすいように入れたりして積み、一四日の夕方に燃した。子どもたちの楽しい行事だったが、なぜか必ず一色の子どもたちとケンカした。「一色の小僧、ケンカに來い」とはやしたものであったという。また上土狩の子どもたちが富沢を通って山へ行く時も、富沢の子どもたちも親しさゆえのケンカであった。

青年団　すでに述べたように大正時代にカミとシモのちようどまん中あたりに倶楽部と呼ばれる建物があつて、青年団はここで勉強したり寝泊まりした。長男だけでなく次三男に加えて奉公人もそのメンバーとなっていた。明日は農休みをというフレが区長から出ると倶楽部に泊まっていた青年たちは皆で早起きして草刈りにいったりした。それぞれ持ちかえて馬の冬の飼料にしたものだった。

毎年七月一七日の観音堂のまつりには草刈り相撲があり力士として参加したり、ムラうちの子供の抱瘡祝いには、青年団が太鼓を叩き、笛を吹き、擦り鉦をすって、お祝いの家に踊りこんだりした。こうしたお振舞では青年たちはヨッピ（夜通し）で飲んだものだった。

た。今も昔も暇があれば遊びたいのは変わらない。若い衆は毎晩のように何かしらで遊んだもので、昭和二二、三年ごろは三島の楽寿園での映画会や沼津での海水浴などに出かけていったものだった。

また伊勢参りが代参だったころ、青年が五、六人でお参りにいった。下向して帰ってくるどフナイワイといってムラ中が馬で佐野駅まで迎えにいき、鈴をいっばいつけてシャンシャン鳴らしながらムラへ帰ってきたものだった。大正一三年生まれの服部三雄さんも、やはり佐野駅に富沢の人達全員が迎えてくれた経験をもっているが、この時は富沢以外の同級生も一緒だったので、ムラ中の出迎えが恥しかったという。

年寄りと念仏　富沢では老人会の会長というのがなく裾野市の組織には加盟していないが、老人会としてはアンデラさん、お不動様、庚申塚、火の見やぐら、お宮さんの掃除を二か月に一回くらい「道路の掃除」としてやっている。アンデラさんのお堂の跡にゲーボール場を作ったが、やる人がいなくなったのでここ一、二年はやっていない。

公民館で月二回、一〇日の子安さん、一七日の馬頭観音さんの念仏をする。念仏講は今年一五人ほど入っている。また定輪寺へ月二回御詠歌を習いにいっている人もいる。昔は土用の都合のいい日にお堂でヒネンブツをした。オテントウサマが出るときから入るときまで替わり番に念仏を唱え、鉦をたたいた。向きをオテントウサマの方向へかえながら、最後は西の方を向いた。また「南無阿弥陀仏」を唱えながら、あるいは般若心経を詠みながらオジュズといった。夏は百粒の数珠をまわす百万遍も昔はやった。夏のウンキ、ムラ中が丈夫にすごせるようにと願って回したものだ。

(六) 世間との交流

信仰の広がり与交流

ムラの中に入ったたり、ムラから出ていくキツカケにはいろいろあるが、信仰も大きな理由のひとつである。富沢では、春から夏にかけての年一回、葛山からウラカイドウ（甲州街道）を通って入ってくるホウエンサン（法印さん）の姿を見かけることがあった。千本浜に浜降りするために通ったもので、法螺の貝を吹きながら三人ほどが馬方とともに富沢にやってくると、富沢の人々はお金やお茶をもって子供のお祓いをしてもらった。

神や仏は外から来たもの、ムラの外にあるものの方が熱心に信仰されることが多い。渡辺喜市宅にある八幡様には戦争中、ムラの外からの人が戦勝祈願のためにたくさん訪れていたという。その頃は祠がまっ白になるほどのお札が貼ってあった。富沢の不動さんも、ムラで祀ってはいいるが、願かけには近くの人よりも遠くから来た人の姿ばかりが目につくという。おいてある寄付壇には、千福、一色、小林、岩波、神山から平松、水窪、伊豆島田、三島、中土狩といった人々の名前があった。

買い出しと行商

沼津の我入道などから魚屋が行商によく来ていた。昔は雑巾バケツ一杯のイカが五銭で買ったものだった。戦中から戦後にかけては、いわゆる行商ではなく食料と交換するために熱海、伊東、来の宮などから来た人も多かった。海からは魚を持ってきて、富沢でサツマイモやジャガイモなどと交換した。古着と作物を交換していく人もあった。戦争中にナガヤを新築したというある家では、東京から来た大工さんはくぎを入れて来た弁当箱に麦こ

はんを入れてもたせてやると喜んだものだったという。この人は食べるものを買っていったりしていた。

炭焼き専門の人は根方（富士市）から一年中、富沢に来ていた。官地の山林を買って、炭を焼いていた人は二人くらいいたという。富沢からは印野へカヤを買いに行った。バリキでとりに行ったが、よほどよい馬でないと一回に五段（三〇把）積むのがやつとで、印野の衆が大野原から刈ってきたカヤを一軒一軒回って集めたものだった。

一方、富沢から出したものの代表がサツマイモであった。富沢のサツマは「マルトミカンシヨ」(註)と呼ばれ、裾野駅から鉄道で大阪方面へ出荷した。特に正月は京都、大阪ではイモガユをつくるので大量に出荷したという。

遊び 三島の明神さんへは歩いて祭りにいった。千本浜に海水浴に行く時は汽車でいった。汽車賃が三、四〇銭かかり昼食に二銭使った。

このあたりでは競馬が盛んだった。いずれも観音前で行ったもので、根方の柳沢（現沼津市）が二月一九日、手城の観音が四月三日、三島市徳倉で四月一〇日、根方の高山の観音が四月一四日と四か所あった。今は御殿場の板妻で四月三日に行われる。富沢は四月三日のジンム（神武）さんの節句に、水窪、上土狩、南一色、納米里と仲間になって手城の観音さん（一色）で行なう競馬に参加した。今は競馬はやらないが、同じ仲間であ鷹橋のところで鱒釣り大会を行

（斎藤弘美）

第三章 時間と民俗

第一節 生活の時間・生産の時間

(一) 生 業

かつて、富沢の主生業は農業だった。終戦の頃まで、総戸数四八戸の内四七戸が農家だったという。水田での稲作とその裏作の麦作、ヤマ（山地を開墾で開いた畑をヤマと称する）でのニンジン、サツマ、ゴボウなどの根菜類が主な生産物だった。さらに古い時代には、養蚕も行っていたと聞くが、養蚕が生業から消えたのはかなり早かったようだ。

しかし、水田の一戸当りの所有反別は各農家とも実に少なく、平均で約三反（〇・三ヘクタール）くらいのもだったという。したがって、少ない水田に変わる農業生産として、ヤマの畑作に頼らざるを得ない状況が長く続いた。畑作では、前記の根菜類のほか、近年では茶や芝、栗なども栽培するようになった。

こうした富沢の生業状況も、更に近年にいたって、また大きく様変わりを見せている。その要因として、いろいろな理由が述べられているが、第一には農家の兼業化が進んだことによると言われている。そして、それにともない、かつて熱心に開墾して作物を栽培してきたヤマの畑が、極端に衰退し、再び元の山林に戻ってしまったと

ころもあるという。ヤマの畑が作られなくなってしまったことには別の理由がある。

服部みよさん（大正二・一二・一四生）は言う。「サルツコウ（猿）が来るからダメ」と。つまり、近年、ヤマの畑にはサルやイノシシやシカなどが、実にたくさん降りてきて、畑の作物を食い荒らすのだという。栗などの果実は収穫前に取られてしまいうし、根菜類なども掘り起こされてしまうというのである。

農家の兼業化と動物による被害は一見何の関連も無いもののように思われるが、果たしてそう言い切れるであろうか。農業に係わる人手の減少、種々の山林開発など、さまざまな理由が競合して富沢の農業が衰退したように思えるのである。

現在、ヤマの畑は皆無になっただけではない。「天気の良い日は、



ヤマの畑の芝と茶

年寄りには、みんなヤマに出掛けてやるよ」という。今は、ヤマの仕事は老人の分担になった観がある。動物に荒らされない芝や茶の栽培が、細々と老人の手で続いているが、かつての面影は全く無い。

以上のような富沢の農業の現況では、生業としての農業の一年を民俗の視点から記述するにはかなり難しい点がある。したがって、

以下では、かつて行われていた水田稲作農業についての聞き取りをまとめておきたい。

(二) 稲作

水田の土質 富沢の水田の土質について、次のような証言が多い。渡辺滝夫さん(大正七・七・二四生)は、「ジ(地)が浅い」と、いう。その結果、「地に力がないので稲の育ちが悪いが、転ばない(収穫時に倒れにくい)稲ができる」ともいう。また、服部三雄さん(大正一三・一二・三一生)も、同じように「地が浅い」というが、所によつては「深い田もある」ともいう。そして、「石が多い」ので耕作しにくく、「昔は、そのような田は避けた」という。「昔の黄瀬川の川原石であろう」と、想像していた。それでも「富岡の火山灰よりは地が良い」(渡辺文江さん明治四三・六・二四生)のように、同じ裾野の他地区との比較で証言することが多い。

一般に、土地の土質と稲作の良否は深く関わりがあるので、良好な稲作地帯では必ず自分の土地をよくいうものであるが、富沢の場合はそうした声が聞かれない。やはり、水田地が少ないということと、ほかに土質の悪さも富沢の稲作状況に大きな影響を与えたものであろう。

水利 水田にとって水が重要な位置を占めることはいうまでもない。富沢の場合、水田用の水は、次の二系統がある。ジスイ(地水)すなわち愛鷹の水と、ヨースイ(用水すなわち深良用水)の水である。ジスイは、「西側の山の向こうの田とか、不動さん回りの田」と呼ばれる土地で利用されている。深良用水利用の田は集落東側に広がる耕地で深良用水「穴堰」から供される水をしようしている。

この用水利用の田は十八町歩である。

富岡の田は「地が浅い」と前記したが、ジスイ回りの田については例外で、ここには湿田がある。湿田をフカダ(深田)とかハデヤ一などと称する。「ヨコミゾ(不動さんの水)は深田だった」(渡辺喜市さん)という。またここは、「しみ出る(湧く)水で間に合った」(服部清一さん)という。

「ハデヤ一には馬も入らなかった」ので、田植え前の耕作には、腿のところまで土に潜って、マンノウグワ(万能鍬)を使って手で起こしていた。そうした土のため、裏作の麦は作れなかったという。また、ある時、「ハデヤ一」の田を起こしていたら、土の中から手シャベルのようなもの出てきたという。服部さんは、かつてこの田でハス(れんこん)を、栽培していたのではないかと、言っていた。ハダイでの稲作には種々の工夫が必要とされるが、ここでは、作る稲の品種は「早稲」だったという。わき出る冷たい水が常に入ってくることに対する対策である。

シロカキ 田植え前のシロカキには、田の土質に応じたシロカキ法があった。火山灰土の水持ちの良くない田では、合計二回のシロカキを行う必要があった。一回目アラジロと称し、二回目をホンジロと称していた。「シロカキは大事だ。水持ちを良くする」と、昔から言われていた。一方、ハデヤ一と呼ばれる湿田でのシロカキは馬を入れることができなかつたため、人の手で鍬やエブリ棒を使って行ったと聞く。

馬を田に入れてのシロカキでは、鼻取りとシロカキ手が交互に掛け声を掛け合いながらシロカキしたものだという。

渡辺喜一さんは掛け合い文句を全部ではないが記憶している。次

のようである。

一番

シロカキ「ソレ、ヨンヤサ、ヨンヤサ」

鼻取り 「タイギダ、タイギダ」

シロカキ「ソレ、カイダセ、カイダセ」

鼻取り 「オシキレ、オシキレ、」

シロカキ「カイコメ、カイコメ」

鼻取り 「タイラダ、タイラダ」

二番

シロカキ「コゾウノセツクダ」

鼻取り 「サワジノホラデモ アサヒガサスカヨ」

シロカキ「サストモ サストモ」

田での掛け合いを聞いていけば、シロカキの進行ぐあいがあったものだという。

種もみとナワシロ（苗代）の準備 種もみは四月の下旬に、ヒヤカス（浸す）ことから始まった。ナワシロにする田には特定の場所を使用せず、順に作った（服部三雄大正一・三・一二生）という。オカナワシロ（陸苗代）を一時作ったこともあるが、たいていミズナワシロ（水苗代）である。

ナワシロに蒔いた後、余った種もみは、ヤキゴメにした。ヤキゴメ（焼き米）はもみを炒って、小突いて、皮を取り除いて作る。これを食べたり、ナワシロの水口にまいたりして、カラス避けとした。

田植え かつての田植えは時期は今よりずっと遅く、六月の末頃から始まった。また、その頃は裏作の麦を作っていたので、田植え前には麦の刈り入れもあって、一年で最も忙しい時期だった。ソ

ートメさん（五月女）を御殿場の方から頼む家もあって、大賑わいの田植えだったという。

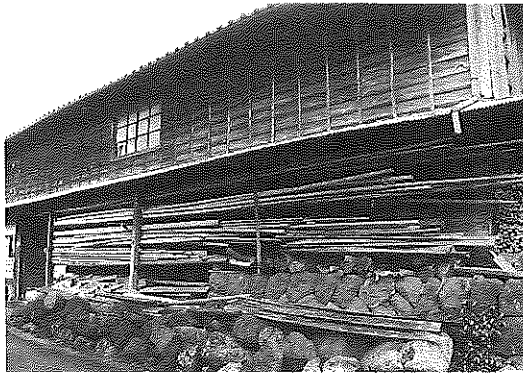
苗はアガリザク、オイザクなどと称する、田を後退りながら植える方法で植えたこともあるが、後にはたいいていスジヒキ（筋引き）で植えている。田を干した後、スジヒキボウ（筋引き棒）という道具で一度に十本くらいの筋をつけ、その筋に沿って植える方法である。

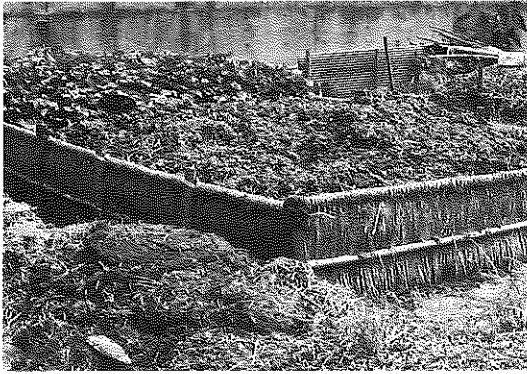
田植え終了頃、農休みとマンガアライ（馬鍬洗い）があり、忙しい農作業に息つくことができた。この日には、小麦まんじゅうやお寿司を作って食べる。

稲刈り かつて、稲刈りはノコギリガマ（鋸鎌）を使って行っていたが、現在では動力の稲刈り機が入って行っている。

ウシに使った竹の収納

特徴のある稲刈りは、ハダイ（湿田）の稲刈りであろう。土が軟らかすぎて足が潜ってしまうため、刈り手は長さ一間半くらいの板を二枚持って田に入り、これを順々に後ろへ送りながら、板に足を乗せながら刈って行く方法をとった。刈った稲は土手にアシ（足）を組んで作ったウシ（稲架）に干した。





サツマグラ

(三) カイコンの畑とサツマ（薩摩芋）の栽培

富沢の畑はカイコン（開墾）で開いた土地が大部分である。したがってカイコンは畑の代名詞にもなっている。「畑に行く」というところを「カイコンに行く」という人は多い。カイコンの土地は、石一つ無い土地で、昔はナガニンジン（長い人蔘）が良くできたと言われる。

渡辺喜市宅のカイコンにおける作物栽培の変遷を聞くことができた。カイコンとともに変わってきた富沢の農業の様子がよく理解できる。明治から大正にかけてのころは養蚕が盛んだったから畑は桑畑だった。戦前はサツマ、ニンジンが主流となった。特にサツマは良い収入源となり、戦後もしばらくはサツマによる景気が続いた。

喜市さんによれば、「昭和二八年ころまで百姓の景気は良かった」という。芝の時代があった。まだ芝を栽培しているカイコンもあるが、ごく最近では茶に変わったところが多い。芝は、裾野市一帯が広くやってきた戦後の新しい農業形態だった。人手もそれほどかからず効率の良い生業とされたが、富沢では、この芝も減少傾向にある。

戦前と戦後に富沢の農業の全盛を誇ったサツマ栽培に関わる言い伝えは多い。カイコンの土はアカデロ（赤い土）でチ（地質）が悪いため、良いサツマができると言われた。このデロに「農林一号」「静岡白」「オキナワ」などを植え付け、マルトミ（丸に富の文字）標をつけて小泉村富沢出荷組合から売り出していた。サツマの仲買には土屋カンショ、大山カンショ、三島カンショなどがあつたが、富沢では三島カンショに出荷していたという。富沢にサツマは関西方面に売られることが多かった。正月の初荷にはサツマを景気良く出したもので、隣村の水窪で悔しがらるほどだったという。

（杉村 斉）

第二節 一日の生活

(一) 仕事の一日

富沢では、稲作だけでなく開墾したヤマの畑でもさまざまな作物を作ってきた。これは現在でも変わらないが、大型機械を使わずに作業していた頃には、一日のサイクルはとてめまぐるしいものだった。とくに農繁期には、田植えがすむとヤマの畑に麦刈りに行くという行程を、一日のうちに行っていた。

時を知る 時を知る目安は、人によってさまざまだが、時計が普及する以前は、個人的な時間感覚を身につけていた。たとえば、夏は午前四時半頃には明るくなる。ちょうどそのころ一番鶏が鳴くので起きる。朝はその鶏の卵を食べる。夕方は腹が減ると帰る。また秋になると午後四時半頃には暗くなる、といった具合である。

また、御殿場線の音はノラにいても聞こえた。ちようど一〇時か
一一時頃に通るので、「オメシレシャ（御飯列車）が通るからオヒル
にしよう」などと昼食の目安にしたものだったという。

朝飯前 夏は朝飯前の仕事に、男はアサクサ（朝草）に行った。

女は食事の支度や洗濯のほか、ヤマに持っていく弁当作りをした。

夜なべ仕事

夜は主婦は着物の修繕に追われた。それこそ地下
足袋まで繕ったものだったという。また味噌作りで、米と大豆と塩
とを臼で搗く作業は、夫に手伝ってもらいながらやったという。

挨拶

家を訪ねて声をかけるときは「いるかね」と言う。これ
は富沢だけでなく富岡でも言っている。富岡ではすべての挨拶が「や
ーい、いたーけやー」に対し、「やー、あがらっしゃー」になる。い
っぱう富沢では、天気の良いときには「いいあんばいでございます
」と言い、あまり歓迎しない雨が降っているときには「うつつうしい
ございます」、久しぶりに雨が降った後では「いいお湿りでございま
す」などと言いつけるという。夕方の挨拶も富岡と富沢で違いがあ
る。富沢ではノラからの帰り道に仕事をしている人に声をかけると
きには、「おしまいなさいまし」と言いながら帰る。富岡では「お晩
になりがした」と言う。

(二) 食事と生活

食事の回数

食事は一日四回とった。朝食のことをアサメシ、
昼食のことをオヒル、昼食と夕食の間にヨウジャあるいはユウジャ、
夕食のことをヨウハンという。アサメシは午前四時から五時の間、
オヒルは午前九時から一〇時の間、ヨウジャは午後一時から二時の
間、ヨウハン日は日が入ってから午後六時ごろにとった。

朝食の献立は、御飯に味噌汁とコウコ（お新香）ぐらいだった。

おかずは魚の開きや卵をつけた。昼食は朝食の残り物を食べ、夕食
はおつゆに魚の煮物をつけた。ヨウジャはヤキパンやサツマイモな
どを食べ、家でとるときにはその他の食事と同様にしっかりとった。
家によっては主人のみ箱膳で、その他の家族は各自で茶碗などの食
器を持ち寄る程度だった。食事はイロリに鉄鍋をかけて味噌汁など
を煮ながら、その周りでとった。またヤマの畑に行くときには、現
在では家に戻って食事をするが、むかしは弁当を持っていった。弁
当はオヒルとヨウジャの二回分を一つの弁当箱に詰めて持っていっ
た。献立は御飯に漬け物と卵ぐらいだった。

主食

主食はバクメシ（麦飯）で米と麦の割合は家によっても

時代によっても違うが、バクメシ一升のうち二、三合から五合くら
いの大麦を入れていたようだ。麦は戦争前はツブシムギを入れてい
たが、戦争中からエマシムギを入れるようになった。ツブシムギは
ツキヤの精米機でつぶしてもらい、それを米と混ぜて炊く。米だけ
の白い御飯より香ばしくおいしかった。エマシムギはツキヤで丁
寧に搗いて白くし、えまして（鍋で煮て）麦が膨らんでから米と一
緒に炊いた。米は前の晩にといで水に漬けて冷やかしておく。養蚕
をやっている頃は忙しかったので、朝、桑摘みにいっている間に子
どもに麦をえませ、それを米に混ぜて炊いた。ツブシとエマシで
はおいしさがまったく違い、ツブシの方がずっとおいしかったとい
う。普段はたくさん食べられないので、祭りの時には飯をたくさん
食べた。なお蕎麦の季節には、朝食と夕食に蕎麦を食べ、昼食に御
飯を食べたという家もある。

うどんと蕎麦

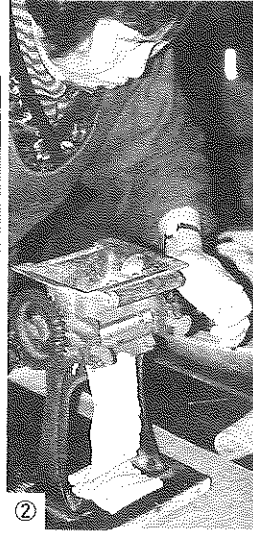
夏にはうどんを、冬には蕎麦を夕食に作って毎



④



③



②



①

- ①ソバをうつ
- ②ソバを伸ばす
- ③ソバを切る
- ④ソバをゆでる
- ⑤カニをつぶす
- ⑥カニジル

晩のようによく食べた。製粉はパンツキヤといって、モヨリの共同の水車の石臼でやった。うどんは小麦粉を水でこねて伸して切り、キリコミといって里芋や大根、ネギなど具をたくさん入れた味噌味の汁に入れて食べた。昭和七、八年頃麵を伸して切る機械が入ったので、ノラから帰ってからすぐに夕食を作るのがとても便利になった。小麦は自家製で家によっては七〇から八〇キロ取れるが、今では粉屋に売ってしまったりする。

ソバガキ

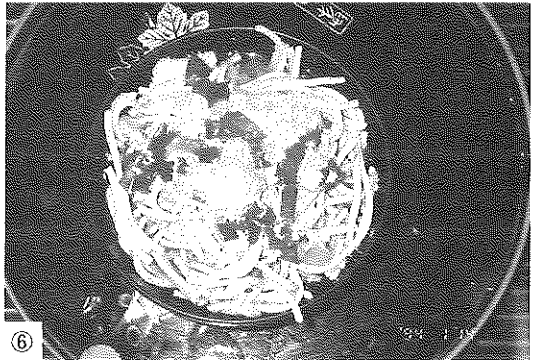
冬の非常に寒い日に、ソバガキを食べると体が暖まる。ヌクトメタ（暖めた）茶碗に蕎麦粉を入れて熱湯を注ぎ、箸でかき回したものに金山寺味噌やカツブシ（鯉節）などを入れて食べると、とてもおいしい。

ナベヤキ

ナベヤキとかヤキパンとかいって、うどん粉のとい



⑤



⑥

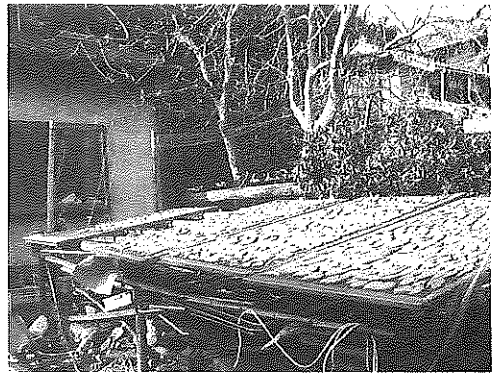
たものにサツマの千切りを入れて少し砂糖を加えたものを、炒り鍋に油を流してお好み焼きのように焼いて食べた。これは夏のオヒルやヨウジャによく食べた。

草餅 クズマイ(売り物にならない二等米)を搗いてときあげて粉にし、草の葉(モチグサ)を入れて餅にしたものをヨウジャやおやつに食べた。

蟹汁 普段は食べないが、黄瀬川で捕れたズガニを入れてカニジ(蟹汁)を作る。これに自家製の蕎麦を入れ、醤油で味付けをして食べる。カニはカナヅチなどで甲羅ごと叩いてすりつぶし、そのまま汁に煮込んでしまう。ズガニを食べるのは、小正月など特別の日だけである。ズガニはクロゲで、子どもが黄瀬川でモジリを使ってよく捕ったものだった。

サツマイモ 蒸かしたり焼いたりして食べるイモは赤いイモで、品種はジズオカハクだった。マルトミ(囀)の商標で登録して裾野駅から盛んに出荷した時期があり、最盛期には一軒で二〇俵も三〇俵も出したので、貨車に二車、三車と積んだこともあった。御殿場の方のイモはヤッコイ(柔らかい)が、富沢のは栗を食べるようにほくほくしておいしいと評判だった。サツマイモを作るのはノラよりヤマジの方がいい、つまり赤土のカイコン(開墾)の方がおいしいものができるという。サツマイモは鍋一杯に蒸かしておき、子どものおやつに、ヨウジャにと、よく食べた。また、夜食としてサツマメシを食べた。この時代、とにかく食べるものが悪かったという。

干し芋 そのまま調理をするサツマイモとは別に、ホシイモ(干し芋)を作る。ニンジンイモともいい、主食ではなく間食として食



干しイモ



タクワン作り

日くらいたてば食べられるようになる。

べる。洗って大釜で半日蒸かし、蒸かし上がったらすぐに熱いうちに皮を剥く。翌日に薄く切って干す。気候によって多少違いはあるが、だいたい一週間くらい干す。量は家によっては一日に二釜蒸かす。この作業は年内から始める家もあるが、ほとんどの家では年が明けてから三、四月頃まで続ける。ニシの風が吹かないとホシイモはできないからである。

干し大根 大根の中でも生食用とホシグイコン(干し大根)用の種類がある。ホシグイコンは漬物用で、生の大根をそのまま天気が良ければ一週間から一〇日間干す。干し上がった大根は一〇キログラムに対して小糠三升、塩三合を混ぜ、色付けをして漬ける。二〇

魚の行商 沼津の河岸から、魚屋がハンデヤー（飯台）に魚に入れて担いできた。イワシなどわずかな魚を一週間に一回くらい持つてくるかこないかで、買うと一〇銭くらいのものであった。

味噌の作り方

かつては味噌は各家の手作りだった。味噌は糶（こうじ）味噌で、大豆二斗（半俵）と大豆と同量の米糶二斗、それに搗いた大麦を五升入れて作る。まず糶作りだが、麹菌を買ってきて煮た米に混ぜ、キリダメ（モロバコのこと）二〇枚に広げてねせる。ねせる場所は暖かい場所、縁側の隅の押入を使ったという家もある。

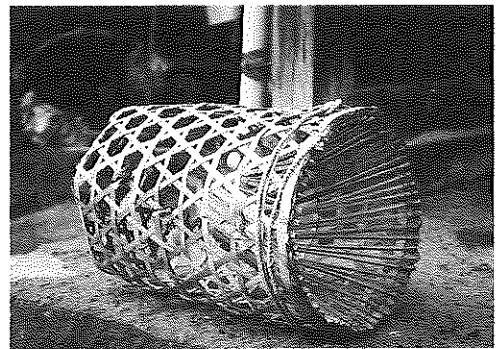
そこにモロバコを重ね、毛布や布団を掛けて三日から五日間くらい醗酵させた。これは遅くても一〇月の末までにやらなければ、寒くなって醗酵しなくなってしまう。これに煮た大豆と塩五合を入れ、臼で搗く。夜なべ仕事に夫に手伝ってもらいながら搗いたという。最後に一俵仕込みの味噌樽に仕込んで一年待つ。

醤油の作り方

醤油は、半俵の小麦と半表の大豆に糶を入れて作る。小麦は炒り、大豆は煮て糶を混ぜ、一俵仕込みの醤油樽に仕込む。秋になると醤油絞り専門の人が回ってくるので絞ってもらう。そうしてまたその秋に来年の醤油の仕込みをする。

生活用水

富沢のムラは岩盤の上に立地しているため、ほとんどの家が井戸を掘っても水が出ない。また井戸を掘っても、山や用水からしみ出た水が出る程度だった。そこで、飲料水を始め生活用水にはヨウスイ（深良用水、カワとも言うっている）を使ったり、飲料水だけ井戸のある家から汲ませてもらった。ヨウスイは清流なので、米をといだりうどんを茹でたり風呂の水に使ったりした。夜遅くか、朝早く起きてきれいなうちに一日分の水を手桶で汲んできて、家の瓶いっぱいにしておくのが嫁の毎日の仕事だった。こう



モジリ

いう仕事に慣れていないと、手桶に汲んで天秤棒で担いでくると、家に着く頃には水が半分が減ってしまった。水は貴重だったので、「三寸下があれば水神さんがいる」、「カワの神さんがいる」、「カワは神さんだ」、といってカワの水をきれいにしようにみんなで心がけたものだった。だから、カワの水を飲んでも病気にもならなかった。しかし、

ひとたび雨が降るとヨウスイは濁ってしまうので、お不動さんの湧水まで汲みに行かなければならなかった。またヨウスイにはズガニやドジョウがいて、モジリで捕ったり、すくったりして食用にした。

飲料水

飲料水にもこと欠いたため、共同井戸を掘って飲み水として使ったこともある。下モヨリの共同井戸は現在の田口建業の辺りにあり、上モヨリは渡辺真一家の前にあった。

また、カミの渡辺武彦家でも家が岩盤の上に建っているので、やはり井戸が掘れなかった。そこで、昭和二年に神地鉄工所に頼んで裏山の湧水のところにタンクを二つ作ってもらい、そこから簡易の水道を引いてまかっていた。

昭和二〇年に富沢で石脇から水道を引いたが、富沢まで水がまわってこないのが現在では別の水源から引いている。

調理用具

イロリを使って調理をしていた時代には、道具を大

切に扱い、手入れを怠らなかつた。たとえば、どこの家でも鉄瓶を毎朝たわしで研いで、つるつるするくらい磨いておいたものだった。明治末から大正初めまでは、「釜飯を炊く」といって釜で御飯を炊いていた。それ以前は鍋で御飯を炊いていた。石を並べて二口くらいの竈を築き、そこに鍋をかけて御飯を作ったものだった。西洋ペツスイは六〇年くらい前に作ったという。

(松田香代子)

第三節 一年の生活

(一) 年中行事

1 正月の行事

正月は、一年の中で、もっとも行事の多い月にあたる。元旦に始まる最初の三日間はサンガニチや五日までのゴカンニチまで、最も密度が高い正月行事の日が続く。月半ばには二番正月があり、サイトヤキなど種々の行事が行われる。正月二〇日になってようやく「二十日正月目が覚めた」などと言って、正月気分が抜けるころとなる。

正月を順を追って記してみる。

元旦から七日正月まで 富沢では、元旦の午前零時を期して、お不動さんの湧き水まで行ってワカミズ(若水)を汲み、神棚にあがっている。女衆が行ったという。(服部みよさん大正二・一二生)かつては男衆がサンガニチの間の仕事をやって、おばあさん(女衆)には手を出せなかつたというが、いつか変わってしまったものであろう。この日、神社では富沢の新年会が開かれる。

二日、三日は年始回りの日とされる。カネオヤ(鉄漿親)、ナコウド(仲人)などと、主な親戚回りを行う。

四日は、「オッサンノネンシ(坊さんの年始)」で、坊さんが小坊主を連れて年始回りにやって来た。したがって、この日は、「オッサンがくる前に、神棚のお供えを下げるもの」と言われていた。しかし、現在では坊さんは回つて来ず、暮れに届けておいたツケトドケのお札として線香などが継ぎ送りで回ってくるだけとなっている。

また、四日はハツヤマ(初山)である。男衆はキノハカキ(木の葉かき)に出掛け、山に餅を供えてくる。渡辺文江さん宅では四日の晩に、人参や牛蒡をたくさん入れた野菜のご飯を作るそうである。「カチキ(田の緑肥)がたんぼにたくさん入るように」という願いを込めて作るのだという。ハツヤマの山でとったシラカシ(白樫)で、器用な人はケズリバナ(削り花)を作ったりもした。

五日をゴカンニチと称する。服部みよさん宅は、ゴカンニチには、家中全部の神に雑煮を供える習わしだという。

七日はナナクサガイ(七草粥)。六日の内に、芹は田のクロ(畔)で摘み、他の野菜は畑から採ってきて用意しておく。摘んだ草は家の中のダイジン(大神宮)の下で、キリバン(切り板、まな板)に乗せ、しゃもじで叩きながら唱えごとを言い、供えてやく。唱えごとは次のようである。

「七草、なずな。菜っ切り包丁、まな板。とう土の鳥と、田舎の鳥と、日本のしを渡らぬ先に、合わせて、バツババタ」

粥は翌七日の朝に作る。

オセチ(お節)と雑煮 正月の料理をオセチ(御節料理)と称し、ゾウニ(雑煮)とともにサンガニチの間食べる。渡辺文江さん

(明治四三・六生)の家では、オセチには里芋、ハス(れん根)、にんじん、昆布などの煮しめを作りオセチとしたという。オセチに洋薬やきんとんを入れることは新しい習慣で、かつては無かったという。また、雑煮は味噌仕立て、具には大根、里芋を入れ、餅は四角い切り餅だった。

正月に餅を食べない事例がある。渡辺園子さん(昭和一九・一生)宅には、「昔、飢饉の時、里芋を食べ、なんとか凌いで助かった」という伝承があり、正月三日間は食べないで里芋を食べるようになったという。渡辺家以外の富沢の主な家でも、かつてこのような習慣があったという。

年越し前の渡辺家では、一二月二九日に「イモアライ」と称し、正月三日間の間、神に供えるための小粒で丸く揃った里芋を用意する日が決まっている。三が日の間、元旦に供えた里芋は下げずに、二日には一個だけを加えて供え、三日目にもまた一個だけ供える。

五日正月と七日正月の日はサトイモを供えず、餅を供える。

オソナエワリ 一一日はオソナエワリで、供えてあった餅を割って、お汁粉を作って食べる。かつて、部落の初集會がこの日に行われていたが、今は三日か四日になった。

二番正月 二番正月は一四日から一五日にかけての行事が中心となる、中でもドンドンヤキは、もっとも大きな行事である。ドンドンヤキを一四日の晩に行う地区と一五日に行う地区が分かれるが、古くは一四日だったようだ。ドンドンヤキでは、七日に外したオカザリや子供の書き初めをドンドンヤキの火で燃す。また、この時、家の中の古くなったお札なども燃やす習わしである。

ドンドンヤキの場所も時代とも変わってきた。昔は富沢の上・



ダンゴボクの準備

中・下で、それぞれに行っていたものだったが、昭和四〇年頃から、黄瀬川の傍らの現在の場所一か所となって今に至っている。

二番正月の作り物の団子は、ニワ(土間)の白の上に飾る大きなものから、コウジン(荒神)、エビス(恵比寿)、ダイジン(大神宮)、ホトケサン(仏壇)などに飾る小さなものまで種々ある。ニワの白の上に飾る団子は、逆さにした白の上に山から切ってきた木を飾り、根元に宝船と里芋の団子を飾り、枝には繭の形や、

米俵の形の団子を付け、枝の中央には風の神様のカゼダンゴを飾る。一五日朝にはナリモウソウが行われてきた。カツノキにアズキガユ(小豆粥)を付け、子供が庭の柿木を叩く。その際、大声で次のように唱える。

「カキノキ、カキノキ、センヒヤクタワラ、ナールトモウセ、タカトイトコナルト、カラスガトルゾ、ヒクイトコナルト、コドモガトルゾ、チュウトコターンナレ」
ナリモウソウは、いわゆる成り木責め。しかし、その唱えごとの文言には地域による変化が見られない。

服部かつさん(明治三九・八生)は、ナリモウソウの木は「ほうの木」で、先端を十文字に切って小豆粥に付け、これで柿木を叩い

た後はダイジン様（大神宮さま）に上げておき、苗代に種を蒔いた後に水口に立てたという。

服部克己家は二番正月に「カニ汁のそば」を食べる習わしだという。カニは黄瀬川にモジリをかけて取ったズガニで、そばは自家で打った。

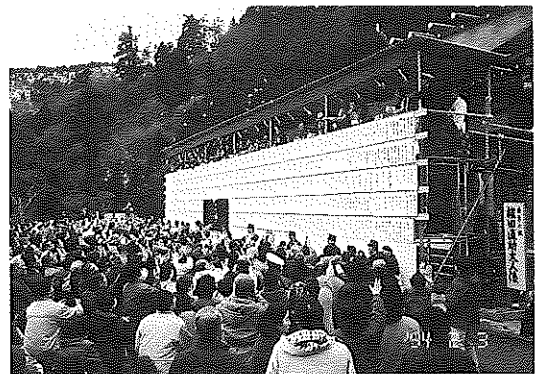
正月行事の終りは「二十日正月」である。といっても、この日に特別な事は行われない。「二十日正月目が覚めた」とは、この日を境に正月行事はなくなることを意味したものである。「正月の三月倒れ」というそである。正月のように行事の多い月が三月も続いたならば破産してまうという意味だいう。

山の神講 一六日は山の神講である。かつては正・五・九（正月・五月・九月）に行われていた。現在、山の神は富沢の上・中・下の三部落がそれぞれに祭っているので、この日は各部落ごとに開かれている。中の部落一軒では、オトコシ（男衆）がオフルマイに参加する。祭り当番は講仲間で順番に務め、山の神の地所の掃除を行い、しめ縄を飾り、オフルマイの酒やニアゲの準備を行う。

2 二月の行事

ジロウツイタチ（次郎一日） 二月の一日を「ジロウツイタチ」と呼ぶ習慣はあるが、この日、特別な行事らしい事は行われない。

マメマキ 立春の前日の節分を「マメマキ」と呼び、諸行事が行われる。マメマキは豆まきで、いった大豆を「鬼は外、福は内」の掛け声でまいて一年の厄を払い、福を呼び込む。その夜、神棚にはオチャハン（お茶飯）を供える。家族にはニアゲ（煮あげ）を作り、食事の時に食べる習わしである（服部みよさん大正二・一二生）。



平成6年2月大山阿夫利神社のマメマキ風景

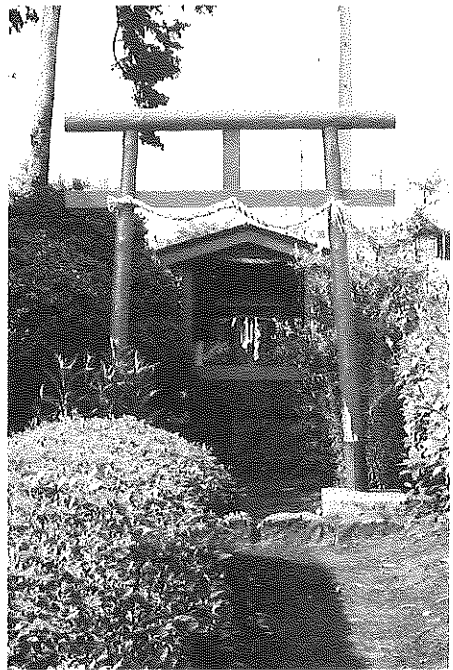
に差しておいた。

マメマキの夜、部落では大山講が開かれる。大山講は上・中・下の部落それぞれにあり、マメマキ前日にはクジで決められた代参者が大山（神奈川県伊勢原市）に出掛けて御札をいだけてくる。御札はマメマキの夜のオフルマイの前に分ける。

ハツウマ（初午） 二月最初の午の日をハツウマと称して行事を行う。ただし、屋敷神として、屋敷内に稲荷を祠っている家だけで行われる。

渡辺文江さん（明治・四三・六生）宅では、初午に稲荷神にオアゲ（油揚げ）、赤飯、頭付きの魚と、お供物として菓子や果物を供える。同家の稲荷は「夜泣きを直す神」として知られていて、あつちこつちから「正一位稲荷大明神」と書いたノボリを供えにきたもの

オチャハンは、お茶を煮出した液に塩を入れてご飯をたいたものである。また、今では行われなくなりましたが、かつてヤツカガシがマメマキの時の行事だった。鯛の頭をへぎ竹に突っとおし、イロリ端で「ナスの口焼き、ハエの口焼き、ウリの口焼き」などの唱えごとをいいながらツバを吐きかけて焼き、それをトンボグチ（玄閑）



渡辺隆徳家のイナリさん

だという。また次のような言伝えが残っている。「あるお婆さんは渡辺家の稲荷に願をかけ、願いを成就することができたが、オハタシ（お果たし・お礼参り）を忘れたため、夢枕に同家の稲荷神が現れた」
渡辺家の稲荷神には狐伝説がある。

「むかし、伊豆島田の方で、夜な夜な提灯を提げた良い女に化けた狐が現れて、通り掛かる近くの若い衆をだましていたという噂があった。これを懲らしめてやろうと、先祖の市郎兵衛さんが出掛け、女の持つ提灯めがけて鉄砲を撃ったところ確かに手応えがあった。しかし、当たったはずの狐はなかなか正体を見せず、市郎兵衛さんは誤って人間を撃ってしまったと思っていた。七日七晩の後、とうとう狐が正体を現した。渡辺家では狐の首を取ってきて、桐の箱に入れ、以来、稲荷の祠に納め、お祭りしてきたという」

渡辺家では今でも毎朝のように稲荷に暖かいご飯とお茶を供えることを習慣としている。

オコウボウサン（お弘法さん） 二月二日はオコウボウサンである。お婆さんたち、女衆の集まりである。かつては富沢以外の部落も入った広域の大念仏だったが、現在は富沢だけとなり、上・中・下の順番で当番を回り持ちして行っている。会場は公民館。

3 三月の行事

彼岸 春秋二回の彼岸行事を「墓参り」ととらえることが一般的である。富沢では定輪寺の檀家が多く、彼岸前には墓掃除に行くことが習わしとなっている。

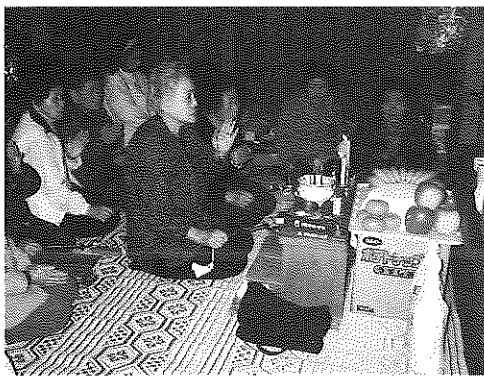
彼岸にはだんご、まんじゅうなどを作るものとされ、それぞれ作る日が決められている。「彼岸の」入りだんご、中（中日）まんじゅう（小麦饅頭）、明け団子」といわれる。

オフドウサン（お不動さん）

富沢部落全体の行事となっている。三月二八日で、当番は

上・中・下が回り持ちで行う。お不動さんの中でのお経はお婆さんたちが行い、オフルマイは男衆である。ニアゲを作り、赤飯のオムスビを作って、お参りに上がってくる子供達に分けたものだが、最近では来る子供の数も少なくなったため行わなくなった。

お不動さんの水と山、宮



不動講（不動堂）

田には、富沢上・中・下の四十七軒の権利者があり、お祭りはこれらの旧戸を中心に行われる。

4 四月の行事

雛節句 四月三日、四日は女の子の成長を祝う雛節句である。雛人形を座敷に飾る。特に初節句といって誕生後最初の節句の場合には、近所や親戚を招いて盛大に祝う。ご馳走に寿司をつける（作る）ことが習慣であった。雛人形に供える餅は、草餅（緑）、白い餅、赤い餅の三色を作った。

5 五月の行事

五月の節句 男の節句は五月五日である。鯉幟や武者絵の幟を飾り祝う。女の子の場合と同じように初節句は親戚などを招いて盛大である。初節句の場合には鯉幟のさおの先端に杉の葉をつける。五月節句の食べ物として、オカシバ（柏餅）は必ず作る。

6 七月の行事

マンガアライ（馬鋏洗い） 田植え終了後のマンガアライと農休みは年中行事といえるだろう。
七月九日、一〇日ころが、新年の組寄り合いで農家休みと決められ、マンガアライはその翌日にとった。

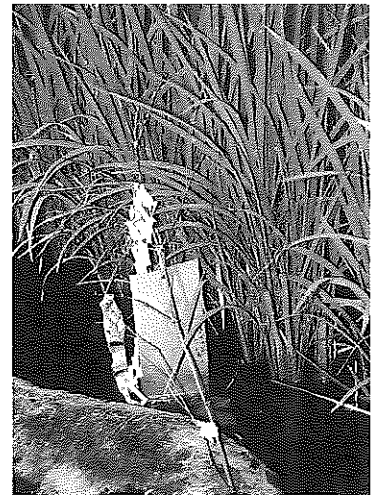
7 八月の行事

七夕 「七夕は旧（旧暦）でやるものだ」と昔からいわれていたが、この頃は学校が七月にやるから変なことになった、と、老人



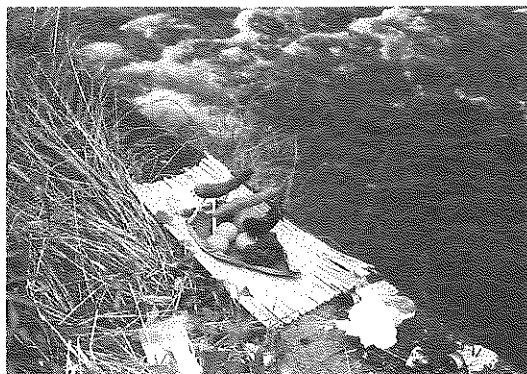
渡辺喜市家の初盆の供え物

盆棚には様々な供え物があげられる。祖霊の食べ物として、毎日のご飯を初め、季節の野菜や果物、餅、団子などがあがる。また、精霊の乗



田に立てられた七夕

季節の果物などを供える。七夕が終われば、飾り物をつけたままで、竹は田に持って行き立てて置く。稲の害虫避けになると信じられる。
盆 盆は八月一三日、一四日、一五日と続き、一六日の早朝に送る。盆は一三日は迎え盆である。各家ともに先祖の霊を迎える準備をする。ジョーグチに竹を三本立て、松明をつける。迎え火である。



黄瀬川の堤に置かれた送りダンゴ

り物として考えられるナスやキュウリで作った牛と馬の作り物は必ずあげられる供物である。

一五日は仏さんが買い物に行く日とされ、赤飯のオムスビとお金を供える習慣がある。

一六日には早朝黄瀬川に行き、ローソクと線香を立て、送り団子を供え、盆棚の供え物を川に流す。現在では環境を汚すというので、

川には流さず、川の堤で形式的に行うのみとなっている。
盆と同じ時期に、三島のお明神さん(三嶋大社)が夏祭りである。この頃の盆を「お明神さん盆」という人もいる。

8 九月の行事

十五夜 十五夜は旧暦の八月一日に行う。ススキ、ケイトウや十五夜花と呼ばれる草花と、里芋、薩摩芋、生姜などの季節の農作物や季節の果物、ご飯を供えた。中でも豆腐だけは必ず供えた。豆腐がない場合は、半紙を二つ折りにして豆腐に見立てて供えたという。

9 一〇月の行事

十三夜 「片見月は良くない」といわれ、十五夜を行った場合は十三夜も行われてきた。旧暦の九月一三日が十三夜の日である。「十五夜に供える里芋は、遅く供えても良かったから、ていねいに洗った綺麗な芋を供えるものだが、十三夜の芋はたとえデロ(泥)がついていても、早くから供えるものだ」といわれている。

愛鷹神社祭典 「富沢の祭りは雨降り」といわれるほど、昔からかならず祭りには雨が降ったものだという。かつて祭日は一〇月



愛鷹神社祭典 (富沢公民館)

の中の未の日だったが、戦後に一三日と決まり、その後サラリーマンが増えて十月の一三日の近くの日曜日ということになった。富沢の初集会の日には祭りの期日が決められる。

者にゴクウといって、お赤飯のオムスビを分けた。
祭り当番は上・中・下と順番に回り持ちである。公民館でニアゲや赤飯の支度をして、神社でオフルマイをおこなう。かつては参詣

10 一一月の行事

オイベツサン 恵比寿講をオイベツサンと称する。恵比寿を祭つてあるところに祭壇を設け、頭付きの魚、大根、ナマスなどを供えた。

11 一二月の行事

正月準備 二〇日過ぎ頃、大掃除を行う。家族総出の一日作業である。畳を上げて日に干し、竹の棒に笹を縛り付けて家の中の煤払いまで行う。終われば、ススハキダング（米の粉で作る平たい形の煤掃き団子）を作り、近所同志で団子を「やったりとったり」して、大掃除の終了を祝う。



ススハキ（大そうじ）

正月用の餅つきは、二八か三〇日である。「クンチモチは苦しみ（九）に通ずるので縁起が悪い」と、二九日にはつなかない。

渡辺武彦宅の餅つきは二八日に第一回目をつき、この日の内に床の間、大神宮、恵比寿、荒神、御先祖様、観音様などの家の中の全部の神様や仏様にお供えする。一二月三〇日には別につき直し、二八日のお供えを取り外して新たにお供えをする。この時は、二つの蔵のクラガミ（蔵神様）にまでお供えする。また、大黒様と床の間

のお供えは大きいものとし、年神様用として大神宮様に四組、恵比寿様には二組のお供えを作る。さらに渡辺家では、正月一日に、定輪寺用の餅として、一升五合の餅を作る。

家の中の障子張りや御節料理作りは大晦日の行事である。大晦日の夜、すべてが終わってからミソカソバを食べて一年を終える。

正月飾りやしめ飾りは自家で作って飾った。服部克己宅は輪飾りを、白、牛舎、川端、米蔵、外使所、井戸、仏壇、上使所、玄関、馬頭観音に飾り、ゴボウマキのしめ飾りを大神宮様、タイのしめ飾りを恵比寿様に飾っている。

（杉村 斉）

ムラの休み

月 日	休みの名称	作る食べ物	備考
1. 1~3	正月、三が日	餅（12月中につく）	元旦
2	々	お節、雑煮	年始回り
3	々		
4	初山		木の葉かき
5	五日正月		
7	七日正月	七草粥	ナナクサガイ
11	初集会	お汁粉	オソナエワリ
14	二番正月	団子	ドンドン焼き
15	々	小豆粥	ナリモウソウ
16	休み	ニアゲ（煮物）	山の神講
17	休み		
20	二十日正月		「二十日正月目が覚めた」という
28	奉公人の入替日		
2. 1	ジロウツイタチ		
11	紀元節		
21	弘法さん		
3.10	子安さん		陸軍記念日
21	彼岸	ぼたもち、団子、小麦饅頭	
28	お不動さん	ニアゲ	
4. 3	雛節句	餅（菱餅）、寿司	
4	々		
10	競馬		
14	々		
7. 9	コヤスミ		
10	マンガアライ		
20	定輪寺の大般若祭		
8.13	盆	餅、赤飯	
8.14	盆		
15	々	オムスビ	
9. 1	二百十日		
10	二百二十日		
23	彼岸	団子、小麦饅頭、ぼたもち	
10、中未	愛鷹神社祭典	ニアゲ	
12. 5	農休み		

第四節 一生の生活

(一) 産育

子どもが初めて授かったときには、その子どもの生長の無事を願うさまざまな儀礼が行われる。子どもの両親ばかりでなく、カネオヤや仲人、母親の実家のほか、近所の人たちも参加して子どもの生長を祝福するのである。富沢ではとくに子どもが病気になるたとき、また瘡瘍を患ったときには、そういう地域のおとなたちの助力が大きく関わってきたものだった。

1 妊娠と出産前

妊娠 嫁は子どもが授かるようにと子安さん(子安地藏尊)に願かけをし、生まれるとお果たしにおひねりを持ってお参りをする。生理が止まると子どもができたかわかり、まず夫と姑に告げる。

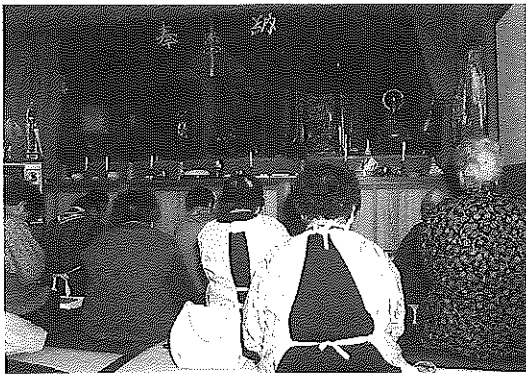
トリアゲバアサンと産婆 かつて子どもは近所の手慣れたおばあさんに取り上げてもらったり、自分で取り上げたりした。この近所のおばあさんのことをトリアゲバアサン(取り上げ婆さん)と呼び、お産婆さんを負かすくらいたくさんの子どもを取り上げたという。また同じ昭和初期の出産でも、二本松のお産婆さんに取り上げてもらった人もいる。お産婆さんの場合には妊娠の直後から検診などで出産前にも妊婦と関わっていくが、トリアゲバアサンの場合には出産時に頼むのみで一時的な関係であった。

オビイワイ ハツゴ(初子、最初に生まれた子ども)の時に限

り、オビイワイと称して五か月目の戌の日に腹帯を締めて安産を祈った。腹帯は紅白の木綿の布で、カネオヤが贈ってくれるのでそれを自分で締めたり、お産婆さんに締めてもらったりした。カネオヤは腹帯のほかに小豆一升、餅米三升を添える人もいた。またオビイワイには嫁の実家から餅を持ってきて近所に配ったともいう。

デミマイ デミマイといって子どもが生まれる一週間に、嫁の実家からあんこの入った餅が重(重箱)に入れられて届く。それだけでは足りないので、家でも餅を作って補充し近所や親戚に配る。

安産祈願 性別の判断は、お腹が大きいと男の子だと言ったくらいだった。また出産前には、淡島講や子安講で安産祈願をしてもらう。淡島講は若いお嫁さんたちの集まりで、上・中・下モヨリごとにやっていたが、現在では上モヨリだけが続けている。一年に何



子安さんの祭り

回か催し、ヤドがバンバン(順番)に回っていく。ヤドの都合のいい日の夜に、オフルマイ(お振る舞い)といっては子どものある嫁たちは子どもを連れて集まり、淡島さんの掛け軸をかけて供え物をし、安産祈願をした。

また子安さんはモヨリごとではなく、富沢全体で念仏講のおばあさんたちが祭りをしている。毎月一日

の子安講の日や三月一〇日の祭りの日に、念仏講のおばあさんたちに安産の宿願をもらう。富士宮市杉田の子安さん（富士市吉原の毘沙門さんの分かれて、現在は子安神社という）にも願を掛ける。それで安産で生まれると、お果たしには供物を供えてお礼をする。

子安さんは現在公民館に祀られているが、公民館のあるところとは定輪寺の隠居寺があつた場所で、廃寺になつていた。そこに明治三五年生まれの人の母親たちが、勧進をして杉田の子安さんを勧請して祀り堂を建てた。かつてお産で亡くなる人がたくさんいたので、安産の神様で名高い杉田の子安さんを年寄りが勧請した。そうしたらお産で亡くなる人がなくなつたのだという。

子安さんの祭りは、三月一〇日午後一時から始まり、上・中・下モヨリが毎年交代で当番をしている。祭りは念仏講のおばあさんたちが行い、子安さんの御詠歌「ありがたや慈悲ある子安地蔵尊 後の世までも守りなるらん」を一五回唱える。お供えは積み団子のほかいちいろ持ち寄つた供物を供え、祭りが終われば参加者で分けて持ち帰る。ご馳走はお酢の混ぜ御飯、豆腐の味噌汁、ほうれん草の胡麻和え、オチヨコには人参と蒟蒻の白和え、きんぴらごぼう、オヒラに里芋・椎茸・蒟蒻・牛蒡・人参の煮物のほか漬け物がつく。これらのご馳走は、当番にあつたモヨリのお嫁さんたちの手作りである。祭りには各家の主婦などがお賽銭を持つてお参りに来るので、そのお返しにお弁当などを渡す。かつては富沢だけでなく定輪寺など近隣のムラからお参りに来たようである。

2 出産

出産 明治時代まではナンド（納戸）で畳を上げ筵を敷き、そ

の上でお産をした。昭和の初め頃になると同じナンドだが、畳を敷いたままでそこに布団を敷き、さらにその上に油紙、その上に布団の皮など汚れてもかまわないものを敷いて、四つん這いになって産んだ。手慣れているトリアゲバアサンは子どもを取り上げた後、そのついでにはほかの仕事もしたものだ。お産婆さんに取り上げてもらう時代になると、陣痛が始まると家の人がお産婆さん呼びに行つた。お産婆さんの指導で、ザシキ（座敷）に布団を敷き、その上に油紙などを敷いて寝て産んだ。へその緒はトリアゲバアサンの時代には、ノチザン（後産）が下りてから麻の糸で縛ってはさみで切つた。かつてはこのときに、ノチザンが下りずに上につけてしまひ死んでしまつた産婦が多かつたという。

産飯 子どもが生まれるとすぐに近所のおばあさんたちが白い御飯を炊き、釜の蓋を裏返してその上に御飯を山盛り一杯載せて子どもの枕元に置いた。子どもが無事生まれたことを感謝し、みんなでその御飯を食べた。

後産 後産は家の男の人がお墓へ持つて行って埋けた。その家の墓地の敷地内に埋け、定輪寺に墓地がある家ではそこに持つていった。当時定輪寺の墓地は森のようになっていたという。

産湯 産湯はナンドの床下にこぼした。子どもの入浴は、お産婆さんが一週間来て入れてくれた。

乳付けと産婦の食事 むかしは初乳はやらす、絞つてナンテンの木の下にこぼした。乳は三日目からやり、それまではマブリというものを薬局で買ってきてガーゼに包んで子どもに吸わせていた。またチ（乳）がよく出た人は、チの出が悪い人の子どもにも分けてやつた。産婦の食事はユカケ（湯かけ、湯漬けともいう）の御飯だ

けで、シオダチといって塩気のある物はとってはいけなかったので、三日から一週間くらいはおかずを食べられなかった。しかしそれでもユカケの御飯はおいしかったという。

産後と産の忌み 産婦は三日から一週間くらいで床を上げたが、子どもの世話をするくらいでシヨウバイ（仕事）はしなかった。とくに冬は水を使わないよう、湯を沸かして寒い思いをしないようにした。また針は一か月持つてはいけないといわれた。

ネネミと出産祝い 子どもが生まれて一、二日すると、ネネミといって近所中の主婦たちがお祝いを言いに来る。お祝いには子どもの衣服などの品物を持つてくる。またカネオヤは出産祝いとしてオバイバンテンを贈ってくれ、子どもには飴を寝床に持つてきてくれる。

お七夜と名付け 生まれて七日目にお七夜のお祝いをする。お七夜には赤飯を炊き、カネオヤや親戚、仲人、近所の人たちに品物を持つて配り、出産祝いのお返しをする。

名前は三日目くらいにはつける。名前は近所の命名に詳しいおじいさんに付けてもらったり、大社（三島大社）で付けてもらったりする。お七夜には名前の公開をする。

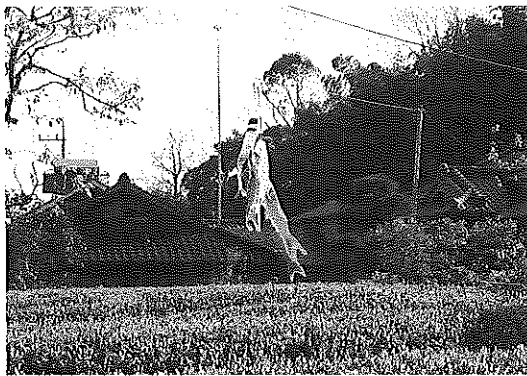
お宮参り トリイマイリ（鳥居参り）といって、生まれて五〇日目に氏神さんである愛鷹神社にお参りに行く。これは産んだ母親が子どもを抱いて鳥居の前まで行き、鳥居をくぐらずにお参りしてくることである。

生まれて一〇一日目にヒヤクヒトエといって氏神さんにお参りに行く。それまではお宮さんの鳥居をくぐれない。子どもの母親や姑が子どもに産着を着せてお参りに行く。産着は江戸褌のような祝着

で背紋と魔除けが背中についており、お宮参りまでに嫁の実家から届く。この後カネオヤや仲人、親戚を挨拶して回る。そうすると回った先で、御祝儀を子どもの産着の紐に祝儀袋の水引で結わえてくれる。

3 成長過程

初節供 長女は四月三日、長男は五月五日に初節供を祝う。初節供の一月前に、女の子にはカネオヤや嫁の実家、仲人からヒイナサン（雛人形）、男の子にはカネオヤから男の子の守り本尊である



鯉 幟

鍾馗さんや若武者人形、嫁の実家からは武者幟や鯉幟が贈られる。また組からはスシグライなどの品物が贈られる。これに対して、赤飯や煮しめ、餅などのご馳走を作り、組の人や親戚、カネオヤ、仲人、嫁の実家の両親などを呼んでオフルマイ（お振る舞い）をする。来てくれた人には簡単なヒキモノをヒク（引き出物を出す）。

初誕生 初誕生はむかしはしなかったが、しても内輪で簡単に祝いをする程度だった。

シンキヤク 生まれた子どもを抱いてよその家に行くと、わず

かでも御祝儀をくれた。その家に初めて来た子どものことをシンキヤクというのである。

七五三 ハツゴは、男女とも七歳のときにオフルマイをして祝う。三歳は内祝い程度で、五歳の祝いもありやらなかった。七歳の祝いにはカネオヤや仲人、近所の人、親戚の衆を呼んで一晚中飲食し、酒を一樽空けてしまうほどだった。かつては富沢青年団が太鼓をたたき、笛を吹き、擦り鉦をすって、七つのお祝いの家に踊り込んだ。子どものオフルマイなので青年がヨッピ（夜通し）で飲めたという。またカネオヤは七五三のお祝いのほか、小学校の入学祝、成人式などにもお金で祝儀を出した。

子守 子どもが泣いたとき、「お寺の大門においてくるぞ」というと泣き止んだもので、それほど定輪寺の大門跡は昼間でも暗かったという。

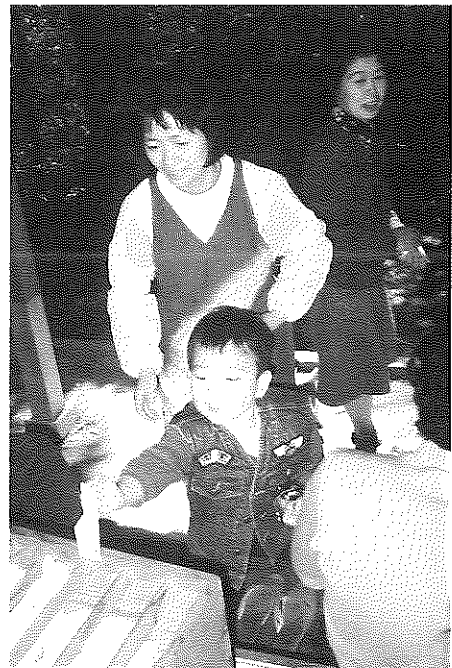
子育て祈願 子どもが病気になったとき、子安さんに願をかける。子どもの名前と歳を書いて祈願し、願果たしにはお経を上げる。また子安さんに上がっていた短い蠟燭をもらっていくと良い（早く良くなる）という。

お不動さん お不動さんは「寝小便の神様」として知られ、子どもが寝小便をするとお不動さんにお参りに来た。「子どもの神様」でもあり、寝小便をしないようにと願を掛け、願果たしには一尺四方のコモ（薦）を藁で編んで供えた。嫁に行く予定の娘の寝小便が治らず、二一日間の願を掛け、かなったのでお果たしにコモを編んで供えた人もいた。お不動さんは三月二八日が例祭だが、その祭りに行くとかつてはそういうコモが上がっていたものだった。現在では、子どもに限らず年寄りでもゴシユクガン（御宿願）をかける人



赤飯のおにぎりをもらう

があり、ホンボウソウは体中いっぱいになってきた。ウエボウソウは種痘のことで、明治になってからやるようになった。

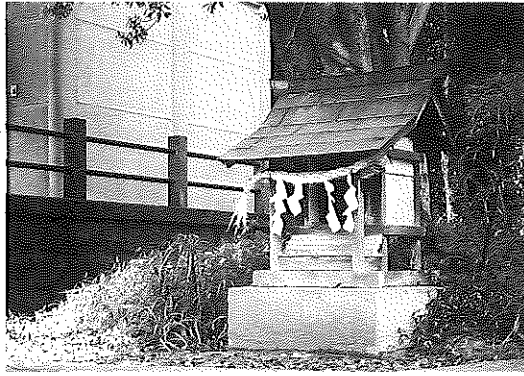


お不動さんにお参り

がいる。またどこから聞いたのか、東京方面など遠くの人がよく来るようだが、近くの人が来たのはあまり見たことがないという。最近では受験合格の願をかけ、灯籠を奉納した人もいる。例祭には近所の子どもたちがお参りに来て、赤飯のおむすびをいただいでいく。

疱瘡祝い 疱瘡にはウエボウソウとホンボウソウ

子どもが三つぐらいになると、役場から通知が来て疱瘡を植える。このウエボウソウをした後で、ホウソウガミ（疱瘡神）を祭る。ホウソウガミを祭る棚をホウソウダナ（疱瘡棚）というが、ホウソウダナにはいくつかの種類がある。

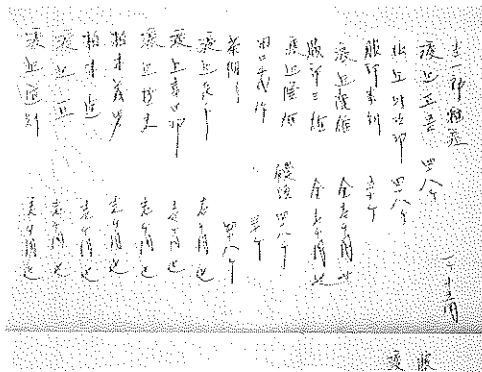


ホウソウガミさん（愛鷹神社脇）

ひとつはカツの木の梓の上に棧俵（俵の蓋の部分）を載せ、それに赤飯を載せ、紅白の紙垂を切った幣束を四隅に立ててそれにオシンメイ（注連縄）を張ってつなぐ。これをナカバシラ（中柱）に縛り付ける。またホウソウマンジュウ（疱瘡饅頭）が嫁の実家から届く。ホウソウマンジュウは普通の饅頭より少し高めのもので上に赤いポチ（点）がついていて、一重重（四重ねの重）に入れて持つてくる。これにさらに数を足して、近所や親戚に三〜五つくらいずつ配る。カセテ（黒くかさぶたになって）良くなると、ユカケ（湯かけ）といって棧俵を子どもの頭に載せてこの上から笹で湯をかける。これが終わると棧俵も笹も愛鷹神社のホウソウガミさんのところに納めてしまう。もうひとつのホウソウダナの作り方は、棧俵に団子を載せ、紅白の紙で幣束を切り、縄で吊って家のナカバシラにかける。この幣束には紙で人形を作つてつけるが、疱瘡に患つた子どもが男の子なら

羽織・袴の形、女の子なら袂の着物を着た人形を作る。ホウソウダナを作つてから三日くらいで疱瘡のヤマアゲになる。ヤマアゲというのは疱瘡が盛り上がつてくることをいう。これでお祝いに親戚が一六個の団子を重箱に入れて持つてくるので、その団子は近所に配る。カセル（黒くなる）まで一週間くらいそのまましておく。団子をくれた家には、赤飯にアゲ（油揚げ）のおかずをつけて返す。これでタナオサメ（棚納め）となる。

いまひとつの作り方は、すだれのようにして四角形に藁を編む。その上に赤いポツをつけたホウソウマンジュウを並べて幣束を真ん中に立て、神棚に供える。その後愛鷹神社のところに祀られているホウソウガミさんに納める。このホウソウマンジュウは嫁の実家から神棚に供える分も含めてまとめて届くので、組中にも配る。なお、愛鷹神社の祭典は一九九四年は一〇月九日（一〇月第二日曜）であるが、かつては一〇月の中（なか）末の日にやっていた。このとき一緒にホウソウガミを祭る。ホウソウガミは愛鷹神社の境内、道寄りに祭られている祠である。



ホウソウイワイ

疱瘡にかかっているときには、「まるで神さんのように」ホウソウが入つてこないように、「カドグチにオロウ（蠟燭）を供え、水をあげてお願いした。このホウソウ

ウイワイ（疱瘡祝い）をしたのは長男長女だけで、次男次女以下は内祝い程度だった。かつては疱瘡もあなどれない流行病で、御宿の入谷ではおとなが三人死んだことがあったという。

法印さん 年に一回、甲州街道を通過して葛山からホウエン（法印）さんが馬に乗ってやってくる。いつ通るかは上の方のムラからイイツテ（言伝）でくるので、その日の朝は街道で待ちかまえている。富岡にはヒトアサ（一朝）いるだけで、千本浜で浜降りをするために立寄るだけである。法螺のキヤー（貝）を吹きながら、三人ぐらいでやってくるが、馬方が必ずついていて、ホウエンさんが来ると、子どもたちがお金やお米を持っていき、お祓いをしてもらった。また小さな子どもは母親たちが背負ってお祓いしてもらったという。

佐野小学校 佐野小学校は明治三五年生まれの女性が小学校に入学したときは、泉・小泉村が合併してできたばかりの小学校だった。女子生徒が二六、七人、男子生徒が二〇人で、あわせて五〇人もいなかっただ。通学路にあった花園橋はまだ板の橋で、風呂敷に本をくるんで、藁草履を履いて通った。また竹皮草履は軽く、麻裏草履は学校に履いていたら珍しがられた。雨の時には下駄を買ってもらって履いたが、橋の板の隙間に歯が挟まってしまい困ったものだった。雨が降らないときには、黄瀬川の浅いところを歩いて渡った。上モヨリの子どもたちは荻野滋家近くのウワガワラを、中モヨリの子どもたちは、ナカヤカイドウを、下モヨリの子どもたちはサクラバタというところを渡った。弁当はオイモかオサツの弁当だった。

生まれ年 寅年生まれの子はセエトウ（青島）戦争（第一次

世界大戦のこと）の時には、小学校で千人針を縫わされた。シナ事変までは糸の端を結んだ。寅年生まれの子は年の数だけ結べたので、当時は九つ結んだ。今度の戦争（太平洋戦争）の時は年の数も多かった。糸の端を結ばずにカラシバリだった。

生理 生理のものはオテントサンに見せないように、陽の目にあわないうところ、ウマヤの隅に干したものだ。明治三五年生まれの女性がメンスになったのは一五、六歳の頃で、とてもびっくりしたが、年上の友達に聞いて処理した。綿を手ぬぐいに包んだもので処置し、汚れた綿は捨て、手ぬぐいは洗って日陰干しをしてまた使った。

青年倶楽部 男子青年はクラブ（青年倶楽部）に寝泊まりしていた。クラブは大正の初期に現在の服部建設のときの空き地に作った。それまではアンテラさんをクラブの代わりに使っていたという。また、富沢にはシャギリがあり、愛鷹神社の宵祭りには笛や太鼓や擦り鉦で青年が一晚中シャギツタものだった。

一人前 男はクラブにある一六貫のタワライシ（俵石）を担げれば一人前だといった。また女は三三把のイナ（稲）を扱かわなければ、嫁にもらわれなかった。さらに、機織りで一日に二丈八尺（一反のこと）織らなければ、嫁のもらい手がないと言った。

（二）婚姻

富沢のことを「富沢のセギと山道を見たら、ヨメモコにくれるな」などと悪口を言われたという。山道というのは開墾の畑に行くナナマガリという山道のこと、愛鷹山が迫っている富沢の立地条件を指している言葉であろう。またセギというのは深良用水の穴堰のこ

とで、一雨降ると堰に富士山の噴火物の土砂がみんな詰まってしまう、ヨウスイに一滴も水がなくなってしまう。そうすると班ごとにイイツギが回り動員がかかるので、全戸の共同作業として土砂を掘りに行かなければならなかった。これは大雨の度にあつたので、不参加の場合にはデブソク（出不足金）を取られた。また戦争中は女でも出て炊き出しなどの仕事をした。そういう苦勞の多い富沢のことを、嫁取り婿取りの際に言つたのである。しかし、これは他の地域から言われたのではなく、富沢に生活している人々の実感として生まれた言葉なのである。

1 縁談の成立

通婚圏 富沢に嫁いできた女性や婿に入った男性のうち、大正から昭和一〇年代に祝言を上げた人の多くは市内の深良や旧富岡村から来ている。あるいは深良の親戚のついで、さらに北の御殿場市神山や東田中、小山町下小林などからも来ている。富沢に嫁いできた女性が縁で、実家のある深良から嫁に来るといったことが繰り返されていく。また富岡との婚姻関係も深く、葛山、上ヶ田、千福などから嫁いできている。このほか市内では公文名、市外では御殿場市高根、長泉町下土狩などから来た人もいる。

クチキキ 昭和一年に小山町下小林から嫁に来た女性は、深良の南堀に婿に入った叔父さんのクチキキ（口利き）で富沢に嫁いだ。だいたいクチキキをする人は、嫁や婿に入った先で、その仲介役をするのみで、祝言そのものに関わることはない。

見合い 話があると、まず見合いをする。見合いの席で嫁になる人が茶を出す、ムコがその茶を飲まなければこの話はご破算と

なる。つまり、ムコは相手を気に入らなければ茶を飲まなくてもいいわけで、縁談の主導権はあくまでも男性にあつたのである。それに対して女性は、親が嫁に行けといえれば嫁に行つたといひ、縁談は受け身の立場であつた。

仲人とカネオヤ いよいよ話が決まると、祝言の際に重要な役割をしてくれる仲人とカネオヤを頼む。仲人はヨメ方、ムコ方それぞれが一人ずつたてる。たいがい同じムラの人に頼み、祝言の準備からサケ、祝言までの一切の儀式に関わっていくが、祝言をあげた夫婦一代限りのつきあいで終わることが多い。

一方、カネオヤは双方で一組の夫婦を頼み、新婚夫婦の子どものお祝いを始めとして日常生活に至るまで、物心両面で面倒をみてもらうことになる。またカネオヤを頼む人は、嫁を迎えるイエで二代も三代も同じイエに頼むものとむかしから決まっている。とくに経済的にも補助できる財力をもっているイエが、多くのイエのカネオヤをやつていく。カネオヤのことをオヤブンと呼び、カネオヤが世話をやくイエをコブンと呼んでいる。戦争中、主人が出征したコブンのイエでは女子どもだけでイエを守らなければならず、カネオヤにはずいぶん世話になつたという。戦後その関係は薄れてしまつていくが、それでもなおコブンが初物がとれたときや旅行に行つたときには土産を持つてきたり、盆の墓参りや供物のお供えは欠かさず持つてくるといふイエもある。

サケ 結納のことをサケといひ、農繁期をさけて行われた。この日には、ムコ方からヨメ方に酒一升を持つて挨拶に行く。ムコ方からはムコのほかムコの仲人、親戚代表の三人で行く。ヨメ方ではヨメのほか仲人と両親を迎える。持参するのは酒一升と結納金、結

納品（ゴシキとかナナシキといった店でセットになったものを買ってくる）などである。サケというのは、ヨメがそれぞれの盃に酒をついで回ることからいうようである。またサケの時に、祝言の日取りを決める。大安の縁起のいい日を選んで決める。ムコ方では帰ってくる、ムコの親に祝言の日取りを報告する。またサケの時にヨメの仲人がついて、ムコの近所回りを済ませた人もいる。この場合、ヨメの実家が遠く一般に行われるムコイレ（後述）が難しかったためである。

嫁入り道具 タンス・布団・張り板（洗い張りに使う板）・つづら・座布団などで、着物は浴衣・給・羽織などを持ってきた。これらは嫁入り前に馬力で運んできた。なお、これらの品々を祝言の当日にムラの人に公開することもあった。

2 祝言

ムコイレ 婚姻の儀礼をシュウケン（祝言）というが、たいがい三日から五日、長い家では一週間かけるところもあった。祝言はまず、ムコ方がヨメ方を迎えに行くムコイレから始まる。ムコ方はムコ、仲人、親戚総代の三人くらいでヨメの家に来る。そこでまずお祝いをし、飲食をする。この間に、ムコはヨメ方の仲人に連れられて手土産を持ち、近所に挨拶回りをする。これが済むとムコ方は先にムコの家に行く。

嫁入り行列 ヨメ方の行列にはヨメに仲人、ヨメの両親、親戚総代、コシヨウツケ（ヨメの世話をやく女性で、仲人の妻が代理でやることもある）などがついてくる。行列はムコ方の人数より多くし、必ず奇数の人数で行くことになっている。まずヨメの実家を出

ると、ムコ方の仲人のところに寄る。仲人の家でお茶を飲んで時間調整をし、夜になるのを待ってムコの家に向かう。

ムコの家では、男女の子どもが家のトンボグチの両脇に立って提灯を持って出迎える。この子どもたちは、近所の両親がそろっている長男と長女で、だいたい小学校三年生くらい（七、八歳くらい）の子どもがなる。男女がそろわなくて、男の子だけが出迎えに出る場合もあったようだ。この子どもたちがサカズキの雄蝶雌蝶もやる。

サカズキ ヨメ方の行列はトンボグチから入り、祝言を上げる部屋の入りにまず挨拶をする。祝言の部屋は家によって違うが、床の間付のザシキとナキヤの二間をつなげるか、オクザシキ・ナカザシキ・ナキヤの三部屋をつなげて使った。そこに親戚や組の衆が座って待っていた。ヨメ方ではお膳かお盆にチャコンブクロ（茶米袋、茶小袋）を載せてその上にジュウカケ（重かけ）か袱紗をかけたものや、反物などの土産を持つてくるので、このときにそれらをザシキの床の間に飾る。なお、カネオヤは祝いの品として洗面器や口紅などの化粧品、日用品、布団や反物などをくれるので、これも床の間に飾っておく。また親戚の衆の御祝儀は、袋に入れた米をオハチに入れて持つてくる。これらはずらりと縁側に並べたという。

レイシのサカズキ（盃）は宴会をやる部屋で、床の間を背にしてムコとヨメが座り、客も列席して行う。サカズキを別室でやるのはオダイ（地主などの財産のある家）だけだったという。トンボグチで出迎えた男女の子どもが雄蝶雌蝶となって、三重ねの盃で三三九度をやる。まず夫婦で交わし、次に両親と親子の盃を交わし、最後に参列者に盃を回していく。

カオミセ サカズキの後、宴会半ばが過ぎた頃にコシヨウツケ

(小姓付け)がヨメを連れて近所に挨拶に歩いた。このとき土産に持ってきたチャコンブクロのお盆を、コショウヅケが持つて歩く。カオミセから帰ってくると、ヨメはそれまでの江戸棲に高島田を結っていた花嫁衣装を、このとき髷に結い直し友禅などの余所行きに着替えた。着替えはオクナンドでし、髪はカミサン(髪結い)に結ってもらった。

本膳 サカズギの後、本膳となる。本膳の司会は末席に座っているオシヨウバン(お相伴)がやる。本膳の料理は近所の女衆が三日がかりで作る。クチトリ(魚)、昆布巻などめでたいものが並び、高足膳で客に出す。

宴会の最中には、若い衆(青年)や子どもなどがみんな来て、障子に穴を開けてノズキ(覗き)をしたり、外からからかったりしてとても賑やかだった。ヨメが客にお茶を汲んで回って宴会が終わるのは、夜中になっていたという。

オカタミ 祝言の翌朝はオカタミといって、近所のオンナシユウ(女衆)が集まってボタモチ作りをする。このとき御祝儀として、近所の人たちは米を一升とか二升とか持つてくる。ボタモチはヨメツコにまず最初の一つか二つぐらいを作らせる。そうすると「早くこしらえなよ」などと言いついて、テンダイ(手伝い)の衆がみんなで作る。このボタモチをスワリボタモチとかオカタミのとかいい、このときにボタモチを食べてもらって手伝いの人たちをねぎらう。これが女の人たちのオフルマイとなる。現在では自宅で祝言をあげないが、式場の結婚式の翌日、あるいは新婚旅行から帰ってきた翌日にやはりボタモチ作りをする。

また日を改めて、青年だけを呼んで若い衆のオフルマイもした。

ミツメ 祝言から三日目にミツメといって、姑がついてヨメの里帰りをする。この日は簡単な手土産を持っていき、実家に挨拶をして泊まらずに帰ってくる。

(三) 厄年と年祝い

お伊勢参り 代参だった頃、青年が五、六人でお参りに行った。下向して帰ってくると、フナイワイといってムラの衆みんな馬を連れて佐野駅に迎えに行き、鈴をじゃんじゃん鳴らしながら代参人を馬に乗せてムラに入った。村に入るとまず富沢のイセミヤさん(伊勢宮、渡辺武彦家の屋敷神)にお参りをした。こういうことをするのは、長男のみだった。

大正一三年生まれの男性は、中学校で伊勢参りに行ったのだが、佐野駅に着くと富沢の人たちが迎えに来てくれた。その場で手織の魚子(ななこおり)の羽織(三つ紋)に袴を着せられて、やはり伊勢宮ともう一つお宮に寄り、全員でムラに帰ってきたのを覚えている。このときこういいう出迎えを受けたのは、同級生の中で自分だけだったという。

病氣平癒祈願 病氣が流行り長く患うと、その家の衆がゴシユクガン(御宿願)といってお不動さんに願をかける。年寄りに公民館に集ってもらい、不動経の念仏をしてもらったという。また大病になった人がいる家では、その家で不動経を念じてもらうこともあった。お不動さんへのお百度参りもした。

お産や病氣の時には平癒を願って願をかける。子安さんだけでなく、公民館に祀つてある観音さんを始めすべての仏さんに願をかける。とくに、ガキバアサン(餓鬼婆さん)は風邪を治してくれる仏

さんである。無事平癒すれば、お果たしをする。

百万遍

疫病が流行ったときに、年寄りがアンデラさんに集ま



百万遍

って、「南無阿弥陀仏」を唱えながら大きな一〇〇粒（一〇八粒）の数珠をみんなで回した。この数珠をオジュズとよび、シンギョウ（般若心経）を詠みながらやったこともある。夏の温気（うんき）に、村中が丈夫に過ぎさせるようにと願って回したという。

厄年 厄年をいうときは

にはすべて数えの年齢で、男は二五歳と四二歳、そのうち四二歳が本厄。女は一九歳と三三歳で、三三歳が本厄。厄払いは特にしないが、そういう年齢を厄年とするのはそのころに体質が変わるからだという。それで厄年だと人から言われる。厄年の人はサイトヤキの時に酒を持ってきて、焼け残りの竹に酒を入れて飲んで厄払いをした。

年祝い

八八歳の米寿の祝いを満八七歳（数えの八八歳）でやる。赤い着物を子どもが作ってくれる。むかしはそんなことはしないし、それどころではなかった。赤い着物を着るなどということは知らず、最近覚えたことだという。

(四) 葬送と墓

1 臨終から葬式準備まで

死の予兆 カラスはふつうカアカアと鳴くが、人が亡くなるようなときには嘎れたような声で鳴き、身内が亡くなる時には頭の上をクルクル回る。この声は他人にはわかって、家の人にはわからない。またユメジラセといって、大水や田植えなどの水の夢をみたり、歯が抜ける夢をみたりすると人が亡くなるという。

臨終 キトクというのは息を引き取った後のことをいう。家人はまず班の主な衆に知らせ、班長はイイツタエ（言い伝え）で班の人たちに知らせる。近所の衆が来るとまず神棚に白い紙を貼り、少し片づけを始める。近所の人たちは臨終をある程度知っていて、自発的にやってくる。

北枕 近所のおばあさんたちや身内が、死者の体を拭き着物を替えて一番いい着物を上に掛け、北枕に直す。北枕に直さないと死者が息を吹き返すという。最後に小刀などの刃物を胸に置く。これはネコがまたがなないようにするための魔除けである。とくに供え物をしないで、水と香花だけを供える。また死者が四国巡りをしてある場合は、その時のお遍路さんの白い着物を着せてやる。

これで死んでから二四時間はそのままにしておく。線香も団子も御飯もかざれない。友引にはオツウヤ（お通夜）もできない。なお、富岡では日が落ちれば死者を仏として扱える。友引でもトムライの役割分担を決めることができるという。

枕飯と枕団子 一日経ってから、おばあさんたちが米の粉を団子にして蒸かし、枕団子をミツボ（三粒）作る。枕飯はチャンメシ

(茶飯)をわざわざ炊き、茶碗に盛って箸を一本立てる。このほか線香を立てる。

葬儀の手伝い 通夜に、同じモヨリやその他のモヨリでつきあいのある家、親戚の人たちが集まって、葬儀の役割分担を決める。葬儀委員長は班の主な衆(古参)がなり、葬列の順序などを決める。なお通夜の飲食の支度には間に合わないので、役割分担前にオンナシユウ(女衆)が前もって買い物は済ませておく。

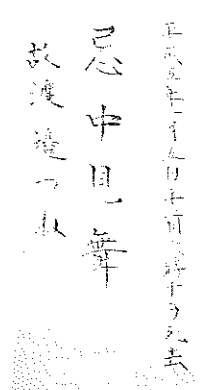
ヒトは電話が普及してからは行かなくなったが、二人一組で葬式の連絡に行くことをいう。かつては御殿場や富士郡境の原(現沼津市)、山中新田(三島市)、湯ヶ島(天城湯ヶ島町)まで汽車を使ったり、徒歩で行ったり、自転車で行ったりして苦労したものだ。葬式を出す家の班以外の班からヒトを出した。現在ではテラユキ(寺行き)とヤクバユキ(役場行き)の二組を決めるのみで、これは親戚の人が二人一組で行く。ヤクバユキのヒトはまず医者に行つて死亡診断書をもらい、それから役場で火葬証明書と埋葬許可書をもらってくる。火葬証明書は火葬場に提出する。土葬時代には土葬許可書が必要だった。

このほかの葬儀当日の役割として、葬列の役割以外にはヤキバユキ(火葬場行き)に男四人と女四人、ハマオリ(浜降り)に二人、交通整理に一〇人、モチツキ(餅搗き)に二人、アナツポリ(穴掘り)に四人、受付に六人などがある。

かつては、上モヨリと中モヨリが一緒に上モヨリ、下モヨリは下モヨリだけで一組となっていた。しかし六、七年前に上モヨリが上モヨリと中モヨリに分かれて、三モヨリになっている。また、桃園(定輪寺)はむかし七戸しかなく小勢だったので、葬儀の手伝いは

上ヨモリと桃園と一緒にやっていた。お祝いごとなどがある時にも、桃園と富沢は同じつきあいをした。このつきあいは今でも続いている家があり、富沢でもフルシイ(古い)家では、桃園に葬式があると連絡が入ってわかる。つきあいといっても現在では香典を届けるくらいとなり、また七戸全部とつきあっているわけでもないという。

キチュウミマイ キチュウミマイ(忌中見舞い)は、葬儀の朝手伝いの人が持つてくる。手伝いは喪家と同じ班からは一戸から二人、富沢地内の親戚の家からも二人出る。一戸から一人出る時には

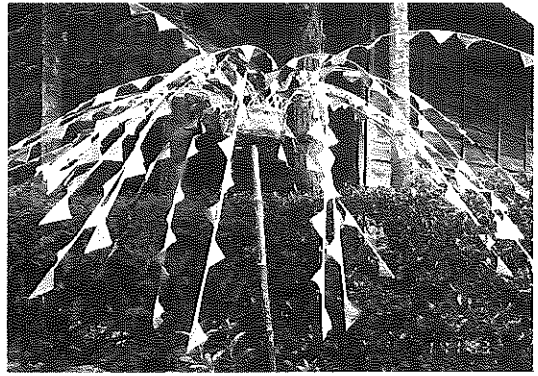


米五合、二人出る時には一升を各班で集めて班長が持つてくる。蒟

蒟も持つてくるが、蒟蒻は多くて五丁、これも班でまとめて持つてくる。まとめると三〇丁の時もある。

葬具の準備 手伝いは葬儀の朝午前八時に集まつてくるが、葬具の準備をするときには他の人より早く行つてやる。出棺が早いときには、前日に準備しておくこともある。竹伐りに二人、買い物に二人、連絡係に一人が必要となる。

葬具はまず竹の棒を一〇本用意する。一〇本の内訳はリュウタツ(龍)に二本、オオバタ(大幡)に二本、コバタ(小幡)に二本、カリモン(仮門)に二本、長寿者につくハナカゴ(花籠)に二本である。このほかにハナダンゴ(花団子)の串づくりには竹を使う。ハナカゴは八〇歳以上の長寿者につくが、この籠は二本松の籠屋



ハナカゴ

に作ってもらう。昔からこの籠屋につくってもらっていた。この籠に金紙や銀紙を貼り付けて飾り、中には五円玉、一〇円玉、五〇円玉に赤いビニールテープを貼って入れておく。以前はビニールテープではなく紅白の紐を通した。

ハナダングの串は八寸の長さのものを二四本と、一尺二寸の長さのものを二本用意する。八寸の方は煎餅を挟むもので、四寸くらいのところまで割いてそこに煎餅を挟む。一尺二寸の方は団子を挿すもので、下から二寸くらいのところに節がくるように削る。この串の一尺のほうに上新粉で作った団子を三個挿してやや間を空け、もう三個挿して全部で六個挿す。串を下手に作ると団子がうまく挿さらない。これらの串はダンゴサシという藁のつとに挿す。そして団子を三個ずつ挿してある串の間を一二本分まとめて縛る。ダンゴサシは富沢の共有物で、公民館に一對置いてあった(もとはアンデラにあった)。それがなくなったので、下モヨリとして寄付し公民館に置いてある。その他の上・中モヨリは寺のものを借りている。また公民館には輿台も置いてあったという。ダンゴサシは本葬をする前に祭壇に飾っておく。かつては藁細工も手作りりで、リュウタツやアシナカゾウリ(足半

草履)、棺を縛る縄なども自分たちで作ったが、ここ五、六年は葬具屋が用意してくるようになった。葬具屋は長泉町土狩か沼津の店を利用している。

2 トムライの儀礼

トムライ 葬式のことをトムライという。

お通夜 通夜のことをオツウヤといい、一晚中線香と蠟燭を絶やさないようにする。下モヨリでは僧侶による枕経があるが、念仏講による念仏はない。また病院で長く寝ていて亡くなった人は、家に戻って一、二日は寝かせておいてから通夜となる。

湯灌 湯灌は親子など主な身内や近所のおばあさんたちがやる。臭くなるので、現在は亡くなるとすぐに体を拭いてしまう。使った湯は外便所のオオドエに捨てる。

納棺 死装束は年寄りが一反の晒しで物差しを使わずに縫ったが、現在では葬具屋が用意してくる。納棺するときには旅支度で、着物のほか足袋と草鞋を履かせ、六文銭を入れた頭陀袋を下げさせる。棺には死者が愛用していたものや、一番いい着物を入れてやる。納棺は死者の子どもたちで行う。

出棺 僧侶が経を上げ、身内が棺の釘を打つ。棺をイマ(居間)に移して置き、その家の主婦が棺の上にお茶を出す。これをザシキでやる家もある。棺を担ぐのは家の中では親類の衆だが、玄関のカリモンから出てその先霊柩車まではアナツポリ(コシアゲともいう)が担ぐ。棺が出ると同時に、手伝いの女衆がミカゴ(またはメカゴザル)を足で蹴って部室を浄める。かつてはアナツポリが家の中からアシナカゾウリを履いて担ぎ出し、ヤシキの出入口でアシナカを

脱いだという。昼食は火葬場とる。

告別式（本葬）

火葬場から骨こつになって戻ってくると、ヤシキの出入口で塩で清めて家に入る。曹洞宗の場合、僧が三、四人来て経を上げる。経を上げ始めるとチカラモチ（力餅）を搗く。僧によって引導が渡されると、この後弔辞があり、施主の挨拶となる。そして野辺送りに出発するために葬列を組む。玄関に置かれたカリモンを潜つて、家を出る。葬列が建物の外に出てしまつてから、カリモンが葬列の最後尾につく。ジョウグチの中心に僧侶が三、五人立って経を唱え、葬列はその回りを左回りに三周回り、ハナカゴを振るつて金を撒く。この間オモチでは年寄りが御詠歌を唱えている。

モチツキ

チカラモチを係りが、告別式の経の最中に、臼と杵でなるべく大きな音を立てて餅を搗く。現在は一斗くらいしか搗かないが、かつては一俵くらい搗いたという。この餅はあんこ入りの大福餅で、悔やみに来てくれた人たち全員に配る。

アナツポリ アナツポリは四人で、墓地に酒一升（現在は三升）を持つていく。アナツポリは土葬時代の穴を掘る役割をいい、コウベなどが出てくるので酒を飲みながら掘つたものだという。これはなるべく若い衆がやる。またアナツポリはコシ（輿）も担いだ名残でコシアゲともいい、現在でも出棺の際には棺を霊柩車まで運ぶ役である。墓もカロウトになった現在では、穴を掘らず香炉を動かせば仕事は済み、骨を墓に納めた後石塔にヒヨケ（日覆）をかけてその役割は終わる。

なおアナツポリのことを穴を六尺掘るのでロクシヤクともいったが、この辺りでは下が岩盤なので六尺も掘れない。四尺の深さすら掘れないのである。石ばっかりが出てくるので穴掘りは苦勞したも

のだったという。その事情をしらない千福の人が富沢の人のことを愚図だと言つて、手伝いの人を怒らせてしまったというエピソードまである。

野辺送り

葬列の順序は次のようになっていいる。①提灯二人、②オオバタ（大幡）二人、③コバタ（小幡）二人、④リユウタツ（龍）二人、⑤ハナカゴ（花籠）二人、⑥施主花二人、⑦シカバナ（四化花）四人、⑧杖、⑨香炉、⑩棺服、⑪茶器、⑫野膳、⑬写真、⑭位牌、⑮コツ（骨）、⑯カリモン（仮門）、⑰墓標（墓のない家の場合）二人、⑱一般参列者、⑲⑳は身内の主な人がやる。なお墓標には六尺の白い晒しを巻いて二人で担いでいく。この晒しをロクシヤクといい、野辺送りが終わるとアナツポリが四人で分ける。

野辺送りは、葬列を組んで墓まで歩いていく。このとき決してお宮さんの前は通らないといい、これは喪がかかっている間中、身内は神社に行くことはできないと同様である。葬列にハナカゴがついている場合は、道の途中の三叉路（辻）で籠を振り銭を撒く。籠からお金がかぼれてしまうため、籠の後ろから袋を持つてついでいき、そこからお金を沿道の人々に分ける。このお金は長生きするとか、金が貯まるとかいって、財布の中などに入れておく。

墓につくとハタやハナカゴ、リュウ、カリモンなどを墓石の後ろに立て、提灯と杖を墓石の脇に立てて、ヒヨケを墓石の上に載せ、位牌、棺服、野膳、香炉などを墓石の前に置いてくる。親族は先に墓の入り口に立っていて、参列者に礼を言う。またこのときハマオリとキチュウの案内をする。

ハマオリ かつては黄瀬川の河原まで降りたが、現在では下に降りれないので小さいカワでハマオリ（浜降り）をする。墓が定輪

寺にある場合は公民館の前のヨウスイで、ヤシキ内にある場合はその近くのヨウスイで、野位牌を置き、石で五重塔を作り、参列者一人一人が位牌の頭に二本の笹でヨウスイの水をかけ、線香を一本ずつ供える。その場で酒を飲み、おにぎりやつまみを食べる。最後に若い衆が位牌などすべてを持っていて、オオカワ（黄瀬川）に流す（黄瀬川でやったときはそのまま置いてきた）。

キチュウ かつては施主の家でやったが、現在は公民館でキチュウ（忌中祓いのこと）をやる。キチュウの献立は豆腐のおつけ、煮出した茶の汁で炊いたチャメシ（茶飯）、冷や奴豆腐のほか、人参・牛蒡・里芋・アオイタの煮物の上にガンモドキを載せたオヒラ、うずら豆の甘煮、タクワンなどの漬け物である。また最近ではお刺身やイワシの生、サバの煮付けなども出す。キチュウでは飲み放題食い放題だったが、最近ではあまり飲まなくなった。キチュウはお手伝いをしてくれた班の衆も一緒にやる。このとき親戚の衆がお手伝いの女の衆に、エプロンや履き物を買ってお礼をする。お金でお礼をすることもある。

子どものトムライ 誕生日前の子どもが亡くなったときにはトムライをしない。

3 供養と祖先祭祀

葬後供養は、四十九日まで七日ごとに行われる。施主の家では祭壇に七本塔婆という七本の小型の塔婆を置き、それを七日ごとに裏返していく。とくにオヤネブツと関わって、丁寧な家では七日ごとの念仏を欠かさない。

墓参り トムライの後、墓がヤシキ内にある場合は毎日墓参り

に行く。

初七日 初七日のことをヒトナノカといい、墓参りをする。以降、フタナノカ、ミナノカ、ヨナノカ、三十五日、ムナノカ、四十九日となる。

四十九日 四十九日には、竹で編んだザル（イザル、籠屋で買ってくる）にヒノキの葉を敷いて餅を載せ、さらに大きな餅をその上に載せたものを寺に届ける。このセツトは、現在では菓子屋に詰めてもらう。また施主の家で僧侶に経を上げてもらい、夜には念仏講に念仏をあげてもらう。経を上げた後、班の衆を呼んで接待をする。かつては自宅で行っていたが、現在では料亭を使ってやっている。このとき男衆とアナツボリの四人には履き物（地下足袋・つっかけ・雪駄草履など）をお礼として上げる。また公民館にもお礼としてスリッパなどを寄付する家もある。

現在は四十九日が終わるとその翌朝葬具を片づけるが、本来はヒヤッカランチ（百日目）に片づけた。

オヤネブツ 亡くなった人の子どもが、四十九日までの七日ごとに持ち回りで念仏をあげることがオヤネブツという。下モヨリでは、二、三年前からやめてしまった。上モヨリでは亡くなると七日ごとに四十九日まで念仏をあげるとは今でも続いている。念仏は念仏講のおばあさんたちに上げてもらうが、その度に簡単な手土産を用意した。

このオヤネブツは嫁に行った先や二、三男のところでもやっている。初七日と四十九日は施主の家で行い、後は施主の家の都合のいい日に他の家でやる（施主が来ていろいろ手はずを整えてくれる）。念仏は戒名を書いた紙を白木の位牌に貼ったものを置き、写真も置

いてそこで供養する。この戒名の紙は僧にオヤネンブツをやりたいので書いてほしいと申し出て書いてもらう。また僧の方で施主側に聞くこともある。オヤネンブツといっても、故人の女衆の姉妹がやることもある。

ヒヤツカンチ 亡くなって百日目をヒヤツカンチといい、身内と班の衆で供養する。夜には念仏講に念仏を上げてもらう。念仏の後に、接待をする。この日に神棚を隠していた白い紙を取る。あるいはヒヤツカンチではなく、一年間喪中を守る家もある。

ネンカイ 年忌のことをネンカイ（年回）ともいい、イッスイキ（一回忌）、三、七、十三、十七、二十三、三十三、五十回忌とやり、五十回忌でトイバライをする。ネンカイでは僧侶に経を上げてもらい、親戚だけで飲食をする。四十九日と同様、かつては自宅でやっていたが、今は料亭でやっている。ヒキモノ（引き出物）のほか、酒、寿司、饅頭などを出す。このときは何月何日の夜にネンカイをするからと、念仏講も頼む。トイバライは葉を上につけたままの生の杉の木を削って塔婆を作り、墓に供える。これで仏は「神さん」になるという。

4 墓制

土葬 太平洋戦争前までは土葬だった。土葬は土葬許可書が必要で、鉄道から六〇間、人家から三〇間以上離れていないと土葬できなかった。棺はネセガンで、ガン（棺）とかハコとかいった。カロウトになる前は、石碑をよけてそこに穴を掘って埋けた。穴を掘ると以前に埋けたハコが朽ちていた。だから穴掘りには施主の家から酒を持っていったものだった。

土葬の時代でも伝染病でなくなるなど普通の死に方をしなかった人は、ヤキバ（焼き場）で焼いた。ヤキバには焼くのを専門にしている人が住んでいた。ヤキバは観音坂の方とツクリバの道の向こう（西）の二箇所にあった。ある時期に土葬から火葬に変えようとしたが、素人が焼くとうまく焼けないので土葬に戻ったこともあった。

火葬 戦争前後が土葬から火葬への過渡期だった。昭和八年頃に火葬をしたことがあり、戦後の昭和二〇年以降にも土葬をしたことがあるという。最初は富沢の観音坂のヤキバを使っていたが、そのうち佐野の二本松のヤキバがよく焼けるので、そこを借りて火葬した。富沢の共有物にコシ（輿）があり、それで担いで行った。途中から荷車（大八車）になり、後リヤカーで引いて持って行った。

この頃も葬列を組んで、提灯を下げてヤキバまで行った。この時代の火葬は一晚中かかったので、葬列はそこまで葬具をその場に置いてきた。ヤキバには六畳間くらいの広さで一間くらいの深さの穴があいていて、まずモシキ（薪）を下に並べ、その上にガンを置き、さらにその上にモシキを載せ、軽油をかけて燃やした。モシキのクヌギは施主の家で用意した。焼くのはアナツポリ（ロクシヤク）で、ヨッピで（一晚中）焼くので班のほかの人が酒や残り物のご馳走を持って行ってそれらを飲食しながら火の番をした。夜一〇時頃になると親戚が差し入れを持って来る。翌朝骨を上げに親戚と近所の衆だけでヤキバに行き、葬具を持って墓まで行った。

戦争後は三島市や長泉町下土狩のヤキバを借りて焼いた。葬具屋が共同で出資しあって購入したバスで三島まで行った。裾野の火葬場を使うようになって二〇年近くになるという。

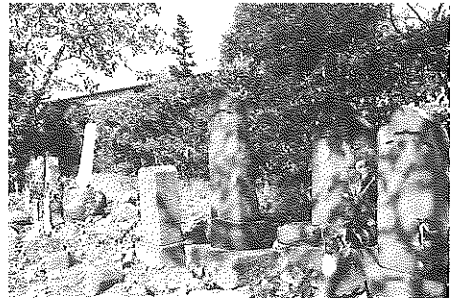
墓地 富沢の墓地はおおよそ三種類に分けられる。一つはヤシ



シモの墓

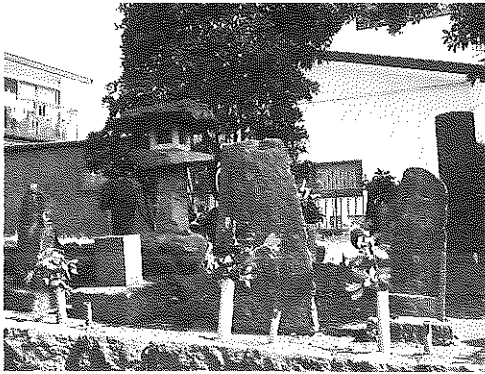
キ内にある墓地、一つはハラとかシモとか呼ばれている南のムラはずれの墓地、もう一つは定輪寺の山の墓地（地元では寺の墓地と呼んでいる）である。さらに定輪寺の墓地は二箇所に分かれていて、段の上にある墓地をカクガンボラといい、段の下にある墓地をカミナントウといっている。上モヨリのW・T家の墓はこのカミナントウにあり、フルシイ（古い）家の墓はカミナントウにあるともいう。富沢には共同墓地がなく、すべて各家で所有している墓地に埋葬している。また墓地が何箇所かに分散している家もあり、分散していた墓地をまとめた家もある。したがって、一概に富沢の墓制をいうことは難しいが、基本的にはヤシキ内あるいはヤシキに隣接している墓地が本来の場所であったようである。

屋敷地の墓地 富沢の草分けの家、あるいはその家の初期の頃の分家の墓地の多くは、ヤシキにある墓地が最も古い。この墓地にセンゾサンと呼ぶ墓を持っている家もある。しかし比較的早い時期に、定輪寺の墓地にも改めて墓石を建てており、センゾサンの墓は二箇所にある家もある。また本家と分家の墓が、同じ敷地の中で隣接している屋敷墓もある。



屋敷墓

シモ・ハラの墓地 富沢の旧戸の集落の南はずれにある墓地を、シモの墓地と呼んでいる。ここには日本家とその最初の分家の最も古い墓がある。またそのほか、多くの墓石がいくつかに固まってあちらこちらに分散しており、その向きも墓石群によってさまざまである。中には一基だけで建っているものもあり、イキヤクシさんと呼ばれる逆修供養塔もある。これらの墓はもととは散らばっていたが、パイパスを開通するにあたって現在の個人個人



日本家の墓



センゾサンの墓

の所有地に移転したという。また同様の墓は、数は少ないがハラと呼ばれる甲州街道沿いにもある。これも、個人所有の墓地ではあるが何軒かが固まって墓石群を作っている。

寺の墓地 定輪寺の山の右上方にあり、土葬時代にはここまでガンを担いでいったという。この墓地は富沢と桃園の人たちが主に使っている。日本家の墓地はここが一番新しいというが、W本家ではここが最も古い墓地であるという。

カロウト 昭和二七、八年頃カロウト（納骨室）が普及し始めた。それまでは火葬しても石塔がないので、骨を埋めたところの後ろに墓標を建てた。

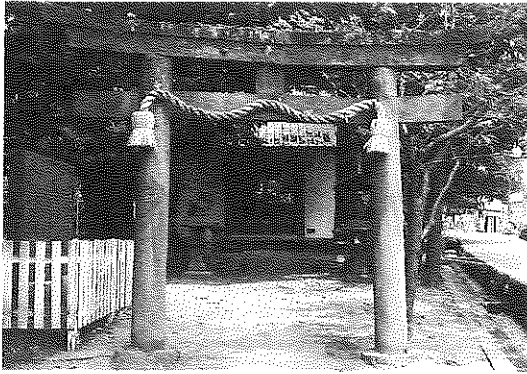
（松田香代子）

第四章 信仰

第一節 神社と小祠

(一) 富沢全体でまつる神

氏神 愛鷹神社 祭神は、天津彦彦火瓊瓊杵尊で、境内の「愛鷹神社改築記念碑」には、明暦四年の建立で、昭和四三年に改築したと記してある。



愛鷹神社

例大祭は、一〇月の未の日で、未の日が二回ある場合ははじめの未の日に、また三回ある場合はまん中の未の日に行ってきた。最近では第一日曜日にするにしている。

神主は、佐野の八幡宮の神主徳田修次氏が兼務している。

氏子総代は、筆頭総代が服部芳太郎氏で他に、下モヨリの西から渡辺昭相氏と

服部清一氏、中モヨリから服部素則氏と渡辺哲夫氏そして上モヨリから渡辺武彦氏が出ている。服部芳太郎氏は下モヨリの東である。下モヨリから三名、上と中から三名ずつ出しており、年ごとに下と上・中とが相互に当番町になる。

例大祭の日は、午前一〇時ころから神事が行われる。そのあと直会がある。供物は鏡餅、魚、酒、塩、水、果物、野菜、菓子、洗米、昆布などをあげる。費用は千三百円くらいずつ集める。その年の当番町が負担する。夕方から婦人会が中心となって屋台を出し、やきそばやおでんを売ったり、おもちやを売ったりする。花火をあげたり、カラオケをやったり、賞品のくじびきを売ったりする。

子供神輿が出て各地区をまわる。富沢のふるくからの家の子供たちの神輿と、南町の団地の子供会の神輿と両方が出る。家々では御祝儀のお金をくれたりする。

元旦祭は正月一日で朝一〇時ころから、筆頭総代の服部芳太郎氏を中心みんなで祝詞をあげる。みんな初詣でにやってくる。

(二) 地区ごとにまつる神

1 上モヨリで祀る神

山の神 集落の北方の山へむか、う三叉路の所にまつられている。祭神は須佐之男命でそのひげを植えたのが杉になり、すね毛を植えたのが松になったのだという。もと渡辺武彦家が個人でまつっていたものであるが、現在は上モヨリの家々で順番に当番をつとめてまつっている。一月一七日と九月一七日が祭日で、この日には山に入つてはいけない。山の神は荒い神様でこの日に山へ入ると怒るといふ。ヒョウゴ（掛軸）をかけ、お神酒、餅、ごはん・野菜の煮物な



上モヨリのサイノカミ

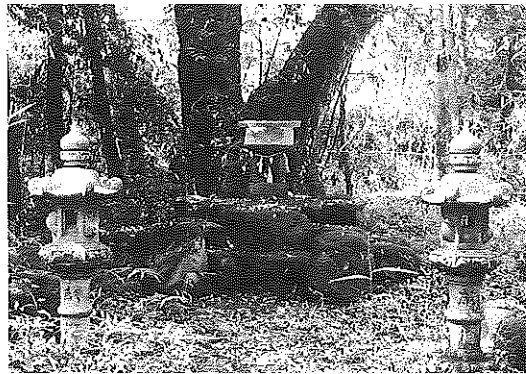
り病いや悪い人間が村内に入って来ないように入口を守っていた。正月の飾りや古くなった達磨像やお札などをそこへもっていった。正月一四日に焼いた。



上モヨリの山の神

どの供え物をあげておまいりする。このとき弓矢もつくる。当番の家で夜にはオハライコウといってみんなで飲み食いをする。翌日はヤヒロイといってお札参りする。

さいの神 集落の東の入口の道路のそばにまつられていた。今、バイパスがついて場所が移動してわかりにくくなっている。はやり



中モヨリの山の神

2 中モヨリで祀る神

山の神 集落の西方の山の中へ入ったところまつられている。もとは、現在公民館が建てられている所に屋敷のあった浅倉安太郎

家（現在は絶家）の個人の山の神であつたが、中モヨリでまつるようになった。

もう一五、六年も前のことである。しかし、現在ではとくに目を決めて盛大に飲み食いをするのではないようである。

さいの神 公民館の横にある。現在ではとくにこのまつりはしていないようである。

3 下モヨリで祀る神

山の神 集落の西方、遠く離れた山の中、現在ではやや大きな道路が横につけられているが、その山の中にまつられている。もと服部房太郎家（現在の当主は鈴子氏）が個人でまつっていたものであるが、現在では下モヨリの在来戸一六戸のまわりもち、つまり当番でまつっている。一月一六日が宵祭り、一七日が本祭りでは酒とつまみ程度であるが、むかしは赤飯、煮物、味噌汁などでみんな



下モヨリの山の神



下モヨリのサイノカミ

で飲み食いをした。九月にはこの山の神のまつりはしない。

さいの神 集落の中の三叉路のところにあつられている。石製の

人形像で、一体には「寛延二天巳十月四日」とあり、もう一体には「文化七庚午年十一月再造也」とある。ここには、年末には古いお札などを納め、また、正月のお飾りを集めておき、一月一五日のドンド焼きで焼く。

第二節 寺院と堂

(一) 寺院と檀家

富沢には寺はなく、全戸ともに桃園の曹洞宗定輪寺の檀家になっている。檀家の筆頭総代は服部芳太郎氏がつとめている。渡辺武彦家も代々檀徒総代をつとめている。定輪寺は大きな寺で、三島、沼

津、御殿場方面にも檀家があり、六〇〇戸ぐらいはあるという。も
と真言宗であったのが曹洞宗へ転宗したものだともいう。

むかしは、檀家は一年に米一升を寺に納めたものだが、今ではお
金で納める。戒名によって差があり、院居士だと五万円、居士三万
円、上座二万円、信士一万五千元という。

葬式には方丈と四人ぐらゐの役僧が来てくれるが、葬儀費用は裾
野市の仏教会の決まりがありかなり高額になるといふ。たとえば、
院居士で戒名を含めて方丈に七〇万円から一〇〇万円、役僧一人に
五万五千元ずつ、戒名が居士だと四〇万円から五〇万円、上座だと
二五万から三〇万円、信士だと一五万から二〇万円だといふ。その
他に、お通夜のお経に三万円、出棺時のお経に一万円、四九日の法
事には院居士五万円、以下四万、三万で信士が二万円、お盆の棚経
が院居士一万円、以下五千元、四千元、三千元、塔婆代が一本二千
円である。そんなわけで、お金のことを考えるとそうかんたんには
死ねないといふ。

ふだんの盆の棚経には定輪寺の末寺の僧が来てくれるが、その年
に葬式のあつた家へは定輪寺の方丈が来てくれる。

定輪寺の年中行事は次のとおりである。

一月一日 新年法会

二月十五日 釈迦涅槃会

三月一八日〜二四日 春彼岸会

四月八日 釈尊降誕会（花祭）

四月二十九日 大般若祈禱会

七月一三日〜一五日 お盆会（沼津・三島）

七月二三日〜二五日 お盆会（御殿場）



尼寺跡の石仏

庵寺 愛鷹神社の北方の小高い丘の急な石階段をのぼっていった上の平らな場所にもと庵寺があった。草屋根だったため花火の火

むかしは、お産などで亡くなる人がたくさんいた。それで年寄りが杉田の子安さんを遷してきてまつるようになった。安産の神さまで、そうしたらお産で亡くなる人がいなくなったという。



子安さん（富沢公民館）

あげる。とくに自分の家で娘や嫁にお産のある人は願をかける。安産のお願いのお経をあげて、ぶじに生まれるとお赤飯やお団子を供えておはたしをする。ふだんは、上、中、下と順番に一戸ずつ当番

七月三〇日 山門大施餓鬼会
八月一日〜三日 お盆会（裾野・上土狩）
八月三日〜五日 お盆会（裾野・長泉）
九月二〇日〜二六日 秋彼岸会
一二月八日 釈尊成道会
一二月三十一日 除夜法会

(二) 堂

富沢公民館 もとはここはお堂だった。今も中に、釈迦、阿弥陀、弘法、子安地藏、観音、ガキ婆さんの、それぞれの像が安置されている。弘法さんの縁日が二月二日、子安さんが三月一〇日である。

の粉が落ちて火事になってしまった。昭和五九年ころのことである。いまはない。山ののぼりくだりが年寄りには大変で、仏像は早くに公民館に移していた。墓石もいくつか運び去ったが、まだのこしてあるのみみられる。むかしは、毎月一〇日と一七日の夜にこの庵寺に年寄りが集まって念仏をやっていた。
庵寺さんは定輪寺の御隠居だったとか、定輪寺の隠居寺で囲いばあさん（庵主さん）がいたとかいわれる。

(三) 講

子安さん（淡島講） 毎月一〇日に老人クラブのお婆さんたちが公民館に集まっておつとめをしている。午後一時からお経を

がきまつていて、お菓子、お茶、線香、花などを用意する。むかしはお団子も用意した。

観音さん 毎月一七日がお観音さんで、団子、線香、ローソク、花などを用意する、子安さんと同じように上、中、下と順番に一つずつ順番に決まっている。公民館に集まっておつとめをする。

公民館には、真中がお釈迦さんで左右に薬師、大目、そして観音さんなどが安置してある。いちばん左にあるのは風の婆さんといっている。一番右が子安さんである。

ヒネンブツ（日念仏） 服部きよさん（明治三五年生）の親のころには盛んにやっていたらしい。土用の中の都合のいい日に念仏のおばあさんたちがお堂に集まり、おてんとうさんが出るときから入るときまで、かわりばんこで念仏を唱えながら鉦を叩いた。食事のときにも絶やさないようにした。太陽の方向へ向きをかえながら、最後は西の方へ向いてあげた。おてんとうさんへ果物、線香、団子、菓子などを供え、終わるとみなさんでいただいておわかれにしたという。

現在では、七月の最後の日にやる。公民館の二階を使っている。ヒネンブツのお唱えは、

おんまか きやろに きやそわか
おんあんちゃあ そわかー
おんあらりきや そわかー
などというものである。

不動さま 集落の西方にやや離れた所に涌水と滝があり、その滝の上に不動さまのお堂がある。毎年三月二十八日が不動さまの日で、上、中、下の東、下の西と順番に当番が決まっています、赤飯、酒、



不動尊

にんじん、ごぼう、里芋などの煮物、餅などのごちそうを作る。おじいさんやおばあさんが多いが、みんなでお堂で不動さまのお経をあげる。むかしは、全部の家から集まった。子供たちは赤飯やお菓子などをもらった。お堂で飲み食いをする。また、不動さまのお堂は高いところにあつて高齢者は登れないから公民館でも直会をする。不動さまは水の湧いている所でまつり、火の神だともいう。また寝小便の神さまだともいう。子供の寝小便がなれるようにと願をかけ、願はたしには四角い薦（こも）を藁で編んであげる。

ここで雨乞いをしたこともあつたという。

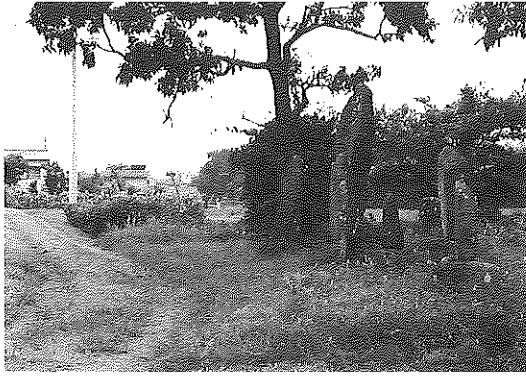
大師講 むかしは毎月二〇日にやっていた。ほとんどの家が入っていた。当番の家が集まり、十三仏の掛軸をかけて念仏をあげ鉦を叩いておつとめをした。葬式が出た時にはこの大師講の者たちが初七日と四九日の法事のために念仏をあげてくれる。上モヨリでは二月が初講で、年に四回、四月、七月、一〇月（十一月のこと）

の二〇日に現在でも行っている、中モヨリも下モヨリもそれぞれでやっている。

秋葉講 清水市にある秋葉神社に代参する講で、毎年一二月半ばに代参者がまいてきて、当番の家でおふるまいがある。

大山講 むかし、二月の節分に代参をしていた。最近はあまりやっていない。

庚申塚 バイパスの西側に、並行するように畑地の間を南北に小さな道が通っている。これを土地の人は甲州街道と呼び、そのあたりに木立ちと草むらの中に唯念名号碑をはじめ数基の石造物が建っている区画がある。そこを庚申塚という。現在ではとくに何かまつりの対象となっていないわけではない。ここを通る甲州街道は裏街道だといひ、この道を通ってむかしは法印さんが年に一回春に来た



庚申塚

という。法印さんが来ると、家々では子供をおぶっていき、子供のおはらいをしてもらったという。法印さんは、千本浜で浜降りするたれに通った。法螺貝を吹きながら三人くらいでやってくるが、馬方がついていて馬に乗ってきた。また、庚申塚はもと極楽寺跡で、極楽寺の上の田んぼは処刑場跡だったといひ、その田んぼを作ると人が死

ぬので縁起が悪いという。

第三節 家ごとにまつる神仏

服部芳太郎家の例

神明さま 屋敷から離れた北方の道路脇の自分の家の土地にまつてある。一月二三日がまつりの日でかんたんな供物をしている。

観音さま 屋敷の中にある。毎月一日と一七日に線香をあげお経をあげている。

屋内の神々 座敷の神棚に、新田さん(ニタンのシロウともいふ)、大神宮さま、金比羅さん(これは安政のころ、この家の者が四国遍路に行つてうけてきたという)をまつており、毎朝、水とおひかりをあげている。

台所とお勝手に、恵比寿、大黒と荒神さまがまつてあり、毎月、一日と一五日におひかりをあげている。恵比寿、大黒は旧暦一二月二〇日が恵比寿講の日で、赤飯、大根などの煮物、お頭付きの魚などを供え、下げて家内で食べる。屋内の神々は、正月や愛鷹神社の祭りの日などはみんないっしょにお供え物をする。

(新谷尚紀)

附録一 富沢・渡辺家文書1

宿屋山王前

知八郎

(表紙)

安永六丁酉年
駿及駿東郡富沢村明細帳扣
八月

(本文)

八拾年以前元禄十一寅年六月
當地頭へ相渡り申候

秋山十右衛門知行所
駿州駿東郡 富沢村

百六年前寛文十二年六月

坪田与太夫様

鈴木久右衛門様

御檢地

御水帳式冊

一 高八拾壹石式斗三升壹合 田畑屋敷高共

此反別拾九町四反九畝拾壹歩 右同断

此訊

田反別拾貳町四反五畝五歩

此分米三拾六石五斗三升壹合

畑反別六町四反四畝拾歩

此分米三拾八石三斗壹升三合

屋敷五反九畝貳拾六歩

此分米五石九斗八升七合

盛十四

一 上田四町四反四畝貳歩

此分米六拾貳石壹斗六升九合

(表紙裏)

後年之覚

一 左之通御用被仰付此節名主病氣ニ而 出勤難相成候ニ付組

頭共立會下ケ書ニ 随ヒ趣意書仕酉八月六日御日限ニ而 則

組頭共立相詰候而 御吟味奉請并 安永元辰与去申年方御定

免割守写別紙相添是又御糺有之首尾能差上申候右明細帳

之内御下書無御座候故申上落可有之乎

一 御国金之事 一朝鮮人琉球人御役并 船橋之懸小林陣屋割

掛り

右之分當村不奉申上候尤村ニ不同有之申上候村方も有又

ハ不申上候村方有之候

一 御用御宿之儀ハ沼津山王前於普門寺御吟味有之差上申候

出役 庄右衛門

小左衛門

盛十二

一 中田貳町八反七步

此分米三拾三石六斗貳升八合

盛十

一 下田壹町三反貳畝拾四步

此分米拾三石貳斗八升

盛八ツ

一 山田九反五畝拾三步

此分米七石六斗三升五合

一 見取下田五反四畝拾四步

此分米四石三斗五升七合

盛八

一 上畑田成四反拾八步

此分米三石貳斗四升八合

盛七ツ

一 中畑田成壹町貳反拾六步

此分米八石四斗三升七合

盛五ツ

一 下畑田成七反壹步

此分米三石五斗貳合

盛四ツ

一 新下畑田成六畝拾四步

此分米貳斗五斗九合

盛三ツ

一 新下畑田成拾六步

此分米壹升六合

畑反別六町四反四畝拾步

此分米三拾八石三斗壹升三合

盛八

一 上畑壹町七反四畝三步

此分米拾三石九斗貳升八合

盛七

一 中畑壹町三反壹畝拾步

此分米九石壹斗九升三合

盛五

一 下畑貳町貳反壹畝貳拾步

此分米拾壹石八升三合

盛十

一 屋敷五反九畝貳拾六步

此分米五石九斗八升七合 但畑高外也

盛四ツ

一 新下畑五反九畝五步

分米貳石三斗六升七合

盛三ツ

一 新下畑五反八畝貳步

分米壹石七斗四升貳合

右之内

一 高四斗

山手高 但シ元禄十一寅年給知渡之節本高詰ル 尤山林高共

右之外新田等ハ無御座候

一 見付畑 無御座候

一 拝借 無御座候

一 薪秣蒭敷 愛鷹山之内并内林ニ而蒭取申候

一 此山手役米式斗宛差上申候

一 是ハ当村方入会场所江八拾町餘方壹里半程茂御座候

一 但入会村方 大畑村 富沢村 一色村右三ヶ村山本村方御座候

一 付郷村々ハ

一 水窪村 上土狩村 納米里村 中土狩村

一 下土狩村 竹原村 本宿村 長沢村

一 八幡村 伏見村 新宿村 柿田村

一 右拾五ヶ村一統ニ入会来申候

一 御傳馬 宿入用差出来不申候

一 高百石ニ付永式百五拾文 小揚代と申候而上納仕候

一 是ハ河岸場方之車力由ニ而差上申候

一 御六尺給 卜申候ハ無御座候

一 御蔵前入用 卜申ハ無御座候

一 芝地野永 と申も無御座候

一 字丸山

一 地頭林 壹ヶ所

一 壹町四反六畝式拾歩

一 是ハ雜木林ニ而六年以前ニ御拂ニ相成故小木有之候

一 百姓持林 五拾四ヶ所

一 此町歩合拾八町四反式畝九卜

一 右林之儀ハ雜木林ニ而松苗木拾ヶ年前後ニハ伐取猪鹿除并猪

一 小屋等致入用又ハ薪伐取三嶋沼津へ売出あるひハ肥炭木等成

一 シ申候

一 是ハ古来方百姓分仕立御田地貯之ためニ仕候事ニ御座候御檢地に茂御構無御座候段元禄十一寅年七月御改故林帳面差上申候

一 御林守 無御座候

一 御拾分一上納物 無御座候

一 万浮役 無御座候

一 鉄炮役 無御座候 但山附村故為猪鹿防威筒三挺古来方所持仕候

一 久藏

一 持主 藤右衛門

一 元右衛門

一 河原役 無御座候

一 芦野 無御座候

一 立敷 無御座候

一 萱野之儀ハ愛鷹山之内右拾五ヶ村入会野ニ少；御座候

一 餅米納之儀ハ御年貢之内ニ御座候

一 大豆納小豆納等無御座候

一 御年貢米之儀ハ壹俵三斗五升

一 斗立四斗入ニ仕候

一 但内米五升ハ口米郷米御蔵前入用等ニ納来申候

一 御年貢津出之儀ハ沼津河岸問屋迄附送陸地三里然共山家道故駢

一 相知不申候古来之申傳を以申上候但船路之儀ハ湊方江戸へ八十

一 式里

一 御年貢米欠米前々方相添相廻不申候并御より米御入替米納不足

等之儀ハ相納不申候

一 御年貢金小物成納方日限無遅滞上納仕候尤例年格を以御下知以前百姓^諸口^諸數申渡支度為致置御日限通取立上納仕来申候

一 用水堰 入口巾九尺 壹ヶ所

是ハ木瀬川ニ而宇富沢堰と唱 定輪寺村 富沢村 一色村右三ヶ村組合ニ而用水引取申候 右普請之儀は三ヶ村高七拾六石式斗六升 此高割以人足入用等出之仕来申候 右井筋間數 堀抜分合式百五拾四間

割堀分合百六拾八間

合四百式拾式間

但シ定輪寺村御高札場迄此所^ト

富沢村境迄百九拾間

富沢村上^ト一色村境迄三百八拾間

間數合九百九拾式間

当村組合高式拾九石八斗五升三合

此懸出役分 竹八拾式本 但六寸廻人足百拾九人

右堰入用之儀ハ前^ト相定候儀ニ御座候

右井組村方式拾九ヶ村高六千八拾七石余之懸合御座候

川丈之儀ハ

一 箱根湖水堀抜 井口 中^ト式間 壹ヶ所

割堀 五拾四間 堀抜 七百式拾間

深良村 須釜新川土手 五百間

是ハ用水組合式拾九ヶ村^ト而年^ト自普請仕候尤大普

請ニ御座候得ば御地頭^ト拜借等仕候儀も御座候

木瀬川へ箱根湖水深良村ニ而落合申候

川丈 是ハ水元大久保加賀守様御領分岩波村地先西川東川両

川落合狩野川へ流申候川除普請等之儀ハ今迄無御座候

一 用水^ト配人

御宿村 名主 半右衛門

上役三人 ニツ屋新田 同 佐五兵衛

中土狩村 同 勤兵衛

千福村 百姓 惣七

下役三人 茶畑村 同 三郎兵衛

下土狩村 組頭 三右衛門

是ハ上役三人給扶持年中耆人ニ付三人扶持下役耆人ニ付金式兩ニ相定、井組式拾九ヶ村用水高割以差出来申候

右水配人定之儀ハ用水御支配大久保加賀守様へ井九ヶ村以相談御願申上候得ハ井組御地頭様方と御相談之上御究被遊候御儀ニ御座候

一 上堰 長三百六間 壹ヶ所

当村山沢地水懸 高百拾六石七斗壹升式合

同断

一 下堰 長式百五拾四間 壹ヶ所

同断

一 河内堰 右三ヶ所此人足五拾式人 壹ヶ所

惣堰人足合百七拾壹人

惣堰人足合百七拾壹人

内四拾五人 村役引

残百貳拾六人此御扶持米方米六斗三升但壹人ニ付五合

宛

竹 八拾貳本 此御米三斗貳升

但六寸廻

右之通御定有之前、方御皆済目録之内御引落被下置候尤御料所
之節方頂戴仕来申候

一 川除堰等ハ 無御座候

一 石出 無御座候

一 蛇籠 五間籠五ツ 此竹百本 但六寸廻

三間籠四ツ 此竹五拾本 同断

貳間半籠六 此竹五拾本 同断

是ハ富沢堰井口普請方 但籠作等ハ右人足之内ニ而仕候

右三ヶ村割合前書之通御座候

一 石橋 中三尺 貳ヶ所
長五尺

是ハ用水堀ニ掛置通用仕、尤古来方自普請ニ仕候

御年貢米三斗五升斗立四斗入仕出目米相納不申候

御年貢米三斗五升斗立四斗入ニ仕口米等相納不申候

但山手役米口米出目米上納不仕候

一 当村 大凡 東西 壹町余
南北 六町余

隣村ハ 東ハ 二ツ屋新田 西ハ 愛鷹山

北ハ 定輪寺村 南ハ 一色村

但 富士山ハ 戌亥方 愛鷹山ハ 未申方

天城山ハ鷲頭山 己午之方

一 当村方

箱根山ハ 卯方 海辺ハ 未ノ方

江戸迄 陸地貳拾九里 海辺沼津湊方八拾貳里

但 東海道ハ三嶋宿へ出申候道法式里甲州道近道ハ無御座候

駿府へ 拾七里半

清水へ 拾四里

沼津へ 三里尤山家道故致駢候儀ハ難相知古来之申傳

以申上候

沼津宿へ九月廿一日方晦日迄之内駿府御番衆方御通行之節右以
高人馬相勤申候外様御通行ハ相勤不申候但年季年季助郷と申ニ
而も無御座候

村内渡船 無御座候

往還掃除場 無御座候

御朱印高 無御座候

下田 壹反四畝壹歩

御除高 下畑 壹畝九分

分米壹石四斗六升八合

是ハ氏神愛鷹大明神、領ニ御座候

名主 壹人 給分引高貳拾壹石

組頭 貳人 給分高引拾石

高札場 壹ヶ所

米見 壹人 御藏納之内相勤申候

舂取 壹人 右同断 給分

御米貳斗

一 郷藏番人 壹人 右同断 給分

但御藏納初日御藏拂迄之内相勤申候尤年之内ニ御藏拂有之候

一 寺 一 医師

一 山伏 一 浪人

一 大工 一 木挽

一 桶屋 一 ゴゼ

一 座頭 一 穢多

右之類当村ニハ無御座候

一 非人 貳人 内 壹人男 壹人女

一 御借附鉄炮 無御座候

一 酒屋 無御座候

一 牛馬 拾疋

尤年、増減有之候牛ハ一切無御座候

是ハ牛馬両筆ニ有之処下書ハ筆違ニ而相認申候尤御本紙ハ兩

筆相認申候

一 土地ハ 砂地石交リ

一 田作ハ 五月節頃ハ植始中之頃迄植仕廻申候但稲作ハ早稲中

稲ヲ仕附申候

但秋ハ早稲ハ九月節頃ハ苜初、中過頃迄ニ苜仕廻収納仕候

一 田方種入

但 壹反ニ付粃壹斗上中下共ニ下シ申候尤土地ニハ多分ニ下シ

候得共急度難申上候

一 田方麦種 壹反ニ付 大麦壹斗貳升

一 畑方種 壹反ニ付 小麦六升

一 田畑小作入上

壹反ニ付 上田ハ 三俵三斗

中田ハ 三俵壹斗

下田ハ 貳俵三斗

余ハ是ニ准候儀ニ御座候

但右之内五分通御藏納仕候

一 畑方入上 壹反ニ付 上畑ハ 錢貳貫文

中畑ハ 錢壹メ八百文

下畑ハ 錢壹メ五百文

餘ハ是准候儀ニ御座候

如此相定候得共山方故ニ猪鹿防之難場ニハ高下御座候

一 田畑屋敷質入

上田壹反ニ付 金貳兩ハ壹分迄

中田壹反ニ付 金壹兩貳三分

下田壹反ニ付 金壹兩壹分

上畑壹反ニ付 金三分

中畑壹反ニ付 金貳分貳朱

下畑壹反ニ付 金貳分

屋敷壹反ニ付 金三兩

大麦 小麦 大豆 小豆 粟

稗 菜 大根 此外ハ作不申候

くろわせ 上方わせ 曾我わせ

八こく びぜん ことがさ 此内びぜん八こく

多分作申候

外ハ少々之儀ニ御座候

一 田畑肥 耆反ニ付 田方ハ 苜敷拾駄馬屋肥拾駄宛仕候

尤馬無之者ハ馬ふん其外心掛相当仕様仕候

畑之儀も右ニ准仕候

一 作業之間 男ハ薪伐出シ三鳴沼津へ売出渡世助ニ仕候

女ハ太布等を織又ハ薪等取候迄御座候

一 百姓夫食 麦第一仕 粟稗 芋 蕎麦 菜 大根 蕨ニ仕身

命相立申候

一 原地芝地空地 無御座候

一 田畑見立新田可致地 無御座候

一 家数 二十八軒 内 拾六軒ハ 小百姓

拾貳軒ハ 水吞

外ニ

一 禪宗庚申堂 尅軒 定輪寺末庵

一 浄土宗地藏堂 尅軒 村支配

一 人別百三拾九人 内 男七拾人

女六拾九人

右者御尋ニ付今般委細相改書上申所相違無御座候 以上

安永六酉年八月

秋山十右衛門知行所

駿州駿東郡 富沢村

名主 嘉六

組頭 源七

同 小左衛門

百姓代文藏

内藤源八郎様

栗原禮助様

附録二 富沢・渡辺家文書2

(表紙)

書上

駿河国駿東郡

富沢村

水野出羽守領分

駿河国駿東郡

富沢村

一高百八拾石八斗三升壹合

一家数三拾六軒

但シ新田枝郷無御座候

一村長 東西三町拾貳間 南北拾壹町五拾壹間

内 六町五拾五間 居村

四町五拾六間 野間

一村内御測量道筋 九町五拾貳間

但シ一色村境方定輪寺村境迄

内 五拾間 家居村

九長貳間 野間

内壱町四拾間之間 東ハ一色村

西ハ当村

但シ村中家居方東之方凡貳町野間隔り申候

是ハ沼津宿方深山通街道ニ御座候但駅場ニ而も立場ニ而も無

御座候

同州沼津城下迄凡三里

豆州三嶋明神前迄凡貳里余御座候

一当村隣村 東ハ同州ニツ屋新田家居方凡壱町此間木瀬川

西ハ愛鷹山居村繞山嶽迄凡三里余

南ハ同州一色村家居迄凡方凡拾町

北ハ同州定輪寺村家居迄子ノ方凡五町

辰巳之間水窪村家居迄凡八町

一東ノ方木瀬川

但シ川上富士山裾野方流出深良村ニ而宮根湖水と落合川下木

瀬川村ニ而狩野川江落合申候

一御朱印黒印 無御座候

一寺 無御座候

一禪宗庚申堂老間 定輪寺末堂地御見捨

一浄土宗地藏堂老間 村持辻堂庵地御見捨

一鎮守愛鷹明神森 社地御見捨

除地高老石四斗六升八合 宮守平左衛門

右愛鷹明神領ニ御座候

一明神森 社地御見捨御除地無御座候

一山神森 社地御見捨御除地無御座候

一名所旧跡古城地等 無御座候

富士山戌亥之間凡五里余

愛鷹山申酉之間嶽迄凡三里余

一 遠山見渡 天城山巳午之間凡八里余

鷲津山巳午之間凡二里半

宮根山ハ卯之方凡四里

右之通り相違無御座候 以上

文化十三年二月

駿河国駿東郡富沢村

名主 勇藏 印

組頭 平左衛門 印

同 文助 印

百姓代 藤藏 印

附録三 富沢・渡辺家文書3

相定申證文之事

一貴殿從弟安八郎殿我等智遺跡ニ貫申候私金として小形金八兩健ニ
請取申候安八郎殿家持セ申候時今ハ我等持高四石式斗三升四合此
反別下田菘反九畝拾六歩上畑菘反廿九歩中畑菘反式畝五歩下畑六
畝拾六歩屋敷式畝拾式歩林七ヶ所ふ残相渡シ可申候尤家財諸道具
等共ニ可申相渡シ可申候其節我等借リ金少モ安八郎殿ニ掛ケ申間
敷候田畑家財等ニ至迄脇カ少モ構申者無御座候但シ我等夫婦之儀
一生安八郎殿ニ掛リ居可申候万一不縁之儀も御座候ハ私金少も
無滞リ返進可仕候為後日證人立手形依如件

享保元年申八月廿日

大畑村

名主 希兵衛

㊦

證人 甚兵衛

同 宇兵衛

同 四郎兵衛

㊦

富沢村

同 庄兵衛

富沢村

忠兵衛殿

附録四 富沢・渡辺家文書4

乍恐以書付奉申上候

一 薩摩芋 當村大積畑三反歩余

但 畑壹反ニ付出来方中年拾五俵程米俵ニ入土芋ニ而拾貫目程

當年壳渡直段壹箕百七拾式文位

右此度薩摩いも作出方御尋ニ付当村中小前少、つ、夫食ニ作出申候分相改奉書上候尤百姓方夫食之助ニ宣敷品、御座候得共諸作之内分テ猪喰荒シ申候当年杯ハ別而夥敷猪喰荒シ申候而跡蒔付申候表迄此節堀リ返シ而作荒シ申候得者自然と相止ミ可申哉ニ存度候当年作方之方大積リを以乍恐奉書上候以上
寛政五_丑年十一月

富沢村

組頭 儀左工門

同 助左工門

百姓代文藏

沼津

御役所

編集後記

民俗調査報告書の刊行は、この「富沢の民俗」をもって終了します。これまでに「葛山の民俗」・「深良の民俗」・「茶畑の民俗」を発売してきましたが、この間、各地区で多くの市民の方々の協力をいただき、あらためて感謝申し上げます。

裾野市は旧五ヶ村の合併によって出来た市ですが、今日、生活様式の合理化・画一化によって各地区の特色が薄らいでいます。しかし、発売してきた報告書を改めて読み直してみると、依然、その特色が残されていることに気づきます。たとえば、私の生れ育った深良と、黄瀬川を越えた富岡地区とではお盆の月が、深良では八月一日、富岡では七月二四日と八月一五日というように異っています。また、私が幼い頃、富岡側で何か事故が起こっても、「火事は川向うだ」といって関心が薄かったような気がします。黄瀬川は川巾が広いところでも五〇メートルもない川ですが、川が一本流れているだけで生活の中の行事や神事等が異なっているのは当たり前かも知れません。

最近は何顧趣味というか、昔の祭り等の行事を復活する動きが各地で活潑です。すべて昔の生活が良いというわけではありませんが、残すべきは残していかなければならないでしょう。私ども市史編纂を担当している者として、裾野の生活文化や習慣をいかに伝え残していくか、また、祭り等の風習の復活に役立つことが出来るかを考え、一層の努力をしていきたいと思えます。

民俗の調査報告書の刊行は本書をもって終了しますが、今後は「資料編・民俗」の発刊に向けて、多少の補充調査を必要とします。調

査委員が各地区に伺った節には、皆様方の再度のご協力をよろしく
お願いいたします。

裾野市教育委員会

市史編さん室長

藤森 秋親

裾野市史編さん関係者

市史編さん専門委員

代表 有光 友學

高橋 敏 横浜国立大学教育学部教授
国立歴史民俗博物館教授

中野 國雄 日本考古学協会会員

福田アジオ 新潟大学人文学部教授

安田 常雄 電気通信大学教授

四方 一瀨 国士館大学教授

市史編さん調査委員

厚地 淳司 静岡県立沼津東高等学校教諭

井口 俊靖 加藤学園暁秀中学校教諭

石田 義明 静岡県立韭山高等学校教諭

伊東 誠司 一橋大学大学院社会学研究科博士課程

岩崎 信夫 都立目黒高等学校教諭

岩田 重則 早稲田大学大学院文学研究科博士課程

菊地 邦彦 都立航空工業高等専門学校助教教授

齋藤 弘美 日本民俗学会会員

坂本 紀子 早稲田大学大学院文学研究科博士課程

柴 雅房 静岡県立沼津城北高等学校教諭

新谷 尚紀 国立歴史民俗博物館助教

杉村 齊 三島市教育委員会三島市郷土館々長

瀬川裕市郎 沼津市歴史民俗資料館学芸員

関根 省治 静岡県立富士宮北高等学校教諭

西川 尚男 沼津市立長井崎中学校教諭

仁藤 敦史 国立歴史民俗博物館歴史研究部助手

東島 誠 東京大学大学院人文科学研究所博士課程

松崎 真吾 神奈川県地域史研究会会員

松田香代子 日本民俗学会会員

宮村田鶴子 日本民俗学会会員

湯川 郁子 一橋大学大学院特別研修生

地区協力委員

(旧村名)

西地区 植松甲子男 石脇村

同 杉山 光正 佐野村

同 加藤 信雄 大畑村

同 水口 清文 二ツ屋新田

同 歌崎 久作 定輪寺村

同 田口 勝夫 富沢村

同 水口 忠栄 伊豆島田村

同 関野 政雄 水窪村

同 中西 保男 二本松新田

東地区 杉山 繁雄 久根村

同 藤原 善次 稲荷村

同 清水 四郎 茶畑村

裾野市史調査報告書第五集

富沢の民俗

平成七年一月三十一日

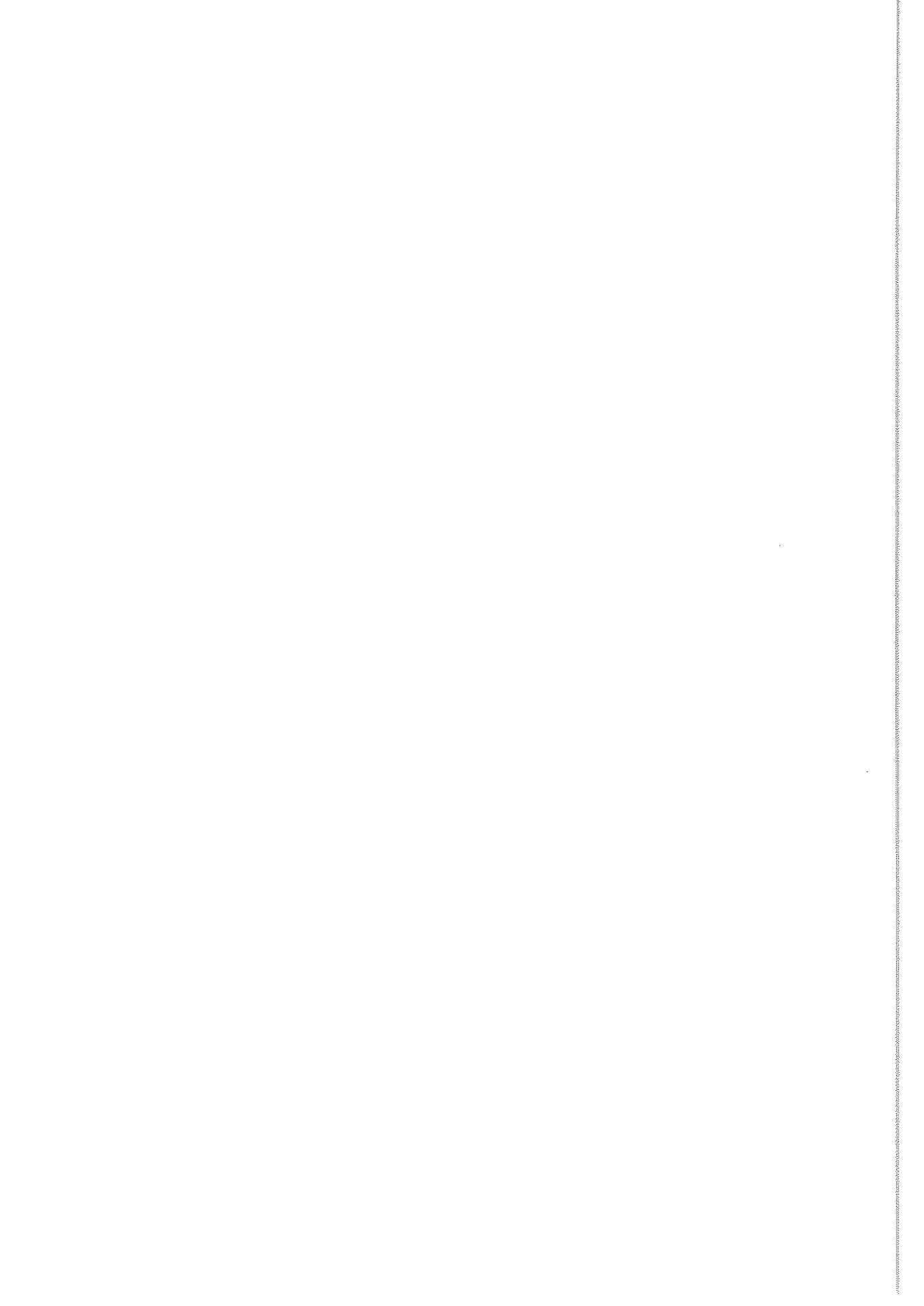
編集 裾野市史専門委員会
発行 裾野市教育委員会市史編さん室

裾野市茶畑三九九
電話 〇五五九―九三二七―七〇

印刷 株式会社 アイピー

題字 裾野市史編さん委員会副委員長

勝 又 壽



〈む〉	
迎え盆	75
麦作	63
ムキアザシキ(ムカイザシキ)	27
ムコイレ	86
武者絵	75
ムラシンセキ	44, 45
ムラの境	49
ムラの広場	51
ムラの寄合	54

〈も〉	
モシキ(燃し木)	15, 16, 40
モジリ	70
モズ	35
モチツキ(餅搗き)	31, 77, 89
もちまき	38
桃園(定輪寺)	89
モヨリ	10
45, 48, 50, 52, 58, 59, 60, 80, 89	
モロコシ	17
モロバコ	70

〈や〉	
家移り	41
ヤキゴメ	65
ヤキバ(焼き場)	8, 59, 93
ヤキバユキ(火葬場行き)	89
ヤキパン	67, 68
役員	53
厄年	88
ヤクバユキ(役場行き)	89
ヤコボシ	59
ヤシキ	20, 90
屋敷神	24
屋敷墓	26
ヤッカガシ	73
ヤド	79
屋根替え	17, 37, 59
屋根屋	36
ヤビマチ	41
ヤヒロイ(矢拾い)	10, 58, 97
ヤマ(畑)	24, 63, 66
山の神	49, 52, 58, 96
山の神講	60, 73
ヤマノカミサン	25
山の世話	53

〈ゆ〉	
唯念名号碑	101
ユウジャ	67
ユカケ(湯かけ)	80, 83
弓矢	58
ユメジラセ	88
夢枕	74
ユルリ	35

〈よ〉	
養蚕	35, 66
ヨウジャ	33, 67, 69
ヨウスイ(用水)	20, 64, 70, 85, 92
ヨウハン	67
ヨコザ	32
ヨコミゾセギ	50
余所行	87
嫁入り道具	86

〈り〉	
リュウタツ	90

〈れ〉	
霊	75

〈ろ〉	
老人会	61
老人クラブ	99
ロクシャク	91

〈わ〉	
ワカミズ	71
ワキ(脇)	15

七つのお祝い	82
七本塔婆	92
七日正月	71
ナベヤキ	68
ナマス	76
成り木責め	72
ナリモウソウ	72
ナワシロ	65
ナンド(納戸)	27,80

〈に〉

ニアゲ	73
新田さん	101
二番正月	72
ニワ	27,31,72

〈ね〉

ネネミ	81
ネンカイ(年回)	93
念仏	100
念仏講	79,92

〈の〉

野位牌	92
農休み	61,65
ノコギリガマ	65
ノズキ(覗き)	87
ノチザン(後産)	80
野辺送り	91
ノボリセギ(上り堰)	12
ノラ	67

〈は〉

バイパス	94
墓掃除	74
墓参り	74
ハカミチ(墓道)	22
ハクピシン	17
バクメシ(麦飯)	67
箱根神社	56
ハダイ	65
機織り	35,84
畑作	63
ハチマンサン	24
ハツウマ	73
二十日正月	73
ハツゴ	79
初節句	48,75,81
初詣	96
ハツヤマ	71

ハデヤー	64
馬頭観音さん	61
ハナカゴ(花籠)	89,91
花園橋	84
ハナダンゴ(花園子)	89
ハナレ(離れ)	22
ハマオリ(浜降り)	89,91
ハラ	94
バリキ	36
ハリサシ	37
バンツキヤ	68
ハンデヤー(飯台)	70

〈ひ〉

ヒイナサン(雛人形)	81
彼岸	74
ヒキモノ	81,93
筆頭総代	96
ヒト	59,89
ヒトアサ(一朝)	84
ヒトナノカ	92
ヒドリ(日取り)田植	54
雛節句	75
ヒネブツ(日念仏)	61,100
火の見やぐら	61
ヒャーヤ	21
ヒャクヒトエ	81
百万遍	61,88
ヒャッカナンチ	93
ヒョウゴ(掛軸)	96
ヒヨケ(日覆)	91
広場	49
ヒロマ	27

〈ふ〉

フカダ(深田)	64
富二平橋	8
付属屋	21
仏壇	28
不動	54
不動経	87
不動講	52
不動さま	49,58,100
フナイワイ	61,87
フレ(触れ)	11,12
風呂	32
ブンコグラ(文庫蔵)	22
フンゴミ	33

〈へ〉

米寿の祝い	88
ヘツツイ	23
弁天様	22

〈ほ〉

法印さん	101
ハウエン(法印)	62,84
奉公	53
抱瘡	79
ハウソウイワイ(抱瘡祝い)	83
ハウソウガミ(抱瘡神)	83
ハウソウダナ(抱瘡棚)	83
抱瘡のヤマアゲ	83
ハウソウマンジュウ(抱瘡饅頭)	83
ハウソダナ	28
ホシイモ(干し芋)	69
ホシダイコン(干し大根)	69
ホトケサン	72
盆	75
盆踊り	51
盆棚	75
ホンヤ	21

〈ま〉

枕経	90
枕団子	88
枕飯	88
髻	87
間取り	26
マブリ	80
マメマキ	73
魔除け	88
マルブキ	36
マンガアライ(馬鉄洗い)	65,75
まんじゅう	74
マンノウグワ	64

〈み〉

見合い	85
水争い	55
水喧嘩	13
ミズナワシロ	65
水番	55
味噌	70
ミソカソバ	77
ミッカセギ(三日堰)	12
ミツメ	87

湿田……………64
 死装束……………90
 地主と小作……………53
 芝キリ……………52
 しめ飾り……………77
 しめ縄……………73
 シモ……………94
 下モヨリ……………9
 重（重箱）……………79,83
 ジュウカケ（重かけ）……………86
 シュウゲン（祝言）……………34,86
 十五夜……………76
 十五夜花……………76
 十三仏……………100
 十三夜……………76
 正月……………71
 正月飾り……………28
 正月準備……………77
 鐘馗サン……………81
 ジョウグチ……………20,91
 ジョウヅカイ（常使い）……………11
 醤油……………70
 定輪寺……………45,46,48,80,94,95
 ジョーグチ……………75
 ジロウツイタチ……………73
 シロカキ……………64
 シンキヤク……………82
 新戸……………9,10,52
 神明さま……………101

〈す〉
 水車……………57
 水田……………63
 ズガニ……………69
 杉田の子安さん……………80
 スジヒキ……………65
 スジヒキボウ……………65
 ススハキダンゴ……………77
 煤払い……………77
 炭焼き……………15,62
 スワリボタモチ……………87

〈せ〉
 青年団……………53,61
 西洋ベッスイ……………71
 セギ（堰）……………55,84
 赤飯……………76
 セギ費……………55
 セドグチ……………28
 セナザワ……………13

先祖……………75
 センゾサン……………94
 千人針……………84
 千福ニュータウン……………17

〈そ〉
 葬儀費用……………98
 葬式……………98
 葬式組……………59
 ソウニ……………71
 ソートメ……………65
 ソトエン……………27
 ソトベンジョ（外便所）……………22,77
 蕎麦……………67
 ソバガキ……………68

〈た〉
 大黒……………101
 大黒様……………77
 大師講……………60,100
 ダイジン……………72
 大神宮さま……………77,101
 ダイジンサン……………28
 ガイドコ……………27
 タイヒゴヤ……………22
 松明……………75
 ダイロクテンサン……………25
 田植え……………65
 高島田……………87
 ダシバン……………32
 タタキイシ……………31
 タテマエ（建前）……………41,60
 タナオサメ（棚納め）……………83
 棚経……………98
 七夕……………75
 種もみ……………65
 タバコの乾燥室……………24
 タワライシ（俵石）……………84
 だんご……………74
 ダンゴサン……………90
 檀徒総代……………98

〈ち〉
 チ（地質）……………66
 チウシ（乳牛）……………22
 チカラモチ（力餅）……………91
 チャコンブクロ
 （茶米袋、茶小袋）……………86,87
 チャノマ……………27
 チャメシ（茶飯）……………88,92

チョウツバ……………24
 微馬……………18

〈つ〉
 ツカイミズ（生活用水）……………39,55
 月並……………60
 ツキヤ……………56,67
 ツクリバ……………93
 ツケダワラ（付け俵）……………16
 ツツカケ（ツツカギ）……………32
 ツブシムギ……………67

〈て〉
 鉄瓶……………71
 テブソク（出不足金）……………12,85
 デミマイ……………79
 テラユキ（寺行き）……………89
 テルニューバイ
 （照入梅＝日照り）……………58
 テロ……………76
 テンジンサン……………24

〈と〉
 トイバライ……………93
 道祖神……………49,52
 豆腐……………76
 棟梁送り……………41
 トオリ（通り）……………21
 床の間……………77
 年神様……………77
 土葬……………93
 富沢青年団……………82
 トムライ……………34,88,90
 寅年生まれ……………84
 トリアゲバアサン
 （取り上げ婆さん）……………79,80
 トリイマイリ（鳥居参り）……………81
 ドンドンヤキ……………52,72,98
 トンボグチ……………27,73,86

〈な〉
 ナカザシキ……………86
 ナカバシラ（中柱）……………27,83
 ナカミチ……………49
 ナカヤカイドウ……………8,84
 ナキャ……………27,86
 仲人……………79,85
 名付け……………81
 ナナクサガイ……………71
 魚子（ななこおり）……………87

カドグチ……………83
 カニジル（蟹汁）……………69
 カネオヤ
 ……45,46,53,71,79,81,85
 釜飯……………71
 カマヤ……………22
 カミゼキ……………55
 カミナントウ……………94
 カミベンジョ……………31
 カヤ（茅）……………36,59
 カヤバ（萱場）……………16,36,55
 カヤムジン（茅無尽）……………55
 カリモン（仮門）……………89,90
 カロウト……………91,93,95
 カワ……………70,91
 カワバタ（川端）……………13,40,77
 カワラケ……………58
 ガン（棺）……………93,95
 元旦……………71
 元旦祭り……………54,96
 関東大震災……………14
 観音講……………60
 観音坂……………93
 観音さん……………77,100
 願はたし……………100

〈き〉

黄瀬川……………91
 北枕……………88
 キチュウ……………91
 キチュウマイ（忌中見舞い）
 ……89
 キツネ（狐）……………18,49,74
 狐伝説……………74
 キノハカキ……………71
 キノハッカゴ（木の葉籠）…16
 キャーキリバ（カイキリバ）23
 キャーコン（開墾）……………15,17
 キヤード（カイド）……………20
 逆修供養塔……………94
 キュウコ（旧戸）……………48,52,58
 旧暦……………75,76
 行商……………44,62
 共同井戸……………70
 共有財産……………52
 共有地……………49
 キリコミ……………68
 キリダメ……………70
 キリバン……………71

〈く〉

クグリ……………28
 草刈り相撲……………61
 草の葉（モチグサ）……………69
 草餅……………75
 クサヤネ……………23
 クジ……………73
 クズマイ……………69
 クチキキ（口利き）……………85
 区費……………53
 クラ……………23
 クラガミ……………25,77
 クラブ（青年倶楽部）
 ……49,51,61,84
 クロ……………13,16
 クロッカニ……………14
 桑摘み……………67
 クンチモチ……………77

〈け〉

競馬……………62
 ケコミ……………28
 ケズリバナ……………71
 兼業化……………63

〈こ〉

鯉織……………75
 コウゴト……………35
 甲州街道……………50,95,101
 コウジン（荒神）28,72,77,101
 庚申塚……………61,101
 庚申塔……………50
 公民館……………49,51,53
 コエフミノウシ（肥踏みの牛）
 ……24
 コーチセギ（耕地堰）……………12
 五月五日……………75
 ゴカンニチ……………71
 ゴクウ……………76
 コクグラ（穀蔵）……………22
 国道二四六線……………9
 極楽寺……………50
 コグリ……………27
 コシ（輿）……………91,93
 コシアゲ（アナホリ）…59,90
 輿台……………90
 ゴシュクガン（御宿願）82,87
 コショウヅケ（小姓付け）…86
 御先祖様……………77
 コニダ（小荷駄）……………16

コノメ……………35
 コブン（子分）…45,52,53,85
 ゴボウウマキ……………77
 コマンザライ（熊手）……………15
 小麦……………18
 小麦まんじゅう……………65
 米蔵……………77
 コモ（薦）……………82
 子安講……………79
 子安さん……………49,82,87
 子安さん（淡島講）……………99
 子安さん（子安地藏尊）…79
 子安堂……………51
 金比羅さん……………101

〈さ〉

サイトヤキ……………71,88
 さいの神……………97
 サカイガワ……………53
 境の松……………49
 サカズキ……………86
 サクラバタ……………84
 サクヲキッテ……………18
 サケ……………85
 笹……………77
 サシカエ（サシガヤ）…36,54
 ザシキ（座敷）…26,80,86,90
 サシミズ（差し水）……………14
 サツマ（薩摩芋）
 ……15,17,18,62,66,76
 サツマグラ……………24
 サト（里）……………17
 里芋……………76
 佐野小学校……………84
 サルッコウ（猿）……………63
 サンアザキョウユウニウカイ
 （三字共有入会）……………16
 サンガニチ……………71
 棧俵……………83

〈し〉

ジ（地）……………64
 シオダチ……………81
 四月三日……………75
 四十九日……………92
 四十七人区……………16
 ジスイ（地水）……………12,64
 シズオカハク……………17
 地鎮祭……………41
 ジツキ……………41,60

〈あ〉

アカデロ……………66
 アカマサ（赤土のこと）…17
 アガリザク……………65
 アガリダン（アガリハナ）…28
 秋葉講……………101
 アサクサ（朝草）……………67
 アサメシ……………67
 愛鷹神社……………48,83,84,96
 愛鷹山……………7,84
 愛鷹山共有地……………54
 愛鷹山森林組合……………15
 アシナガゾウリ（足半草履）90
 アシナガゾウリ……………90
 小豆粥……………72
 アズキガユ……………72
 穴堰……………12,84
 アナッポリ（穴掘り）
 ……89,90,92,93
 雨乞い……………54,58,100
 淡島講……………79
 庵寺……………99
 アンデラサン（庵寺さん）
 ……49,51,61,84

〈い〉

イイ田植え……………56
 イイツギ……………85
 イイツタエ（言い伝え）59,88
 イエ……………85
 イエナ（屋号）……………48
 イキヤクシ……………94
 伊勢参り……………61,87
 イセミヤさん……………87
 イタク……………21
 一番鶏……………66
 イッスイキ（一回忌）…93
 井戸……………70,77
 稲作……………63
 稲荷……………74
 稲荷神……………74
 イナリサン……………24
 稲刈り……………65
 位牌分け……………44
 イマ（居間）……………90
 イモアライ……………72
 イヤ……………21
 炒り鍋……………69
 イロリ……………27
 インキョ……………34,45,48

隠居寺……………99

〈う〉

ウグシ（棟）……………38
 ウシ（稲架）……………65
 牛……………76
 氏子総代……………96
 うどん……………67
 産飯……………80
 産湯……………80
 馬……………18,76
 ウマゴヤ……………22
 ウマヤ……………23,84
 ウラカイドウ……………62
 ウワガワラ……………84

〈え〉

エエナ（家名）……………9
 疫病……………88
 江戸樓……………87
 江原素六……………15
 エビス……………72
 恵比寿……………77,101
 恵比寿講……………76,101
 エビスサン……………28
 エブリ棒……………64
 エマシムギ……………67

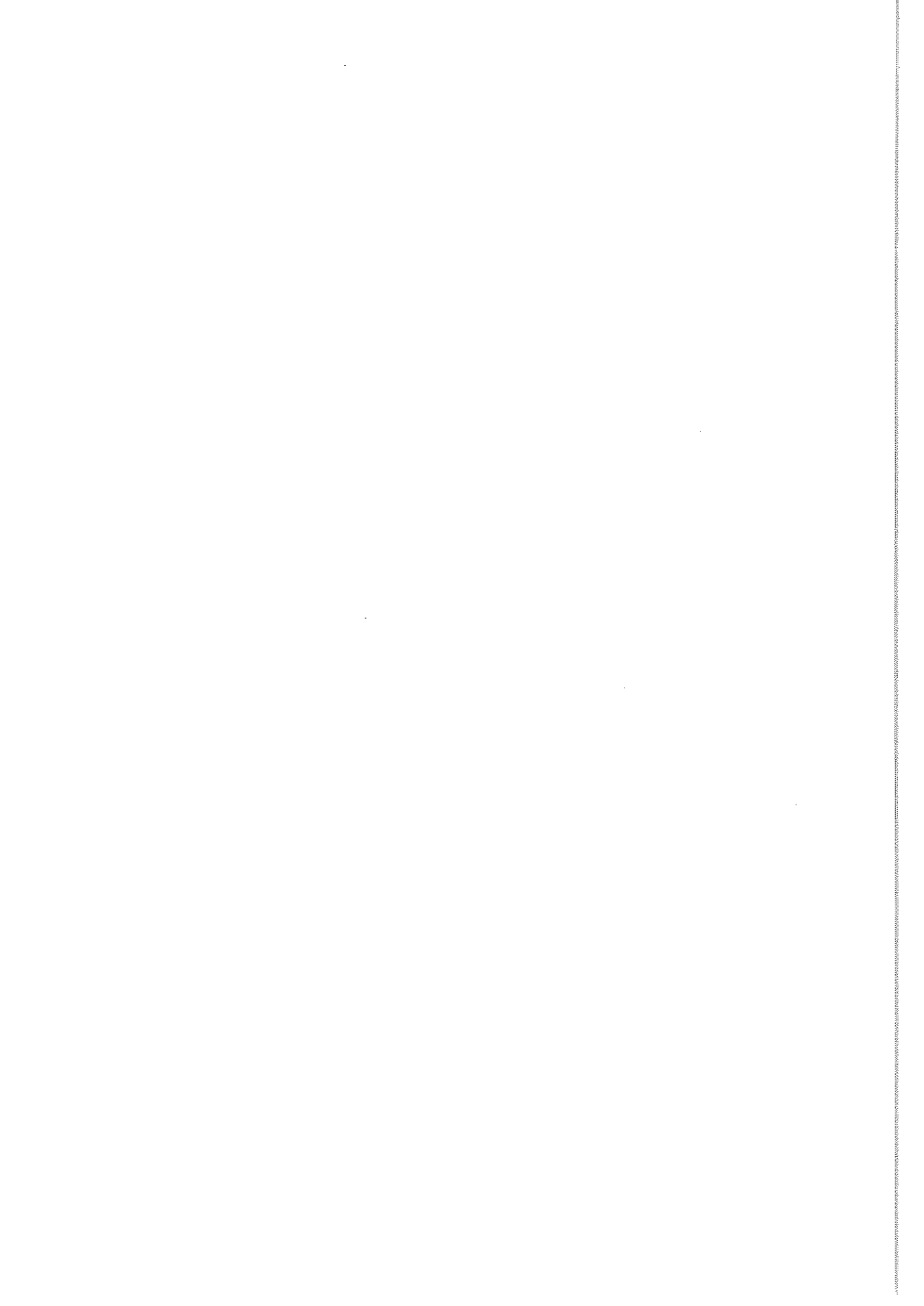
〈お〉

オイザク……………65
 オイセンサン（オイセミヤサン）
 ……26
 オイベッサン……………76
 オオカワ（黄瀬川）…92
 大そうじ……………39
 オオド……………27
 オオドエ……………90
 オオニューカイ（大入会）…15
 大念仏……………74
 オオブルマイ……………43
 大晦日……………77
 大山講……………60,101
 お飾り……………60
 オカザリ……………72
 オカシバ……………75
 オカタミ……………87
 オカナワシロ……………65
 オカンノンサン……………26
 オキ（沖）……………15,17
 オクザシキ……………86

オクナンド……………87
 送り団子……………76
 オコウボウサン……………74
 お産婆さん……………79,80
 お七夜……………81
 オシヤクモツサン……………25
 オショウバン（お相伴）…87
 オセチ……………71
 オソナエワリ……………72
 オダイ……………86
 オチャハン……………73
 雄蝶雌蝶……………86
 オツウヤ（お通夜）…88,90
 オッサンノネンシ
 （坊さんの年始）…71
 オデューヤ……………53
 オテントサン……………84,100
 男衆……………92
 屋内神……………28
 オハタシ……………74
 オハチ……………86
 オビイワイ……………79
 お百度参り……………87
 オヒョウゴ……………58
 オヒル……………67
 オフドウサン（お不動さん）
 ……61,74,82,87
 オフルマイ（お振る舞い）
 ……10,61,73,74,76,79,81,87
 お盆……………35
 お宮さん……………61
 お明神さん盆……………76
 オメシレシヤ（御飯列車）…67
 オモテ……………21,91
 オヤネブツ……………44,92
 オヤブン（親分）45,52,53,85
 オンナシュウ（女衆）…87,89

〈か〉

カイコン（開墾）…63,66,69
 カオミセ……………86
 ガキバアサン（餓鬼婆さん）
 ……87,99
 カクガンボラ……………94
 カジカ……………14
 頭付きの魚……………76
 カゼダンゴ……………28,72
 風の婆さん……………100
 片見月……………76
 カツノキ……………72



索 引